

芥川龍之介の世界II
(多彩な短編集)

目次

はじめに

芥川龍之介の世界II
(多彩な短編集)

- 一、 仙人 I
 - 二、 仙人 II
 - 三、 仙人 III
 - 四、 杜子春とししゆん
 - 五、 女仙によせん
 - 六、 女体
 - 七、 蜜柑みかん
 - 八、 運
 - 九、 鼻
 - 十、 芋粥いもがゆ
 - 十一、 河童
 - 十二、 遺言
- ※ 参考文献

仙人その他

目次

仙人I

- 一、 口入れ屋の店先に「仙人になりたい」という人が現われる。
- 二、 番頭は近所にある医者の所へと出かけて行って話をすると、
- 三、 権助は二十年間その医者の家に一文の給金なしで使われる。
- 四、 権助を松の木へ高く登らせ右手を次に左手を離せと命じる。

仙人II

- 一、 この「仙人」は琵琶湖に近い〇町の裁判官を勤めていて、彼の道楽は何よりも先に古い瓢箪を集めることであつた。

仙人III

- 上、 李小二という見世物師は、野天で鼠に芝居をさせて商売をしていた。
- 中、 雨に降られ廟に駆け込むと、其所には道服を着た一人の老道人が：
- 下、 老道人は実は仙人であり、李小二は彼の仙術で巨万の富を得る。

杜子春

- 一、 若者と仙人
 - 二、 蛾眉山の魔性たち
 - 三、 新たな生活
- 参考文献——
- 一、 若者と老人との出会い
 - 二、 大金持ちになつた杜子春は：
 - 三、 仙人になりたいと：
 - 四、 蛾眉山の魔性たち
 - 五、 魂は、地獄へと：
 - 六、 新たな生活

女仙

女体

*

*

仙人
I

仙人 I

一、口入れ屋の店先に「仙人になりたい」という人が現われる

皆さん。私は今大阪にいます、ですから大阪の話をしませう。——昔、大阪の町へ奉公に来た男がありました。名は何と言ったかわかりません。ただ飯炊奉公に来た男ですから、権助とだけ伝わっています。

権助は口入れ屋の暖簾をくぐると、煙管を啣えていた番頭に、こう口の世話を頼みました。「番頭さん。私は仙人になりたいのだから、そういう所へ住みこませて下さい」と言うのと、番頭は呆氣にとられたように、しばらくは口も利かずにはいました。「番頭さん。聞えませんか？ 私は仙人になりたいのだから、そういう所へ住みこませて下さい」と言うのと、「まことに御気の毒様ですが……」と、番頭はやつといつもの通り、煙草をすばすば吸い始めました。「手前の店ではまだ一度も、仙人なぞの口入れは引き受けた事はありませんから、どうかほかへ御出でなすって下さい」と言うのであった。

すると権助は不服そうに、千草の股引の膝をすすめながら、こんな理窟を言い出しました。「それはちと話が違うでしょう。御前さんの店の暖簾には、何と書いてあると御思いなさる？ 万口入れ所と書いてあるじゃありませんか？ 万と言うからは何事でも、口入れをするのがほんとうです。それともお前さんの店では暖簾の上に、嘘を書いて置いたつもりなのですか？」と言うのであった。

二、番頭は近所にある医者 of 所へと出かけて行って話をすると

なるほどこう言われて見ると、権助が怒るのももつともです。「いえ、暖簾に嘘がある次第ではありません。何でも仙人になれるような奉公口を探せとおっしゃるのなら、明日また御出で下さい。今日中に心当りを尋ねて置いて見ますから」と、番頭はとにかく一時逃れに、権助の頼みを引き受けてやりました。が、どこへ奉公させたら、仙人になる修業が出来るか、もとよりそんな事なぞはわかるはずがありません。ですから一まず権助を返すと、早速番頭は近所にある医者 of 所へ出かけて行きました。そうして権助の事を話してから、「いかががでしょうか？ 先生。仙人になる修業をするには、どこへ奉公するのが近路でしょうか？」と、心配そうに尋ねました。

これには医者も困ったのでしよう。しばらくはぼんやり腕組みをしながら、庭の松ばかり眺めています。が番頭の話や聞くと、直ぐに横から口を出したのは、古狐という渾名のある、狡猾な医者 of 女房です。「それはうちへおよこしよ。うちにいれば二三年中には、きつと仙人にして見せるから」と言うので、「左様ですか？ それは善い事を伺いました。では何分願います。どうも仙人と御医者様とは、どこか縁が近いような心もちが致して居りましたよ」と、何も知らない番頭は、しきりに御時宜を重ねながら、大喜びで帰りました。——医者は苦い顔をしたまま、その後を見送っていました。が、やがて女房に向いながら、「お前は何という莫迦な事を言うのだ？ もしその田舎者が何年いても、一向仙術を教えてくれぬなぞと、不平でも言い出したら、どうする気だ？」と忌々しそうに小言を言いました。しかし女房はあやまる所か、鼻の先でふふんと笑いながら、「まあ、あなたは

黙っていらつしやい。あなたのように莫迦正直では、このせち辛い世の中に、御飯を食べる事も出来はしません」と、あべこべに医者をやりにこめるのです。

三、権助は二十年間、その医者之家に一文の給金なしで使われる

さて明るる日になると約束通り、田舎者の権助は番頭と一しよにやって来ました。今日はずすがに権助も、初の御目見えだと思つたせいか、紋附の羽織を着ていますが、見た所はただの百姓と少しも違つた容子はありません。それが返つて案外だったのでしよう。医者はまるで天竺から来た麝香獸でも見る時のように、じろじろその顔を眺めながら、「お前は仙人になりたいのだそうだが、一体どういう所から、そんな望みを起したのだ？」と、不審そうに尋ねました。すると権助が答えるには、「別にこれという訣もございませんが、ただあの大阪の御城を見たら、太閤様のように偉い人でも、いつか一度は死んでしまふ。して見れば人間というものは、いくら栄耀栄華をしても、果ないものだと思つたのです」と言ふと、「では仙人になれさえすれば、どんな仕事でもするだらうね？」と、狡猾な医者こつかつの女房は、隙かさず口を入れました。「はい。仙人になれさえすれば、どんな仕事でもいたします」、「それでは今日から私の所に、二十年の間奉公おし。そうすればぎつと二十年目に、仙人になる術を教えてやるから」、「左様でございますか？ それは何より難有うございます」、「その代り向う二十年の間は、一文も御給金はやらないからね」、「はい。はい。承知いたしました」と応えるのであつた。

それから権助は二十年間、その医者之家に使われていました。水を汲む。薪を割る。飯を炊く。拭き掃除をする。おまけに医者が外へ出る時は、薬箱を背負つて伴をする。――その上給金は一文でも、くれと言つた事がないのですから、このくらい重宝な奉公人は、日本中探してもありません。が、とうとう二十年たつと、権助はまた来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出ました。そうして慇懃に（物腰が丁寧で礼儀正しく）二十年間、世話になつた礼を述べました。「ついでに兼ね兼ね御約束の通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教えて貰いたいと思ひますが」と言ふのであつた。権助にこう言われると、閉口したのは主人の医者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使つた後ですから、いままら仙人術は知らぬなぞとは、言えた義理ではありません。医者はそこで仕方なしに、「仙人になる術を知っているのは、おれの女房の方だから、女房に教えて貰うが好い」と、素っ気なく横を向いてしまいました。

四、女房は権助に松の木へ高く登らせ左手を次に右手を離すように命じる

しかし女房は平気なものです。「では仙術を教えてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の言う通りにするのだよ。さもないと仙人になれないばかりか、また向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐに罰が当つて死んでしまふからね」と言うので、「はい。どんなむずかしい事でも、きつと仕遂て御覧に入れます」と、権助はほくほく喜びながら、女房の言いつけを待っていました。「それではあの庭の松に御登り」と、女房はこう言いつけました。もとより仙人になる術なぞは、知っているはずがありませんから、何でも権助に出来そうもない、むずかしい事を言いつけて、もしそれが出来ない

時には、また向う二十年の間、ただで使おうと思ったのでしよう。しかし権助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登りました。「もつと高く。もつとずっと高く御登り」と、女房は縁先に佇みながら、松の上の権助を見上げました。

権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢にひらめいています。「今度は右の手を御放し」と言われて、権助は左手にしっかりと、松の太枝をおさえながら、そろそろ右の手を放しました。「それから左の手も放しておしまい」と言うので、「おい。おい。左の手を放そうものなら、あの田舎者は落ちてしまわず。落ちれば下には石があるし、とても命はありやしない」と、医者もとうとう縁先へ、心配そうな顔を出しました。「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。――さあ、左の手を放すのだよ」と、権助はその言葉が終らない内に、思い切って左手も放しました。何しろ木の上に登ったまま、両手とも放してしまっただけですから、落ちずにいる訣はありません。あつと言う間に権助の体は、権助の着ていた紋附の羽織は、松の梢から離れました。が、離れたと思うと落ちもせず、不思議にも昼間の中空で、まるで操り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？

「どうも難有うございます。おかげ様で私も一人前の仙人になれました」と、権助は叮嚀に御時宜をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまいました。――医者夫婦はどうしたか、それは誰も知っていません。ただその医者の庭の松は、ずっと後までも残っていました。何でも淀屋辰五郎は、この松の雪景色を眺めるために、四抱えにも余る大木をわざわざ庭へ引かせたそうです。(完)

*

*

さて、この「作品」で最も大事なところは、なぜ権助という人は「仙人になりたい」と思うようになったかと問えば、それは、「……別にこれという訣もございませんが、ただあの大阪の御城を見たら、太閤様のように偉い人でも、いつか一度は死んでしまう。して見れば人間というものは、いくら栄耀栄華をしても、果ないものだと思った」からである。そこで、権助は二十年間、その医者の家でひたすら水を汲んだり、薪を割ったり、飯を炊いたり、拭き掃除をしたり、さらに医者が外へ出る時には、薬箱を背負ってお伴をしましたが、その二十年間、一文の給金もなしで使われることになったと共に、権助自身、「給金を一文でもくれと言ったことはなかった」のである。

つまり、権助という人は、この世での「栄耀栄華」(俗世での実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に貪る俗人)であるよりは、むしろこの俗世での実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に貪る俗人から「解脱した仙人」になりたいということであり、しかも、実際、二十年間、俗世での実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に貪る俗人からは完全に離れた生活をしていたのである。

やがて、「……二十年たつと、権助はまた来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出ました。そうして慇懃に(物腰が丁寧で礼儀正しく)二十年間、世話になった札を述べました」。そして、「……ついでには兼ね兼ね御約束の通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教えてくださいませんか」と言うのであるが、ここで最も大事な言葉は、「……今日は私にも、不老不死になる仙人の術を教えてくださいませんか」という言葉であり、権助という人はもちろん「仙人になりたい」ということであるが、

その「仙人になって何がしたいのか？」と問えば、それは、巨万の富を得ることも、異性にもてたいという事でもなく、この世での「栄耀栄華」(俗世での実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に貪る俗人)であるよりは、むしろこの俗世での実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に貪る俗人から解脱した「不老不死の仙人」になりたいということなのである。

さて、医者の方房は、「では仙術を教えてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の言う通りにするのだよ」と言う、権助は、「はい。どんなむずかしい事でも、きつと仕遂て御覧に入れます」と言い、「それではあの庭の松に御登り」、「もつと高く、もつとずつと高く御登り」と、女房は縁先に佇みながら、松の上の権助を見上げました。

権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢にひらめいていました。「今度は右の手を御放し」と言われて、権助は左手にしっかりと、松の太枝をおさえながら、そろそろ右の手を放しました。「それから左の手も放しておしまい、さあ、左の手を放すのだよ」と、権助はその言葉が終らない内に、思い切って左手も放しました。本来であれば、両手を離せば必ず下に落ちる筈であるが、不思議にも昼間の中空で、まるで操り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？(もちろん、このようなことは科学的には証明でき難いことではあるが、しかし、このようなことが出来るようになることが、まさに不思議な「仙術」が身について来たということになるのである。)

「どうも難有うございます。おかげ様で私も一人前の仙人になりました」と、権助は叮嚀に御時宜をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行っていました。――医者夫婦はどうしたか、それは誰も知っていません。ただその医者の庭の松は、ずつと後までも残っていました。何でも淀屋辰五郎は、この松の雪景色を眺めるために、四抱えにも余る大木(その松の木)をわざわざ(自分の)庭へ引かせたそうです。

ところで、なぜ「医者の家」であったのかと問えば、それは、医者は、不思議な「仙術」を用いて人の命を助けることができ得るが、仙人は、不思議な「仙術」を用いて、色々なことができ得るということで、どこか共通したところがあり、それを本文で見ると、「……どうも仙人と御医者様とは、どこか縁が近いような心もちが致して居りましたよ」となるのである。(完)

*

*

仙人
II

仙人Ⅱ

この「仙人」は琵琶湖に近い〇町の裁判官を勤めていた。彼の道楽は何よりも先に古い瓢箪を集めることだった。従って彼の借りていた家には二階の戸棚の中は勿論、柱や鴨居に打った釘にも瓢箪が幾つもぶら下っていた。

三年ばかりたった後、この「仙人」は〇町からH市へ転任することになった。家具家財を運ぶのは勿論彼には何でもなかった。が、彼は二百余りの瓢箪を運ぶことだけではどうすることも出来なかった。「汽車に積んでも、馬車に積んでも、無事には着かないのに違いない」と思うのであった。

この仙人はいろいろ考えた揚句、とうとう瓢箪を皆括り合わせ、それを琵琶湖の上へ浮かせて舟の代りにすることにした。(その又瓢箪舟の中心になったのはやはり彼の「掘り出して来た」遊行柳の根っこだった)。天気は丁度晴れ渡った上、幸い風も吹かなかった。彼はこういう瓢箪舟に乗り、彼自身棹を使いながら、静かに湖の上を渡って行った。

昔の仙人は誰も皆不老不死の道に達している。しかしこの「仙人」だけは世間並みにだんだん年をとり、最後に胃癌になってしまった。何でも死ぬ前夜には細り切った両手をあげ、「あしたあたりはお目出度になるだろう。万歳！」と言ったと言うことである。しかし彼の遺言状は生死を超越しない俗人よりも更に綿密だったと言うことである。尤も彼の遺族たちはこの「仙人」の遺言状を「忠実には守らなかつたらしい。のみならず彼の瓢箪を目当てに彼の南面を習っていた年少の才子もない訣ではなかった。従って彼の愛していた彼は二百余りの瓢箪は彼の一周忌をすまないうちにいつかどこかへ流れ出してしまった。(完)

*

*

さて、この「作品」で興味深いところは、一度(恐らく)修行をして仙人になった人が、再び、俗世間に戻って来て「裁判官」をしている所であるが、これは、何も特別なことではなく、例えば、一度、出家をして山や寺などで厳しい修行をした後、再び、俗世間に戻って来て「公務員や民間企業」などに就職するようなことは幾らでもあり得ることであり、しかも、彼の道楽は何よりも先に古い瓢箪を集めることであつたとある。だとすれば、この「仙人」は、俗世からの「完全なる解脱者」ではなく、つまり、「仙人」にも当然「ピシ」からキリまで(上位から下位まで)があり、この「仙人」は、いわば「中位から下位」くらいの仙人であり、それゆえ、未だ「煩惱」(俗世の様々な「欲望や感情」など)のまだ残っているという設定になっているかと思う。

この「仙人」は琵琶湖に近い〇町の裁判官を勤めていたが、三年ばかりたった後、この「仙人」は〇町からH市へ転任することになった。家具家財を運ぶのは勿論彼には何でもなかった。が、彼は二百余りの瓢箪を運ぶことだけではどうすることも出来なかった。「汽車に積んでも、馬車に積んでも、無事には着かないのに違いない」と思い悩み、いろいろ考えた揚句、この仙人は、とうとう瓢箪を皆括り合わせ、それを琵琶湖の上へ浮かせて舟の代りにすることにした。(つまり、この様な所にも彼の執着、《煩惱》が如実に顕れているかと思うが、琵琶湖に瓢箪舟《大小様々な瓢箪》を浮かべ、彼自身棹を使いながら、

静かに湖の上を渡って行ったとある。)

ところで、『……昔の仙人は誰も皆不老不死の道に達していた』とある。これは(恐らく)、昔は、不老不死の道に達している人を(真の)「仙人」(上位の仙人)と呼び、そこまで達していない「仙人」は、いわば「中位から下位の仙人」ということになるだろう。そして、登場人物の「仙人」(いわば「中位から下位の仙人」という人は、当然(不老不死の道にまで達していないので)、やがて世間並みにだんだん年をとり、最後は胃癌になってしまった。何でも死ぬ前夜には細り切った両手をあげ、「あしたあたりはお目出度になるだろう。万歳!」と言ったとある。

これは、非常に興味深いところであり、この「仙人」は、当然、仙人になるための厳しい修行を何年も積み重ねたかと思うが、その場合、彼は、「……不老不死の仙人になることをひたすら願っていたが、そこまで到達できなかったのか?」、それとも、最初から「不老不死の仙人になることなどはもとより願ってもいなかったのか?」。そのどちらかだと思いが、ともかく、この「仙人」は、やがて世間並みにだんだん年をとり、最後は胃癌になってしまった。何でも死ぬ前夜には細り切った両手をあげ、「あしたあたりはお目出度になるだろう。万歳!」と言ったと言う。だとすれば、「不老不死の仙人である」よりも、むしろ「死ぬことのできる人間である」ことを願ったのかも知れない。それがまさに細り切った両手をあげ、「……あしたあたりはお目出度になるだろう。万歳!」と言った言葉になるのかも知れない。

そして、彼の遺言状は生死を超越しない俗人よりも更に綿密だったと言うことである。(此処にも彼の執着や煩惱が顕れている)。尤も彼の遺族たちはこの「仙人」の遺言状を一々忠実には守らなかつたらしい。のみならず彼の瓢箪を目当てに彼の南画を習っていた年少の才子もない訣ではなかつた。(これは才子たちに南画なども教えていたが、その才子の中には彼の南画より彼の瓢箪を目当てに習に來ていた年少の才子もない訣ではなかつたのである)。従って彼の愛していた彼は二百余りの瓢箪は彼の一周忌をすまないうちにいつかどこかへ流れ出してしまった。(つまり彼は二百余りの瓢箪はそのまま大事に保管《保存》されたのではなく、むしろ色々な人たちの手の中へと流れ出してしまったという事である。それは、彼の「遺言書」の中には(恐らく)「……彼は二百余りの瓢箪はそのまま大事に保管《保存》せよ」と書かれていたに違いないが、彼の遺族たちはこの「仙人」の遺言状を一々忠実には守らなかつたという事である。(完)

*

*

仙人Ⅲ

仙人Ⅲ

上、李小二という見世物師は、野天で鼠に芝居をさせて商売をしていた

いつごろの話だか、わからない。北支那の市から市を渡って歩く野天の見世物師に、李小二という男があった。鼠に芝居をさせるのを商売にしている男である。鼠を入れて置く囊が一つ、衣装や仮面をしまつて置く筈が一つ、それから、舞台の役をする小さな屋台のような物が一つ――そのほかには、何も持っていない。

天気がいいと、四つ辻の人通りの多い所に立って、まず、その屋台のような物を肩へせる、それから、鼓板を叩いて、人よせに、謡を唱う。物見高い街中の事だから、大人でも子供でも、それを聞いて、足を止めない者はほとんどない。さて、まわりに人の牆が出て来ると、李は囊の中から鼠を一匹出して、それに衣装を着せたり、仮面をかぶらせたりして、屋台の鬼門道から、場へ上らせてやる。鼠は慣れていると見えて、ちよこちよこ、舞台の上を歩きながら、絹糸のように光沢のある尻尾を、二三度ものものしく動かして、ちよいと後足だけで立って見せる。更紗の衣裳の下から見える前足の蹠がうす赤い。――この鼠が、これから雑劇の所謂楔子を演じようという役者なのである。

すると、見物の方では、子供だと、始から手を拍って、面白がるが、大人は、容易に感心したような顔を見せない。むしろ、冷然として、煙管を啣えたり、鼻毛をぬいたりしながら、莫迦にしたような眼で、舞台の上に周旋する鼠の役者を眺めている。けれども、曲が進むのに従って、錦切れの衣裳をつけた正旦の鼠や、黒い仮面をかぶった浄の鼠が、続々、鬼門道から這い出して来るようになると、そうして、それが、飛んだり跳ねたりしながら、李の唱う曲やその間へはいる白につれて、いろいろ所作をするようになる。見物もさすがに冷淡を装っていらなくなると見えて、追々まわりの人だかりの中から、子大などという声が、かかり始める。すると、も、いよいよ、あぶらがのつて、忙しく鼓板を叩きながら、巧に一座の鼠を使いわけける。そうして「沈黒江明妃青塚恨、耐幽夢孤雁漢宮秋」とか何とか、題目正名を唱う頃になると、屋台の前へ出してある盆の中に、いつの間にか、銅銭の山が出来る。……………

が、こういう商売をして、口を糊してゆくのは、決して容易なものではない。第一、十日と天気が悪いと口が干上ってしまう。夏は、麦が熟す時分から、例の雨期へはいるので、小さな衣裳や仮面にも、知らないうちに黴がはえる。冬もまた、風が吹くやら、雪がふるやらするので、とかく、商売がすたり易い。そういう時には、ほかに仕方もないから、うす暗い客舎の片すみで、鼠を相手に退屈をまぎらせながら、いつもなら慌しい日の暮を、待ちかねるようにして、暮してしまふ。鼠の数は、皆で、五匹で、それに李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方知れない二人の子の名とがつけてある。それが、囊の口から順々に這い出して火の気のない部屋の中を、寒そうにおずおず歩いたり、履の先から膝の上へ、あぶない軽業をして這い上りながら、南豆玉のような黒い眼で、じつと、主人の顔を見つめたりすると、世故(世間での)つらさに馴れている李小二でも、さすがに時々涙が出る。が、それは、文字通り時々で、どちらかと言えば、明日の暮しを考ええる屈託(気になつてくよくよすること)と、そういう屈託(気になつてくよくよすること)

を抑圧しようとする、あてどのない不愉快な感情とに心を奪われて、いじらしい鼠の姿も眼にはいらぬ事が多い。

その上、この頃は、年の加減と、体の具合が悪いのとで、余計、商売に身が入らない。節廻しの長い所を唱うと、息が切れる。喉も昔のように、冴えなくなつた。この分では、いつ、どんな事が起らないとも限らない。——こういう不安は、丁度、北支那の冬のように、このみじめな見世物師の心から、一切の日光と空気を遮断して、しまいは、人並に生きてゆくという気さえ、未練未釈なく枯らしてしまふ。何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないか。勿論、李は一度もそういう問題を考へて見た事がない。が、その苦しみを、不当だとは、思っている。そうして、その苦しみを与えるものを——それが何だか、李にはわからないが——無意識ながら憎んでいる。事によると、李が何にでも持っている、漠然とした反抗的な心もちが、この無意識の憎しみが、原因になつてゐるのかも知れない。

しかし、そうは言うものの、李も、すべての東洋人のように、運命の前には、比較的屈従を意としない。風雪の一日を、客舎の一室で、暮らす時に、彼は、よく空腹をかかえながら、五匹の鼠に向つて、こんな事を言つた。「辛抱しろよ。己だつて、腹がへるのや、寒いのを辛抱してゐるのだから。どうせ生きてゐるからには、苦しいのはあたり前だと思へ。それも、鼠よりは、いくら人間の方が、苦しいか知れないぞ……」

中、雨に降られ廟に逃げ込むと、其所には道服を着た一人の老道人が

雪曇りの空が、いつの間にか、曇まじりの雨をふらせて、狭い往来を文字通り、脛を没する泥濘（ぬかるみ）に満そうとしてゐる、ある寒い日の午後の事であつた。李小二は丁度、商売から帰る所で、例の通り、鼠を入れた囊を肩にかけながら、傘を忘れた悲しさに、ずぶぬれになつて、市はずれの、人通りのない路を歩いて来る——と、路傍に、小さな廟（先人の霊などを祭つた社）が見えた。折から、降りが、前よりもひどくなつて、肩をすぼめて歩いてゐると、鼻の先からは、滴が垂れる。襟からは、水がはいる。途方に暮れてゐた際だから、李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へかけこんだ。まず、顔の滴をはらう。それから、袖をしぼる。やつと、人心地がついた所で頭の上の扁額を見ると、それには、山神廟という三字があつた。

入口の石段を、二三級上ると、扉が開いてゐるので、中が見える。中は思ったよりも、まだ狭い。正面には、一尊の金甲山神が、蜘蛛の巣にとざされながら、ぼんやり日の暮を待っている。その右には、判官が一体、これは、誰に悪戯をされたのだから、首がない。左には、小鬼が一体、緑面朱髪で瘦癯な顔をしてゐるが、これも生憎、鼻が虧けている。その前の、埃のつもつた床に、積重ねてゐるのは、紙銭であろう。これは、うす暗い中に、金紙や銀紙が、覚束なく光つてゐるので、知れたのである。

李は、これだけ、見定めた所で、視線を、廟の中から外へ、転じようとした。すると丁度その途端に、紙銭の積である中から、人間が一人出て来た。実際は、前からそこに蹲つてゐたのが、その時、始めて、うす暗いのに慣れた李の眼に、見えて来たのであろう。が、彼には、まるで、それが、紙銭の中から、忽然として、姿を現したように思われた。そこで、彼は、いささか、ぎよつとしながら、恐る恐る、見るような、見ないような顔を

して、そつとその人間を窺つて見た。

垢じみた道服を着て、鳥が巢をくいそうな頭をした、見苦しい老人である。(ははあ、乞丐をして歩く道士だな——李はこう思った)。瘠せた膝を、両腕で抱くようにして、その膝の上へ、髯の長い頤をのせている。眼は開いているが、どこを見ているのかわからない。やはり、この雨に遇つたという事は、道服の肩がぐっしり濡れているので、知れた。

李は、この老人を見た時に、何とか語をかけなければ、ならないような気がした。一つには、濡鼠になつた老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、また一つには、世故(世間の慣習)がこういう場合に、こつちから口を切る習慣を、いつかつけてしまったからである。あるいは、また、そのほかに、始めの無気味な心もちを忘れようとする努力が、少しは加わっていたかも知れない。そこで李が言った。

「どうも、困つたお天気ですな」、「さようさ」と、老人は、膝の上から頤を離して、初めて李の方を見た。鳥の嘴のように曲つた鍵鼻を、二三度大仰にうごめかしながら、眉の間を狭くして見たのである。「私のような商売をしている人間には、兩位、人泣かせのものはありません」と言うと、「ははあ、何の御商売かな」と訊くので、「鼠を使って、芝居をさせるのです」と応え、それはまたお珍しい」と言うのであつた。

こんな具合で、二人の間には、少しずつ会話が交換されるようになった。その中に、老人も紙銭の中から出て来て、李と一しよに入口の石段の上に腰を下したから、今では顔貌(顔の様子)もはっきり見える。形容の枯槁している(枯れ衰えている)事は、さつき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相手を見つけたつもりで、囊や笥を石段の上に置いたまま、対等な語づかいで、いろいろな話をした。

道士は、無口な方だと見えて、撻々しくは返事もしない。「成程な」とか「さようさ」とかいう度に、齒のない口が空気を嚙むような運動をする。根の所で、きたない黄色になつている髯も、それにつれて上下へと動く、——それが如何にも、見すばらしい。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が生活上の優者だと考えた。そういう自覚が愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であるという事が、何となくこの老人に対して済まないような心もちがした。彼は、談柄(話題)を生活難に落して、自分の暮しの苦しさをわざわざ誇張して話したのは、完く、この済まないような心もちに、煩わされた結果である。「まったく、それは泣きたくなるくらいなものですよ。食わずに一日すごした事だつて、度々あります。この間もしみじみこう思いました。『……己は鼠に芝居をさせて、飯を食っていると思つている。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食っているのかも知れない』と。実際、そんなものですよ」。

李は撫然として、こんな事さえ言つた。が、道士の無口な事は、前と一向、変りがない。それが、李の神経には、前よりも一層、甚しくなつたように思われた。(先生、己の言つた事を、妙にひがんで取つたのだろう。余計な事は言わずに、黙つていればよかつた。)——李は、心の中でこう自分を叱つた。そうして、そつと横目を使って、老人の容子を見た。道士は、顔を李と反対の方に向けて、雨にたたかかれている廟外の枯柳をながめながら、片手で、しきりに髪を搔いている。顔は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにいるらしい。そう思うと、多少不快な気がしたが、自分の同情の徹しないという不満の方が、それよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災(バッタ

の害)へ持って行った。この地方の蒙った惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャスティファイ(正当化)してやりたいと思つたのである。

すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顔をむけた。皺の重なり合つた中に、可憐しさをこらえているような、筋肉の緊張がある。「あなたは私に同情して下さるらしいが」、こう言つて、老人は堪えきれなくなつたように、声をあげて笑つた。鳥が鳴くような、鋭い、しわがれた声で笑つたのである。「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい」。

李は、話の腰を折られたまま、呆然として、ただ、道士の顔を見つめていた。(こいつは、氣遣いだ)。——やつとこういう反省が起つて来たのは、暫くの間睜目して、黙つていた後の事である。が、その反省は、すぐにまた老道士の話によつて、打壊された。

「千鎰や二千鎰でよろしければ、今でもさし上げよう。実は、私は、ただの人間ではない」と、老人は、それから手短に自分の経歴を話した。元は、何とかいう市の屠者(家畜などを殺すことを業とした人)だったが、偶々、呂祖(八仙の一人)に遇つて、道を学んだというのである。それがすむと、道士は、徐に立つて、廟の中へはいつた。そうして、片手で李をさしまねきながら、片手で、床の上の紙銭をかき集めた。……

李は五感を失つた人のように、茫然として、廟の中へ這いこんだ。両手を鼠の糞と埃との多い床の上について、平伏するような形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めているのである。

道士は、曲つた腰を、苦しそうに伸ばして、かき集めた紙銭を両手で床からすくい上げた。それから、それを掌でもみ合せながら、忙しく足下へ撒きちらし始めた。鏘々然として、床に落ちる黄白の音が、にわかには、廟外の寒雨の声を圧して、起つた。——撒かれた紙銭は、手を離れると共に、忽ち、無数の金銭や銀銭に、変つたのである。……

李小二は、この兩銭の中に、いつまでも床に這つたまま、ぼんやり老道士の顔を見上げていた。

下、老道士は実は仙人であり、李小二は彼の仙術で巨万の富を得る

李小二は、陶朱(巨万)の富を得た。偶、その仙人に遇つたという事を疑う者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰つた、四句の語を出して示すのである。この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾ながら、それを、文字通りに記憶していない。そこで、大意を支那のものを翻訳したらしい日本語で書いて、この話の完りに附して置くと思う。但し、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐(こじき)をして歩くかという事を訊ねた、答なのだそうである。

「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚だ、無聊(たいくつ)なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに」。——恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ苦しい事を探してあるいていたのであろう。

(完)

*

*

さて、この「作品」の大体の内容は、まず、登場人物の李小二という見世物師は、野天

で鼠たちに芝居をさせて商売をしていたとある。これは、確かに珍しいことかも知れないが、ただ、多種多様な動物たちに「芸をさせる」ということは、今でもそれほど珍しいことではなく、例えば、犬や猫などをはじめ、日光サル軍団、サーカスの猛獣使い、また、水族館などでのイルカやアシカなどのショー、その他、われわれ人間は実に多種多様な動物たちに何らかの芸を教え込もうとするものであるが、ただ「鼠」のような動物に「芸を仕込む」というのは極めて難しいことかも知れない。それはともかく、それで生計を立てているのであるが、むろん大儲けできるという状況ではなく、いわばその日暮らしをしているとともに、今のままでは永遠に大金持ちにはなれないという設定になっているのであり、特に十日と天氣が悪いと口が干上ってしまうとある。

また、興味深いのは、「……鼠の数は、皆で、五匹で、それに李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方の知れない二人の子の名とがつけてある」とある。つまり、かつては「家族や家庭に恵まれていたのかも知れないが、今は一人暮らして五匹の鼠たちと一緒に暮らしているという事になるのかも知れない。その上、この頃は、年の加減と、体の具合が悪いのとで、余計、商売に身が入らない。——こういう不安は、丁度、北支那の冬のように、このみじめな見世物師の心から、一切の日光と空気を遮断して、しまいは、人並に生きてゆこうという気さえ、未練未積なく枯らしてしまう。何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないか。勿論、李は一度もそういう問題を考えて見た事がない。が、その苦しみを、不当だとは、思っている。そうして、その苦しみを与えるものを——それが何だか、李にはわからないが——無意識ながら憎んでいる。事によると、李が何にでも持っている、漠然とした反抗的な心もちは、この無意識の憎しみが、原因になっているのかも知れないとある。

これは、非常に興味深い言葉であり、われわれ人間というのは、あれこれのことがうまくいっているような時には、多くの場合、自分の「心の中」にも余裕が持っていて、いろいろなもの（比較的）「素直に客観的に見聞きとらえることができ得るものである」が、一方、あれこれのことがうまくいかず、いろいろな「悩みや苦しみ」などをかかえ込み、しかも、生活なども逼迫してくればくるほど、その人の「心の中」には余裕がなくなり、それゆえ、その人の「心の中」では（いつも）イライラしたり、或いはいろいろなことに不平や不満などをいだくようになったり、或いは、時には人や世の中などを（何かと）恨んだり憎んだりしてしまうような傾向になりやすいということである。

ところが、ある寒い日の午後のこと、その李小二という人は丁度、商売から帰る所で、例の通り、鼠を入れた囊を肩にかけながら、傘を忘れた悲しさに、ずぶぬれになって、市はずれの、人通りのない路を歩いて来ると、路傍に、小さな廟（先人の霊などを祭った社）が見えた。折から、降りが、前よりもひどくなって、途方に暮れていた際だから、李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へとかけ込むことになるが、その廟で、一人の道服を着た非常に年老いた老道人に出会うことになるのである。

さて、廟の入口の石段を二三級上ると、扉が開いているので中が見える。中は思ったよりも狭く、いろいろな（欠けた）像などが存在していたが、埃の積もった床に積み重ねてあるのは「紙銭」であろう、うす暗い中に「金紙や銀紙」などが覓束なく光っているので知れたとある。ところで、この「紙銭」というのは、中国をはじめ、東アジアなどで神仏の参拝や祖先や諸霊への供養などの際に燃やして用いられる紙製の贖金である。

李は、これらを見定めた所で、視線を廟の中から外へと転じようとした、すると、丁度その途端に、紙銭の積んである中から、人間が一人出て来た。実際は、前からそこに蹲っていたのだが、場のうす暗さに慣れた李の眼にそれが初めて見えて来たのである。しかし、彼にはまるで、それが紙銭の中から、忽然として、姿を現したように思われた。（これはもちろん、こんなところに人がいようとは思えなかったからであり）、だからこそ、彼は、いささかぎよつとしながら、恐る恐る見るような見ないような顔をして、そつとその人間を窺って見たのである。

すると、それは「……垢じみた道服を着て、鳥が巢をくいそうな頭をした、見苦しい老人であった」。（ははあ、乞丐をして歩く道士だな、と、李はこう思った）。瘠せた膝を、両腕で抱くようにして、その膝の上へ、髯の長い頤をのせている。眼は開いているが、どこを見ているのかわからない。やはり、この雨に遇ったという事は、道服の肩がぐつしより濡れているので、知れたとある。

李は、この老人を見た時に、何とか語をかけなければ、ならないような気がした。一つには、濡鼠になった老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、また一つには、世故（世間の慣習）がこういう場合に、こつちから口を切る習慣を、いつかつけてしまったからである。あるいは、また、そのほかに、始めの無気味な心もちを忘れようとする努力が、少しは加わっていたかも知れない。そこで李が言った。

「どうも、困ったお天気ですな」、「さようさ」と、老人は、膝の上から頤を離して、初めて李の方を見た。鳥の嘴のように曲った鍵鼻を、二三度大仰にうごめかしながら、眉の間を狭くして見たのである。「私のような商売をしている人間には、兩位、人泣かせのものはありません」と言うと、「ははあ、何の御商売かな」と訊くので、「鼠を使って、芝居をさせるのです」と応え、と、「それはまたお珍しい」と言うのであった。

こんな具合で、二人の間には、少しずつ会話が交換されるようになった。その中に、老人も紙銭の中から出て来て、李と一しよに入口の石段の上に腰を下したから、今では顔貌（顔の様子）もはっきり見える。形容の枯槁している（枯れ衰えている）事は、さつき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相手を見つけたつもりで、囊や笥を石段の上に置いたまま、対等な語づかいで、いろいろな話をした。

道士は、無口な方だと見えて、撓々しくは返事もしない。「成程な」とか「さようさ」とかいう度に、齒のない口が空気を嚙むような運動をする。根の所で、きたない黄色になつてゐる髯も、それにつれて上下へと動く、――それが如何にも、見すばらしい。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が生活上の優者だと考えた。そういう自覚が愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であるという事が、何となくこの老人に対して済まないような心もちがした。彼は、談柄（話題）を生活難に落して、自分の暮しの苦しさをわざわざ誇張して話したのは、完く、この済まないような心もちに、煩わされた結果である。「まったく、それは泣きたくなるくらいなものですよ。食わずに一日すごした事だつて、度々あります。この間もしみじみこう思いました。『……己は鼠に芝居をさせて、飯を食っていると思つている。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食っているのかも知れない』と。実際、そんなものですよ」。

李は撫然として、こんな事さえ言った。が、道士の無口な事は、前と一向、変りがない。

それが、李の神経には、前よりも一層、甚しくなつたように思われた。(先生、己の言つた事を、妙にひがんで取つたのだろう。余計な事は言わずに、黙っていればよかつた。)

——李は、心の中でこう自分を叱つた。そうして、そつと横目を使って、老人の容子を見た。道士は、顔を李と反対の方に向けて、雨にたたかかれてゐる廟外の枯柳をながめながら、片手で、しきりに髪を搔いてゐる。顔は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにゐるらしい。そう思うと、多少不快な気がしたが、自分の同情の徹しないという不満の方が、それよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災(バッタの害)へ持つて行つた。この地方の蒙つた惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャステイファイ(正当化)してやりたいと思つたのである。

すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顔をむけた。皺の重なり合つた中に、可笑しさをこらえているような、筋肉の緊張がある。「あなたは私に同情して下さるらしいが」、こう言つて、老人は堪えきれなくなつたように、声をあげて笑つた。鳥が鳴くような、鋭い、しわがれた声で笑つたのである。「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい」と言うのであつた。

まず、李という見世物師は、この老人を見た時に、「……垢じみた道服を着て、鳥が巢をくいそうな頭をした、見苦しい老人であつたので、ははあ、この老人は、乞丐をして歩く道士だな、と、李はそう思つた」とある。これは、実に興味深い文章であり、われわれ人間というのは、最初は、どうしてもその人の「見た目」などから、この人は、大体どのような人だろうと推測を立てるものであり、そして、その推測に従つて、李という見世物師は、この老人に何とか語をかけなければ、ならないような気がした。一つには、濡鼠になつた老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、また一つには、世故(世間の慣習)がこういう場合に、こつちから口を切る習慣を、いつかつけてしまつたからである。あるいは、また、そのほかに、始めの無気味な心もちを忘れようとする努力が、少しは加わつていたかも知れない。そこで李が言つた。

「どうも、困つたお天気ですな」、「さようさ」と、老人は、膝の上から顔を離して、初めて李の方を見た。鳥の嘴のように曲つた鍵鼻を、二三度大仰にうごめかしながら、眉の間を狭くして見たのである。「私のような商売をしている人間には、兩位、人泣かせのものはありません」と言つと、「ははあ、何の御商売かな」と訊くので、「鼠を使って、芝居をさせるのです」と応えつと、「それはまたお珍しい」と言うのであつた。

こんな具合で、二人の間には、少しずつ会話が交換されるようになった。その中に、老人も紙銭の中から出て来て、李と一しよに入口の石段の上に腰を下したから、今では顔貌(顔の様子)もはっきり見える。形容の枯槁している(枯れ衰えている)事は、さつき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相手を見つけたつもりで、囊や笥を石段の上に置いたまま、対等な語づかいで、いろいろな話をした。(つまり、李という人は、この見苦しい老人に対して見下すでも軽蔑するでもなく、むしろ「対等な語づかいで、いろいろな話をしたり、同情的な心魂持ちを示したりしたこと」が、結果として、この老人《仙人》の心魂を動かし、巨万の富を授かることにもなつたのだろう。)

ところで、この老人は、実は、(恐らく)「高位の仙人」であり、それゆえ、所謂「不老不死の身である」とともに、自分の姿を「老人にも若い者にもその他変幻自在と姿を変

え得る仙術」をも心得ているに違いない。もちろん、李という見世物師には、そのようなことは今の段階では全く分かりようもないので、それゆえ、次のように考えるのである。

つまり、「……李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が生活上の優者だと考えた。そういう自覚が愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であるという事が、何となくこの老人に対して済まないような心もちがした。彼は、談柄（話題）を生活難に落して、自分の暮しの苦しさをわざわざ誇張して話したのは、完く、この済まないような心もちに、煩わされた結果である。「まったく、それは泣きたくなるくらいなものですよ。食わずに一日すごした事だつて、度々あります。この間もしみじみこう思いました。『……己は鼠に芝居をさせて、飯を食っていると思つてゐる。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食っているのかも知れない』と、「実際、そんなものですよ」と言うのであつた。

この言葉も、やはり興味深い文章であり、というのも、われわれ人間というのは、どうしても「自分の視点」（つまり自分の「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観・倫理観、人生観、生き方、その他」などから世の中の実に様々な物事を見聞きし、ああでもないこうでもないと言動しているものであるが、一方、相手《他人》その他などの視点に立つて物事を見聞き言動するということはなかなかでき難いことなのである。）

さて、道士の無口な事は、前と一向、変りなく。そつと横目を使つて、老人の容子を見つてみると、道士は、顔を李と反対の方に向けて、雨にたたかれてゐる廟外の枯柳をながめながら、片手で、しきりに髪を搔いている。顔は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにいるらしい。そう思うと、多少不快な気がしたが、自分の同情の徹しないという不満の方が、それよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災（バッタの害）へ持つて行つた。この地方の蒙つた惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャステイファイ（正当化）してやりたいと思つたのである。

すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顔をむけた。皺の重なり合つた中に、可哀しさをこらえているような、筋肉の緊張がある。「あなたは私に同情して下さるらしいが、こう言つて、老人は堪えきれなくなつたように、声をあげて笑つた。鳥が鳴くような、鋭い、しわがれた声で笑つたのである。「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい」と言うのであつた。

*

*

李は、話の腰を折られたまま、呆然として、ただ、道士の顔を見つめていた。（こいつは、氣遣いだ）。——やつとこういう反省が起つて来たのは、暫くの間睜目して、黙つていた後の事である。が、その反省は、すぐにまた老道士の次の話によつて、打壊された。「千鎰や二千鎰でよろしければ、今でもさし上げよう。実は、私は、ただの人間ではない」と、老人は、それから手短かに自分の経歴を話した。元は、何とかいう市の屠者（家畜などを殺すことを業とした人）だったが、偶々、呂祖（八仙の一人）に遇つて、道を学んだというのである。それがすむと、道士は、徐に立つて、廟の中へはいつた。そうして、片手で李をさしまねきながら、片手で、床の上の紙銭をかき集めた。……

李は五感を失つた人のように、茫然として、廟の中へ這いこんだ。両手を鼠の糞と埃との多い床の上について、平伏するような形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めているのである。

道士は、曲った腰を、苦しそうに伸ばして、かき集めた紙銭を両手で床からすくい上げた。それから、それを掌でもみ合せながら、忙しく足下へ撒きちらし始めた。鏘々然として、床に落ちる黄白の音が、にわかには、廟外の寒雨の声を圧して、起った。――撒かれた紙銭は、手を離れると共に、忽ち、無数の金銭や銀銭に、変ったのである。……李小二は、この雨銭の中に、いつまでも床に這ったまま、ぼんやり老道士の顔を見上げていた。(つまり、床にあつた数多くの「紙銭」《金紙や銀紙》などを両手ですくい上げて、それを掌でもみ合せながら、忙しく足下へ撒きちらし始めると、忽ち、無数の「金銭や銀銭」などに変つたという事であり、その様な信じ難い「仙術」を目のあたりに見せつけられて、彼はまさに茫然自失のような状態(つまり今、目の前で一体何が起きているのかも理解不能のような状態)となり、この雨銭の中に、いつまでも床に這ったまま、ぼんやりと老道士の顔を見上げているだけであつたという。)

* *
そして、此処からこそ、最も大事な内容になつていくが、それは、次のようなものである。つまり、「……李小二は、陶朱(巨万)の富を得た。偶、その仙人に遇つたという事を疑う者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰つた、四句の語を出して示すのである。この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾ながら、それを、文字通りに記憶していない。そこで、大意を支那のものを翻訳したらしい日本文で書いて、この話の完りに附して置こう」と思う。但し、これは、李小二が、「……何故、仙にして、乞丐(こじき)をして歩くかという事を訊ねた時の、その答えなのだそうである」とある。

それは、「……人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚だ、無聊(たいくつ)なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに」と。――恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ苦しい事を探してあるいていたのであらう。

さて、李小二という見世物師が、「……何故、仙にして(仙人でありながら)、(わざわざ)乞丐(乞食のような姿)をして歩くのかという事を訊ねた時、次のように答えた」と言うのである。それは、「……人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る」とある。まず、ここまでは一体どのような意味合いになるかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、われわれ人間(人生)では実に様々な「苦」(苦しみ)に出遭うことが多い、だからこそ、楽しめる時に「楽しんでおけ」ということであり、また、われわれ人間(人生)にはやがて「死」が待っている。だからこそ、この「限られた人生」を「どう生きたらよいか」という「意識」がはつきり、と生じて来るのである。

一方、死苦共に脱し得た「仙人」(高位の仙人)であれば、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害損得」)などに振りまわされている、まさに俗世の俗人たちのような「阿鼻叫喚」などを味わうこともないが、ただ、甚だ「無聊」(たいくつ)ではあると言っているのである。そこで、この「無聊」(たいくつ)を凌ぐために、例えば、乞丐(乞食のような姿)をして「この世」(世間)を歩いたりしているが、それは、死苦共に脱し得たような「仙人」(高位の仙人)にとつては、却つて、かつての「……人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ苦しい事を探してあるいていたのであらう」となるのである。

ちなみに、「……死苦共に脱し得て甚だ、無聊ぶりょう（たいくつ）なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに」とあるのは、つまり、「……無聊ぶりょう（たいくつ）はあるが、仙人に越したことはない、仙人の方がよい。なぜなら、凡人（人間）には死苦があるから」である。

*

*

杜子春
とししゆん

杜子春

ところで、芥川龍之介の『杜子春』という作品も、非常によく知られている作品かと思うが、その「本文」は、次のようなものである。それは、「……或春の日暮です。唐の都の洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。若者は名は杜子春とあって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になっているのです。その杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めています」。するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人がありました。その老人は、「……お前は何を考えているのだ」と訊くと、杜子春は、「……私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と応える。すると、「……では、おれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」と。そこで、杜子春は、言われた通りにすると、一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になったのです。……

さて、大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしを始めました。しかし、そのような贅沢な日々は、三年で、再び、一文無しになつてしまいました。そこで、再び、洛陽の西の門の壁に身を凭せて、ぼんやり空を眺めていると、また、どこからやって来たか、片目眇の老人が、「……お前は何を考えているのだ」と訊くので、「……私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と。すると、「……では、おれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」と。——しかし、それも、三年で費い尽してしまう。また、杜子春は、同じ門の壁に身を凭せて、ぼんやり空を眺めていると、例の老人がやって来て、同じように、「……今度は、その腹に当る所を……」と言うが、杜子春は、「……いや、お金はもう入らないのです」。「……何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想が付きたのです」と。「……人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔しい顔さえもして見せはしません」と言う。そこで、杜子春は、「……私はあなたの弟子になつて、仙術の修行をしたいと思うのです。あなたは道德の高い仙人でしょう。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教えてください」と。それに対して、老人は、「……いかにもおれは峨眉山に棲んでいる、鉄冠子という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と、ここまですが、いわば「前半部分」になるかと思う。

一、若者と仙人

さて、この「作品」は、一体、どのような「作品」と問えば、それは、次のようなものである。まず、登場人物は、若い「杜子春」と老人の「仙人」との二人だけである。そして、若い「杜子春」というのは、一体、どのような存在かと言えば、それは、まさに「俗世間」にまみれている人間の「代表」のような存在である。つまり、われわれ人間という

のは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている存在であり、それは、例えば、「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、出世（社会的地位）欲、支配欲、独占欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々な「欲望（欲求）」があり、そして、それらの「欲望（欲求）」が思うように満たされれば、それなりの満足感を得、一方、思うように満たされなければ、逆に、「……不平、不満、嫌悪、怒り、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」などの感情に振りまわされてしまうものである。しかも、われわれ人間の実に様々な「欲望や感情」などがすべて満たされるはずもないので、それは、われわれ人間というのは、一方を得れば、また、一方を失うようにできているからである。例えば、杜子春のように、たとえ「巨万の富」を得たとしても、それによって得られるものと、もう一方では、それによっても得られないものがあり、それは、一般的には、いわゆる「四苦」（つまり「生・病・老・死」）などは、どうにもならないものであるとともに、また、いわゆる「人の心」というものも、少しも自分の「思い通り」にはならないものである。――例えば、その人がたとえ「従順に従っている」としても、その人の「心の中」ではない。つまり「何を思い、何を考えているか」などは、全く分からないものである。そして、杜子春は、それを人間の「薄情さ」と呼んでいるが、われわれ人間は、絶えずそういうものに振りまわされて生きていくということである。

一方、年老いた「仙人」というのは、一体、どのような存在かと問えば、それは、まさに「俗世」から解脱している人間の「代表」のような存在である。そして、この「仙人」は、本来であれば、「どうしたのだ？」と訊くところを、最初から、「……お前は何を考えているのだ」と質問をしている。それは、この「仙人」の最大の関心事は、「……杜子春が、今、何を考えているのか？」ということであったということである。それは、つまり、「……始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが良さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだ」と言っている。つまり、杜子春を見た時に、「……この若者は、どこか見どころがある。この若者なら、自分の弟子にしてもよいかも知れない」と思ったということである。つまり、「……この若者は、やがて人間に愛想をつかして、必ず、私に弟子入りしてくるだろうと、そう見越していた」ということである。

二、蛾眉山の魔性たち

さて、後半部分は、「……鉄冠子は、そこにあった青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文を唱えながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るように跨りました。すると、竹杖は忽ち竜のように、勢いよく大空へ舞い上って、晴れ渡った春の夕空を蛾眉山の方向へ飛んで行きました」。そして、その蛾眉山の断崖の大きな一枚岩の上に座ることになるが、仙人は、「……お前は、ここに座って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうと、決して声を出すのではないぞ。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と言いつけて、飛んで行きました。――そして、最初に現れるのが、いわゆる「猛虎と大きな白蛇」であり、杜子春は、「……そこにいるのは何者だ。黙っていると、命はないぞ」と言われても、ただ黙っていると、猛虎と白蛇は、杜子春めがけて同時に襲いかかって来るが、消えてしまう。次は、空一面が黒雲に覆われ、大きな雷鳴などが轟き渡

るが、じっと我慢していると、やがて消えてしまう。そして、今度は、武装した神将が現われ、「……返事をしないか。返事をしないと、約束通り命はとってやるぞ」と喚き、杜子春は、三又の戟で突き殺されてしまい、ついに息が絶えてしまうのである。

さて、ここまでの「内容」は、次のようなことになるかと思う。——つまり、われわれ人間にとって、なぜ、「虎や蛇或いは雷鳴や神将」などが怖いと思うのかと問えば、「怖い」という思いに襲われるわけだが、その「怖い」という感情というのは、本来、すべて「自己防衛的な反応」であり、それは、まさに「自己愛」から生じるものであり、それは、それでよいのである。しかし、一方、その「自己愛」こそは、まさに「利己的自我」(つまり「エゴ」)の「源泉」そのものでもあり、そして、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)こそは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲にむさぼろうとしている「張本人」(本体)でもあるということである。それゆえ、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)が思うようにコントロールできずに、それに際限なく振りまわされてしまうと、実に様々な「採め事や犯罪」などを起こすことにもなるということである。つまり、「利己的自我」(つまり「エゴ」というのは、一方では、自分の「身」を守っているものではあるが、一方では、自分を苦しめている「張本人」(本体)でもあるということである。だからこそ、宗教においては、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)をできるだけ弱めるような「考え方」になっているということである。

さて、死んでしまった杜子春の「肉体」からは、まさに「魂」が抜け出し、その「魂」は、いわゆる「地獄」へと墮ちてしまう。そして、そこには名高い「閻魔王」がいるが、その閻魔王は、「……何のために、蛾眉山の上へ座っていた。速に返答しなければ、地獄の呵責に遇わせてくれるぞ」と居丈高に罵る。もちろん、杜子春は、それにもじつと黙っていたために、あらゆる「地獄の責苦」に遇うことになる。ここまでは、自分さえ我慢していれば、それで済む問題である。しかし、最後は、とうとう「姿は馬」ではあるが、その顔は「父母」という「瘦せた馬」が二頭連れて来られ、徹底的に「地獄の責苦」を与えられることになるのである。それを見ていた杜子春は、ついに耐えきれずに、「お母さん」と一言叫んでしまうのである。——そうすると、杜子春は、再び、夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり(一人)佇んでいるのでした。

三、新たな生活

さて、仙人は、「……とても仙人にはなれはすまい」と聞くと、「……いくら仙人になれた所が、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」と返答する。それに対して、仙人は、次のようなことを言う。

つまり、「……もしお前が黙っていたら、お前は即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ」とある。これは、一体、どういうことなのか? それは、次のようなことである。つまり、「仙人」というのは、いわゆる「人でなし」(つまり「人間でなくなる」ということではない。それゆえ、両親が実に様々な「地獄の責苦」などを受けているのを見ていながら、その人の「心」が少しを動かないとすれば、それは、まさに「人でなし」(つまり「人間ではない」ということになってしまいうだろう。それでは、「仙人」とは、

一体、どのような存在になるのかと問えば、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めることから離れて、山深く、実に様々な「修行」などを何年も何十年も積み重ねることによって、何か特殊な「能力」などを身につけることになるとともに、いわゆるこの世や人間の本質などを鋭く見抜く「慧眼」などを兼ね備え持った存在になるということである。そして、仙人は、「……お前はもう仙人になりたいという望も持っていないまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」と質問をする。それに対して、杜子春は、「……何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と応えるのである。これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めながら、まさに「満足感や幸せ感」などを得ようとするのが、まさに「俗世の人たち」であるとすれば、もう一方の、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着を捨てて、むしろ「欲」から開放されることによって、逆に、心の「平穏や充実感」（つまり「内的充実感」）などを得ようとするのが、まさに「修行僧や仙人或いは仏陀（如来）」ということになるのだろうか。そして、主人公の杜子春は、結果として、仙人にはなれなかったが、しかし、これからは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めるのではなく、むしろ、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着から離れて、いわば心の「平穏や充実感」などが得られるような「生き方」がしたいということである。そこで、いわば「ホームレスの杜子春」に対しては、仙人は、次のようなことを言うのである。——それは、「……おお、幸、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と。

*

*

さて、これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、作者（「芥川龍之介」）の「考え方」というのは、一方の極の「大金持ち」、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などをどこまでも貪欲に追い求めてやまないような人たちと、もう一方の極の「仙人」、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着をすべて捨てて、ただひたすら心の「平穏や充実感」などを得ようとしているような人たち、つまり、一方の極の「大金持ち」と、もう一方の極の「仙人」という、この「両極端」を避けた、いわば「中庸」こそは、まさに「われわれ人間にとつて、最も幸せなことである」という「考え方」に立っているのである。

*

*

杜子春（参考文献）

一、若者と老人との出会い

或春の日暮です。唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者が
ありました。若者は名を杜子春と云って、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽し
て、その日の暮にも困る位、憐な身分になっています。

何しろその頃洛陽と言え、天下に並ぶものがない、繁昌を極めた都ですから、往来
にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当っている、油のような夕
日の光の中に、老人のかぶった紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾った色糸
の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで画のような美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めていました。空
には、もう細い月が、うらうらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思う程、かすかに
白く浮んでいるのです。「……日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、
泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身
を投げて、死んでしまった方がましかも知れない」。

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。
するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人があります。そ
れが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落とすと、じつと杜子春の顔を見ながら、「……お
前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。「……私ですか。私は今夜寝る所
もないので、どうしたものかと考えているのです」。

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしまし
た。「……そうか。それは可哀そうだな」、老人は暫く何事か考えているようでしたが、
やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、「……ではおれが好いことを一つ教
えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中
に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」、「……ほんと
うですか」と、杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。ところが更に不思議なこと
には、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。
その代り空の月の色は前よりも猶白くなって、休まない往来の人通りの上には、もう気の
早い蝙蝠が二三匹ひらひら舞っていました。（本文）

二、大金持ちになった杜子春は……

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉
通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘って見たら、大きな車
にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な
暮らしを始めました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日
に四度色の変る牡丹を庭に植えさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を
集めるやら、錦を縫わせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂えるやら、

その贅沢を一々書いていては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂を聞いて、今までは路で行き合っても、挨拶さえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやつて来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。極かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏しているという景色なのです。(これは、山ほどあるお金の具体的な使、道の実例であるとともに、その大金持ちのところへと実に数多くの人たちが集まって来たということである。)

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になりました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなっていました。いや、宿を貸すどころか、今では腕に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。(例えば、杜子春という人間に心惹かれて集まったのであれば別であるが、いわば金に心惹かれて集まってきた人たちであれば、その金がなくなれば、自然と離れていくのは当然のことである。)

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目眇の老人が、どこからか姿を現して、「……お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、「……私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事をしました。「……そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」。老人はこう言ったと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。(もちろん、このようなことを繰り返すのには、老人にははつきりとした思惑があるからである。)

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使――すべてが昔の通りなのです。(相変わらず、杜子春という人は、この俗世の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲にむさぼることに取り憑かれていて、自分の人生を顧みるといことが全くない状態にあるのです。)ですから車に一ぱいにあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなつてしまいました。(本文)

三、仙人になりたいたい……

さて、「……お前は何を考えているのだ」と、片目眇すがめの老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問いかけました。勿論もちろん彼はその時も、洛陽らくようの西の門の下に、ほそぼそと霞かすみを破やぶっている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇たたくんでいたのです。「……私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っっているのです」「……そうか。それは可哀あはれそうだな。ではおれが好きなことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映うつったら、その腹に当る所を、夜中に掘ほって見るが好い。きつと車に一ぱいの――」と、老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮さへりました。

「……いや、お金はもういらぬのです」「……金はもういらぬか？ ははあ、では贅ぜい沢たくをするにはとうとう飽あきてしまったと見えるな」と、老人は審いしそうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。「……何、贅ぜい沢たくに飽あきたのじゃありません。人間にんげんというものに愛あい想そうがつきたのです」、杜子春は不平ふへいそうな顔をしながら、突慳つつけん貪どんにこう言いいました。「……それは面白いな。どうして又人間に愛あい想そうが尽つきたのだ？」と聞くと、「……人間は皆薄情はくじやうです。私が大金持たいきんぢになった時には、世辞せじも追従ついでもしますけれど、一旦貧乏ひんぱふになって御覧ごらんなさい。柔やわしい顔かほさえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持たいきんぢになったところが、何にもならないような気がするのです」。

老人は杜子春の言葉ことばを聞くと、急ににやにや笑い出でしました。（これは、自分の思し惑まど、通りとりになって来たからである）。「……そうか。いや、お前は若い者に似合にわず、感心かんしんに物のわかる男おとこだ。ではこれからは貧乏ひんぱふをしても、安らかに暮くして行くつもりか」と聞くと、杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切きった眼まなこを挙げると、訴うえるように老人の顔を見ながら、「……それも今の私には出来できません。ですから私はあなたの弟子でしになつて、仙術せんじゆつの修業しゆぎやうをしたいと思しうのです。いいえ、隠ひそしてはいけません。あなたは道徳だうとくの高い仙人せんじんでしょう。仙人せんじんでなければ、一夜ひとよの内に私わたしを天下第一てんかだいの大金持たいきんぢにすることは出来ない筈はずです。どうか私の先生せんせいになつて、不思議ふしぎな仙術せんじゆつを教おえて下さい」と言いうのであつた。（つまり、老人の思し惑まどとは、「……この若者わかしやうは、どこか見みどころがある。この若者わかしやうなら、自分の弟子でしにしてもよいかも知れない」と思しっていたということである）。

老人は眉まゆをひそめたまま、暫しばらくは黙もくつて、何事なにことか考考えているようでしたが、やがて又につこり笑わらいながら、「……いかにもおれは峨眉山がびざんに棲すんでいる、鉄冠子てつかんしという仙人せんじんだ。始めお前の顔かほを見た時とき、どこか物ものわかりが好すきそうだったから、二度にどまで大金持たいきんぢにしてやったのだが、それ程ほど仙人せんじんになりたければ、おれの弟子でしにとり立たててやろう」と、快ねがく願がいを容ゆるれてくれました。杜子春は喜よろこんだの、喜よろこばないのではありません。老人の言葉ことばがまだ終しまらない内に、彼は大地ちがひに額ぬかをつけて、何度なんども鉄冠子てつかんしに御時宜おじぎをしました。「……いや、そう御礼ごれいなどは言いつて貰もらうまい。いくらおれの弟子でしにしたところところが、立派りつぱな仙人せんじんになれるかなれないかは、お前次第まへしだいで決きまることだからな。――が、ともかくもまずおれと一ひとしよに、峨眉山がびざんの奥おくへ来て見るが好すい。おお、幸さいわい、ここに竹杖たけづえが一本いっぴん落ちてゐる。では早速さつそくこれへ乗のつて、一ひと飛びに空そらを渡わたるとしよう」と言いうのであつた。

鉄冠子てつかんしはそこにあつた青竹せいしやくを一本いっぴん拾ひろい上げると、口くちの中に咒文じゆもんを唱となえながら、杜子春とししゆんと一ひとしよにその竹たけへ、馬うまにでも乗のるようように跨またりました。すると不思議ふしぎではありませんか。竹杖たけづえは忽たちち竜りゆうのようように、勢いきおい大空たいくうへ舞まい上あつて、晴はれ渡わたつた春はるの夕空ゆふぞらを峨眉山がびざんの方角かたかくへ飛とんで行いきました。――杜子春とししゆんは胆いそをつぶしながら、恐おそる恐おそる下したを見下みくだしました。が、下したには唯青ただせいい山々やまが夕明ゆふあかりの底そこに見えるばかりで、あの洛陽らくようの都みやこの西にしの門かどは、（とうに霞かすみに紛ま

れたのでしよう)どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱い出しました。(これは、老人の「心の高揚《喜び》」から、自然と自分の「歌」を高らかに唱い出したということになるのだろう。)

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。

袖裏の青蛇、胆気粗なり。

三たび岳陽に入れども、人識らず。

朗吟して、飛過す洞庭湖。(本文)

朝は北海に遊び、暮には蒼梧に在る。

袖裏の青蛇は、恐れ知らずで大胆だ。

三度岳陽に入れど、人それを識らない。

歌を吟じて、洞庭湖の上を飛び過ぎる。

四、蛾眉山の魔性たち

さて、二人を乗せた青竹は、間もなく蛾眉山へ舞い下りました。そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光っていました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やっと耳にはいるものは、後の絶壁に生えている、曲りくねった一株の松が、ことうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、「……おれはこれから天上へ行って、西王母に御眼にかかつて来るから、お前はその間に坐って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たとえどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだど覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と言いました。「……大丈夫です。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています」と答えると、「……そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」と言い、老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨って、夜目にも削ったような山々(夜の暗さの中でもはつきりとわかるほど刃物で鋭く削ったような鋭利な姿をした山々)の空へ、一文字に消えてしまいました。(本文)

これはもちろん、杜子春一人だけを残し、蛾眉山の様々な魔性たちの「試練」を受けさせて、それに耐えられるかどうか(つまり「仙人になれるかどうか」)を見ようとしているのである。

猛虎と白蛇の出現

杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静に星を眺めていました。するとかれこれ半時ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に声があつて、「……そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしませんでした。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、「……返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇しつけるのです。杜子春は勿論黙っていました。——と、どこから登って来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り

上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思うと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。(この「猛虎と白蛇」の組み合わせは、実に「映像的にも美しい」場面になるかと思う。)

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うのか、暫くは睨合いの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなってしまうと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待つていました。

黒雲と天雷の出現

すると一陣の風が吹き起つて、墨のような黒雲が一面にあたりをどぎすや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄じく雷が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑のような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐っていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、——暫くはさすがの峨眉山も、覆るかと思う位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、真っ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。(この場面も映像的には壮大で自然の驚異に充ちた場面になるかと思う。)

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯に違いありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

武装した神将の出現

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあろうという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉の戟を持っていましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を噴らせて叱りつけるのを聞けば、「……こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしている所だぞ。それも憚らずたつた一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うのです。(これは、いわば聖地になぜ不法侵入して来たかと問い詰めているのである。)しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然と口を噤んでいました。「……返事をしないか。——しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属たちが、その方をずたずたに斬ってしまうぞ」。——神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満

ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。(つまり、「十二神将」にはそれこそ無数の「神兵」たちがいるのであり、それは、各「神将」にそれぞれ七千、合計八万四千の眷属夜叉を率いているのである。)

この景色を見た杜子春は、思わずあつと叫びそうになりましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れぬのを見ると、怒ったの怒らないのではありません。「……この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ」と、神将はこう喚くが早いのか、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のように消え失せた後だったので。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変わらず、こうこうと枝を鳴らせています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れていました。(本文)

さて、この場面は、猛虎や白蛇或いは黒雲や天雷の場合とは違って、神将は、三叉の戟を閃かせて、(実際)一突きに杜子春を突き殺してしまふ。すると、今度は、その「肉体」から「魂」だけが抜け出して、やがて、地獄へと墜ちていくという新たな「試練」(展開)へと向かつて行くわけだが、これを「ゲーム」に喩えて言えば、易しい場面からより難しい場面へと次から次へと「ステージ」をクリアしながら、果たして最後まで辿り着けるかどうか、そして、最後まで辿り着ければ、正式な「弟子」となって、そこから「仙人」へと向かう新たな長い「修行の道」が開けることになるのかどうか、そのような展開へと向かうのである。

五、魂は、地獄へと……

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに(上向きで)倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、閻穴道という道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がびゅうびゅう吹き荒んでいるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉のように、空を漂って行きましたが、やがて森羅殿という額の懸った立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にはいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを取り捲いて、階(階段)の前へ引き据えました。階(階段)の上には一人の王様が、まっ黒な袍に金の冠をかぶって、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂に聞いた、閻魔大王に違いありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪いていました。「……こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐っていた?」

閻魔大王の声は雷のように、階(階段)の上から響きました。杜子春は早速その間に答えようとしたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな」という鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れたまま、唾のように黙っていました。すると閻魔大王は、持っていた鉄の笏を挙げて、顔中の鬚を逆立てながら、「……その方はここをどこだ

と思う？　速すみやかに返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責かしやくに遇あわせてくれるぞ」と、威丈高いたけだかに罵ののりました。

が、杜子春は相変らず唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に畏かしこまって、忽ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、剣の山や血の池の外にも、焦熱地獄という焰ほのおの谷や極寒地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、代る代る杜子春を抛りこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵きねに撞ぶかれるやら、油の鍋なべに煮られるやら、毒蛇に脳味噌のうみそを吸われるやら、熊鷹くまたかに眼を食われるやら、――その苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦せめくに遇あわされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じつと歯を食いしばったまま、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返ってしまったのでしょう。もう一度夜のような空を飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を階きざし（階段）の下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に、「……この罪人はどうしても、ものを言う気色がございませぬ」と、口を揃そろえて言上ごんじやうしました。（恐らく、ここまで耐えた人間は珍しいのだろう。）

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、「……この男の父母は、畜生道ちくしやうどうに落ちて居る筈だから、早速ここへ引き立てて来い」と、一匹の鬼に言いつけました。（これは、今までここまで耐え忍んだ人間は殆ど居なかったもので、さすがの閻魔大王も眉をひそめて、暫く思案に暮れることになったのだろう。）

鬼は忽ち風に乗って、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二匹の獣を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかと言えは、それは二匹とも、形は見すばらしい瘦せ馬やでしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。「……こら、その方は何のために、峨眉山がびさんの上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞ」と言う。（これが結果として、杜子春にとっての「最大の試練」になって行くのである。）

杜子春はこう嚇おどされても、やはり返答をせずにいました。「……この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いと思っているのだな」、閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚わめきました。「……打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ」と。鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭むちをとって立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未積みしやくなく打ちのめしました。鞭はりゅうりゅうと風を切つて、所嫌きまわず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、――畜生になつた父母は、苦しうに身を悶もたえて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程嘶いななき立てました。「……どうだ。まだその方は白状しないか」と、閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階きざし（階段）の前へ、倒れ伏して居たのです。

杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊かたく眼をつぶっていました。するとその時彼の耳には、殆ほとんどとは言えない位、かすかな声が伝わって来ました。「……心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより

結構なことではないのだからね。大王が何と仰つても、言いたくないことは黙って御出で」と。それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあげました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。………（本文）

さて、この「お母さん」には杜子春の「万感の思い」が込められているとともに、この「お母さん」という言葉が発すること、杜子春の「頭の中」（或いは「心の中）」には、再び、本来の「人間らしい心」が甦ってきて、杜子春は、初めて「自分の人生」（それは人間としての「生き方」というものを根本から問い直し考え直す「切っ掛け」（チャンス）を得たのである。そのように仕向けたのは、誰でもない「老人」（仙人）ではあるが、その「老人」（仙人）は、杜子春を自分の「弟子」にしてもよいと思っていたが、しかし、「……どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」と言っている。これは、「……いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな」ともある。——つまり、「……杜子春を自分の『弟子』にしてもよい」というのは、いわば仙人へのほんの「入り口」に過ぎず、一方、「……立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだから」と言うのは、立派な「仙人」になるためには、それこそ何十年という極めて「厳しい修行」の毎日の積み重ねがどうしても必要不可欠になるとともに、たとえ「仙人」になれたとしても、例えば、峨眉山のような人里離れた奥深い山奥に一人住むような生活が、果たして、その人にとって真に人間としての「幸せ」になるのかどうかという問題も残るのである。——つまり、一方の「大金持ち」、一方の「仙人」というのは、どちらも両「極端」になり過ぎていたのであり、人間の「幸せ」というのは、むしろ「中庸」（それは「両端を知り尽くして、中庸を生きる」）ことにこそ在るといえるのが、いわば「作者」（つまり「芥川龍之介」）の「考え方」になるかと思う。

六、新たな生活

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「……どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」と、片目眇の老人は微笑を含みながら言いました。「……なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反って嬉しい気がするのです」。

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。「……いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙って

る訳には行きません」と言う。

「……もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急に厳な顔になって、じつと杜子春を見つめました。「……もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思っていたのだ。——お前はもう仙人になりたいという望も持っていない。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな」と聞くと、「……何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩っていました。「……その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇わないから」と……。

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していました。急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、(いわば「ホームレスの杜子春」に対して)、「……おお、幸、今思い出しましたが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにそう付け加えるのであった。(完)

*

*

女に仙よせん

昔、支那の或田舎に書生が一人住んでいました。何しろ支那のことですから、桃の花の咲いた窓の下に本ばかり読んでいたのでしょう。すると、この書生の家の隣に年の若い女が一人、——それも美しい女が一人、誰も使わずに住んでいました。書生はこの若い女を不思議に思っていたのはもちろんです。実際また彼女の身の上をはじめ、彼女が何をして暮らしているかは誰一人知るものもなかったのですから。

或風のない春の日の暮、書生はふと外へ出て見ると、何かこの若い女の罵っている声が聞えました。それはまたどこかの庭鳥がのんびりと鬨を作っている中に、如何にも物ものしく聞えるのです。書生はどうしたのかと思いいながら、彼女の家の前へ行ってみました。すると眉を吊り上げた彼女は、年をとった木樵の爺さんを引き据え、ぼかぼか白髪頭を擲っているのです。しかも木樵の爺さんは顔中に涙を流したまま、平あやまりにあやまつているではありませんか！「これは一体どうしたのです？ 何もこういう年よりを、擲らないでも善いじゃありませんか！」と、書生は彼女の手を抑え、熱心にしたしなめにかかりました。「第一年上のものを擲るということは、修身の道にもはずれている訣です」と言うのと、「年上のものを？ この木樵りはわたしよりも年下です」と言うのであった。書生は、「冗談を言っただけじゃないか」、「いえ、冗談ではありません。わたしはこの木樵りの母親ですからと言うのであった」。

書生は呆気にとられたなり、思わず彼女の顔を見つめました。やっと木樵りを突き離れた彼女は美しい、——というよりも凜々しい顔に血の色を通わせ、目じろぎもせずこう言うのです。「わたしはこの倅のために、どの位苦勞をしましたから、とうとう年をとってしまったのです」。「では、……この木樵りはもう七十位でしょう。そのまた木樵りの母親だというあなたは、一体いくつになつて居るのです？」と訊くと、「わたしは三千六百歳です」と応えるのであった。

書生はこういう言葉と一しよに、この美しい隣の女が仙人だったことに気づきました。しかしもうその時には、何か神々しい彼女の姿は忽ちどこかへ消えてしまいました。うらうらと春の日の照り渡つた中に木樵りの爺さんを残したまま。……（完）

さて、この「女仙」という題名であれば、もっと多彩な展開の「小説」が書けたかとも思うが、実際は、本文のようなごく短い小説であり、その内容を見てみると、母親という仙人は、まさに「高位の仙人」（不老不死を身につけている仙人）であり、それゆえ、母親の仙人は、すでに「三千六百歳」という年齢にも拘わらず、実に若々しい姿をしているのに比べて、一方の倅（年をとった木樵の爺さん）というのは、本来であれば、母親よりも若く見える筈であるが、仙人としての修行を怠っているために、倅（年をとった木樵の爺さん）というのは、いわば「中位から下位の仙人」（つまり不老不死を身につけていない仙人）ということになり、そのために、倅という仙人は、まさに「年をとった木樵の爺さん」という姿になつて居るのである。

女
体

女体

楊某という支那人が、ある夏の夜、あまり蒸暑いのに眼がさめて、頬杖をつきながら腹んばいになって、とりとめのない妄想に耽っていると、ふと一匹の虱が寢床の縁を這っているのに気がついた。部屋の中にもした、うす暗い灯の光で、虱は小さな背中を銀の粉のように光らせながら、隣に寝ている細君の肩を目掛けて、もずもず這って行くらしい。細君は、裸のまま、さつきから楊の方へ顔を向けて、安らかな寢息を立てているのである。

楊は、その虱ののろくさい歩みを眺めながら、こんな虫の世界はどんなだろうと思つた。自分が二足か三足で行ける所も、虱には一時間もかからなければ、歩けない。しかもその歩きまわる所が、せいぜい寢床の上だけである。自分も虱に生れたら、さぞ退屈だった事であろう。……

そんな事を漫然と考えている中に、楊の意識は次第に朧げになって来た。勿論夢ではない。そうかと言ってまた、現でもない。ただ、妙に恍惚たる心もちの底へ、沈むともなく沈んで行くのである。それがやがて、はっと眼がさめたような気に帰ったと思うと、いつか楊の魂はあの虱の体へはいつて、汗臭い寢床の上を、蠕々然として歩いている。楊は余りに事が意外なので、思わず茫然と立ちすくんだ。が、彼を驚かしたのは、独りそればかりではない。――

彼の行く手には、一座の高い山があった。それがまた自らな円みを暖く抱いて、眼のとどかない上の方から、眼の先の寢床の上まで、大きな鍾乳石のように垂れ下っている。その寢床についている部分は、中に火気を蔵しているかと思うほど、うす赤い柘榴の実の形を造っているが、そこを除いては、山一円、どこを見ても白くない所はない。その白さがまた、凝脂のような柔らかみのある、滑な色の白さで、山腹のなだらかなくぼみでさえ、丁度雪にさす月の光のような、かすかに青い影を湛えているだけである。まして光をうけている部分は、融けるような鼈甲色の光沢を帯びて、どここの山脈にも見られない、美しい弓なりの曲線を、遙な天際に描いている。……

楊は驚嘆の眼を見開いて、この美しい山の姿を眺めた。が、その山が彼の細君の乳の一つだという事を知った時に、彼の驚きは果してどれくらいだった事であろう。彼は、愛も憎みも、乃至また性欲も忘れて、この象牙の山のような、巨大な乳房を見守った。そうして、驚嘆の余り、寢床の汗臭い匂も忘れたのか、いつまでも凝固まったように動かなかつた。

――楊は、虱になつて始めて、細君の肉体の美しさを、如実に観ずる事が出来たのである。――しかし、芸術の士にとって、虱の如く見る可きものは、独り女体の美しさばかりではない。(完)

*

*

さて、この「女体」という作品は、その自分の「視点」を変えることによって、同じ物であっても違って見えて来るということであり、例えば、この作品の主人公である楊某という支那人にとつて、ふだんは見慣れた細君の裸体であったものが、ある日、(自ら)虱となつて(いつか楊の魂はあの虱の体へはいつて、細君の肉体の上を這い回ってみるといふ、そのような虱の「視点」から細君の裸体を見ることによって)始めて、細君の肉体の美しさを、如実に観ずる事が出来たということである。

例えば、われわれ人間というのは、どうしても自分の「視点」(それはその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、倫理観、人生観、生き方、その他」)などに強く支配されていて、その自分の「視点」から世の中を見ていることになる。

つまり、われわれ人間というのは、この世に生まれて今日まで生きてきた「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが生み出されることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガネ」であり、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによつてこそ、初めて、百%純粹な「眼」で「対象」そのものが見えて来るということであり、それがまさに「……芸術の士にとつて、虱の如く見る可きものは、独り女体の美しさばかりではない」ということであり、つまり、大事なものは、自分の「視点」だけに執拗に固執するのではなく、むしろ色々な「視点」から物事をとらえることが何より大事になるということである。

*

*

蜜柑
みかん

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラトフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には言いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじつと両手をつつこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようという元氣さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずると後ずさを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたしい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か言い罵る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラトフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の札を言っている赤帽——そう言うすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行った。私は漸くほつとした心もちになって、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い睡をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のある鞆だらけの両頬を氣持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。言うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいったのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、洗職事件、死亡広告——私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆ど機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋まっている夕刊と、——これが象徴でなくて何である。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなくなって、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、死んだように眼をつぶっ

て、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻りに窓を開けようとしている。が、重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの軋だらけの頬は愈赤くなつて、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしなく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明るい両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点の行く事であつた。にも関わらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとか考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたようななど、黒い空気が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元来咽喉を害していた私は、手中を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やつている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかつていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺すっていた。やつと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃つて背が低かつた。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いよく左右に振つたと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り

過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗な心もちが湧き上って来るのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変だだけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しつかりと三等切符を握っている。……………

私はこの時始めて、言いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れる事が出来たのである。(完)

さて、この「蜜柑」という作品であるが、これは、作者(芥川龍之介自身)が実際に経験したことを基にして書かれた作品であるということである。

例えば、ドラマで有名な『おしん』の主人公というのは、明治四十年生まれで、七歳の時に、口減らしのために、「子守奉公」に出されている。一方、子守のたけも、明治三十二年生まれで、満十三歳の時に、家は、津島家の小作人であったが、その小作の「年貢米」の代わりに、まさに幼い太宰治の「子守奉公」として出されているのである。——つまり、芥川や太宰治などが生まれ育った時代の、当時の日本(特に「東北地方」)の一般の生活ぶりというのは、まさにそのくらい、生活は非常に厳しいものがあつたのである。

さて、突然、十三四の小娘が一人、慌しく汽車の中へと飛び込んで来た。それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のある鞆だらけの両頬を氣持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。言うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、流職事件、死亡広告——私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆ど機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋まっている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなくて、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、死んだように眼をつぶって、うつらうつらし始めた。(つまり「この時の芥川龍之介の心持ちはまさにそのようなものであつた」ということである。)

ところで、汽車が今將に隧道の口へさしかかろうとしている時に、この小娘は、わざわ

ざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとしか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたようななどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来咽喉を書いていた私は、手中を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。(つまり「この小娘は何を血迷ったのか、隧道の中で必死に汽車の硝子戸を開けようとしている。そんなことをすれば、一体どのような事になるかは火を見るより明らかであり、実際、その開けた窓からは、煤を溶かしたようななどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。おかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱り(怒鳴り)つけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたに相違なかったのである。)

ところが、やつと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのぼして、勢いよく左右に振ったと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗な心もちが湧き上って来るのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席

に返って、相不変戦だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……………

私はこの時始めて、言いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れる事が出来たのである、とある。

つまり、ふだんわれわれ人間というのは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」《或いは「利害損得」など》に振り廻されているような日々を送っているわけであり、例えば、夕刊の紙面を見渡しても、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、流職事件、死亡広告——そして、あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋まっている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を靠せながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

そのような時、やっと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いよく左右に振つたと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

そのような情景を見た時、作者（芥川龍之介）という人は、「……或得体の知れない朗な心もちが湧き上つて来るのを意識した」とある。それは「人間らしい温かな心」（姉弟同士がお互いを思いやる温かな心）の情景を見る事によつて、「……私はこの時始めて、言いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れる事が出来た」という事になるのである。

*

*

運

一、清水へ通う人の往来を仕事場から眺めていた一人の青侍が、
ふと思いついたように主の陶器師へ声をかけた

目のあらい簾が、入口にぶらさげてあるので、往来の容子は仕事場にいても、よく見えた。清水へ通う往来は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺装束をした女が通る。その後からは、めずらしく、黄牛に曳かせた網代車を通った。それが皆、疎な蒲の簾の目を、右からも左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。その中で変らないのは、午後の日が暖かに春を炙っている、狭い往来の土の色ばかりである。

その人の往来を、仕事場の中から、何という事もなく眺めていた、一人の青侍が、この時、ふと思いついたように、主の陶器師へ声をかけた。「不変、観音様へ参詣する人が多いようだね」、「左様でございます」。

陶器師は、仕事に気をとられていたせいか、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子にも、悪気らしいものは、微塵もない。着ているのは、麻の帷子であろう。それに萎た採烏帽子をかけたのが、この頃評判の高い鳥羽僧正の絵巻の中の人物を見るようである。「私も一つ、日参でもして見ようか。こう、うだつが上らなくちゃ、やりきれない」、「御冗談で」、「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だって、信心をするよ。日参をしたって、参籠をしたって、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ」と言うのであった。

青侍は、年相応な上調子なものの言いをして、下唇を舐ながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。――竹藪を後にして建てた、藁葺のあばら家だから、中は鼻がつかえるほど狭い。が、簾の外の往来が、目まぐるしく動くのに引換えて、ここでは、甕でも瓶子でも、皆緒ちやけた土器の肌をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からそうしていたように、ひっそりかんと静まっている。どうやらこの家の棟ばかりは、燕さえも巢を食わないらしい。……

翁が返事をしないので、青侍はまた語を継いだ。「お爺さんなんぞも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね」、「左様でございます。昔は折々、そんな事もあったように聞いて居りますが」、「どんな事があつたね」、「どんな事と言って、そう一口には申せませんがな。――しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございませぬ」、「可哀そうに、これでも少しは信心気のある男なんだぜ。いよいよ運が授かるとなれば、明日にも――」、「信心気でございませぬかな。商売気でございませぬかな」。

翁は、眦に皺をよせて笑った。握ねていた土が、壺の形になったので、やっと気が楽になったという調子である。「神仏の御考えなどと申すものは、貴方がたくらいのお年では、中々わからないものでございますよ」、「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだね」、「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないという事じゃございませぬ。そのお授けになる運の善し悪しという事が」、「だって、授けて貰えばわ

かるじゃないか。善い運だとか、悪い運だとか、「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて」、「私には運の善し悪しより、そういう理窟の方がわからなそうだね」と言うのであった。

日が傾き出したのであろう。さつきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい桜の枝を持っていた。「今、西の市で、績麻の店を出している女なぞもそうでございますが、「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつているじゃないか」と言うのであった。

二人は、暫くの間、黙つた。青侍は、爪で頤のひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻のように白く光るのは、大方さつきの桜の花がこぼれたのであろう。「話さないかね。お爺さん」と、やがて、眠そうな声で、青侍が言つた。「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しませうか。また、いつもの昔話でございますが」と、こう前置きをして、陶器師の翁は、徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠長な口ぶりで話し出したのである。

二、その娘は一生安樂に暮せませす様にと清水の観音様へ願かけをすると……

「もうかれこれ三四十年前になりました。あの女がまだ娘の時分に、この清水の観音様へ、願をかけた事がございました。どうぞ一生安樂に暮せませすようにと申しませな。何しろ、その時分は、あの女もたった一人のおふくろに死別した後で、それこそ日々の暮しにも差支えるような身の上でございましたから、そういう願をかけたのも、満更無理はございません。「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社の巫子で、一しきりは大そう流行つたものでございますが、狐を使うという噂を立てられてからは、めつきり人も来なくなつてしまつたようでございます。これがまた、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらな婆さんでございましてな、何さま、あの容子じゃ、狐どころか男でも……」と言ひ、「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺いたいね」と言う。「いや、これは御挨拶で、——そのおふくろが死んだので、後は娘一人の痩せ腕でございますから、いくらかせいでも、暮の立てられようがございませぬ。そこで、あの容貌のよい、利発者の娘が、お籠りをするにも、襦袢（ぼろの服）故に、あたりへ気がひけるといふ始末でございました」。「へえ。そんなに好い女だつたかい」、「左様でございます。気だてと言ひ、顔と言ひ、手前の欲目では、まづどこへ出しても、恥しくないと思ひましたがな」と言うのであった。すると、「惜しい事に、昔さね」と、青侍は、色のさめた藍の水干の袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を言う。翁は、笑声を鼻から抜いて、またゆつくり話つづけた。後の竹藪では、頻りに鶯が啼いている。「それが、三七日の間、お籠りをして、今日が満願という夜に、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂に詣つていた連中の中に、背むしの坊主が一人いて、そいつが何か陀羅尼のようなものを、くどくど誦して来たそうでございます。大方それが、気になつたせいでございませう。うとうと眠気がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓でも鳴いているような心もちで——すると、その声が、いつの間にか人間の語になつて、『ここから帰る路で、そなたに言いよる男がある。その男のいう事を聞くがよい』と、こう聞える

と申すのでございますな。

「はっと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧でございませぬ。が、何と言つてゐるのだから、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひよいと向うを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃拝みなれた、端巖微妙の御顔でございませぬが、それを見ると、不思議にもまた耳もとで、『その男のいう事を聞くがよい』と、誰だか言うような気がしたそうでございませぬ。そこで、娘はそれを観音様の御告げだと、一閃に思いこんでしまいましたたげな」、「はてね」。

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だから下りの坂路を、五条へくだらうとしますと、案の定後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎の暗で、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、猶の事わかりませぬ。ただ、ふり離そうとする拍子に、手が向うの口髭にさわりました。いやはや、とんだ時が、満願の夜に当たつたものでございませぬ。その上、相手は、名を訊かれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。ただ、言う事を聞けと言うばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようになって、つれて行きます。泣こうにも、喚こうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ」、「ははあ、それから」、「それから、とうとう八坂寺の塔の中へ、つれこまれて、その晩はそこですごしたそうでございませぬ。——いや、その辺の事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございませぬ」。

翁は、また毗に皺をよせて、笑つた。往来の影は、いよいよ長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、そこそこに散っている桜の花も、いつの間にかこっちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談言つちやいけない」と、青侍は、思い出したように、頤のひげを抜き抜き、こう言つた。「それで、もうおしまいかい」、「それだけなら、何もわざわざお話し申すこともございませぬ」と、翁は、やはり壺をいじりながら、「夜があけると、その男が、こうなるのも大方宿世の縁だろうから、とてもその事に（いっそのこと）夫婦になつてくれと申したそうでございませぬ」、「成程」、「夢の御告げでもないならともかく、娘は、観音様のお思召し通りになるのだと思つたものでございませぬから、とうとう首を豎にふりました。さて形ばかりの盃事をすませると、まず、当座の用にと申つて、塔の奥から出して来てくれたのが綾を十疋に絹を十疋でございませぬ。——この真似ばかりは、いくら貴方にもちとむずかしいかも存じませぬな」と申したのである。

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。「やがて、男は、日の暮に帰ると言つて、娘一人を留守居に、慌しくどこかへ出て参りました。その後の淋しさは、また一倍でございませぬ。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細くなるのでございませぬ。そこで、心晴らしに、何気なく塔の奥へ行つて見ると、どうでございませぬ。綾や絹は愚な事、珠玉とか砂金とかいふ金目の物が、皮匣に幾つともなく、並べてあると言うじやございませぬか。これにはああ言う気丈な娘でも、思はず肚胸をついたそうでございませぬ」。

「物にもよりますが、こんな財物を持つてゐるからは、もう疑いはございませぬ。引剥でなければ、物盗でございませぬ。——そう思うと、今まではただ、さびしいだけだったのが、急に、怖いのも手伝つて、何だか片時もこうしては、いられないような気になりました」。

た。何さま、悪く放免の手にでもかかろうものなら、どんな目に遭うかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす気で、急いで戸口の方へ引返そうと致しますと、誰だか、皮匣の後から、しわがれた声で呼びとめました。何しろ、人はいないとばかり思っていた所でございますから、驚いたの驚かないのじゃございませぬ。見ると、人間とも海鼠ともつかないようなものが、砂金の袋を積んだ中に、円くなって、坐って居ります。——これが目くされの、皺だらけの、腰のまがった、背の低い、六十ばかりの尼法師でございました。しかも娘の思惑を知ってか知らないでか、膝で前へのり出しながら、見かけによらない猫撫声で、初対面の挨拶をするのでございます。

「こっちは、それ所の騒ぎではないのでございますが、何しろ逃げようという巧みをけどられなどしては大変だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、この婆さんが、今まであの男の炊女（飯炊き）か何かつとめていたらしいのでございます。が、男の商売の事になると、妙に一口も話させぬ。それさえ、娘の方では、気になるのに、その尼がまた、少し耳が遠いと来ているものでございますから、一つ話を何度となく、言い直したり聞き直したりするので、こっちはもう泣き出したいほど、気がじれます。——

三、娘は老婆を押し倒し、綾と絹とを小脇にかかえて外に逃げ出すと

「そんな事が、かれこれ午までつづいたでございましょう。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五条の橋普請が出来たのと言っている中に、幸、年の加減か、この婆さんが、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかつたせいもあるのでございましょう。そこで、娘は、折を計って、相手の寝息を窺いながら、そつと入口まで這って行って、戸を細目にあけて見ました。外にも、いい案配に、人のけはいはございませぬ。——

「此処でそのまま、逃げ出してしまえば、何事もなかつたのでございますが、ふと今朝貫つた綾と絹との事を思い出したので、それを取りに、またそつと皮匣の所まで帰って参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝にさわつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くはただ、あつげにとられて、いたようでございしますが、急に気がいのようになって、娘の足にかじりつきました。そうして、半分泣き声で、早口に何かしゃべり立てます。切れ切れに、語が耳へはいる所では、万一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇うかも知れないと、こう言っているらしいのでございます。が、こつちもここには命にかかわるといふ時でございませぬから、元よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴る。砂金の袋をなげつける。——梁に巢を食った鼠も、落ちそうな騒ぎでございませぬ。それに、こうなると、死物狂いだけに、婆さんの力も、莫迦には出来ませぬ。が、そこは年のちがいでございませぬ。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇にかかえて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には、尼はもう、口もきかないようになつて居りました。これは、後で聞いたのでございますが、死骸は、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅の方に、仰向けになつて、臥ていたそう

でございます。

「こつちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、さすがに気がさしたと見えて、五条京極辺の知人の家をたずねました。この知人と言うのも、その日暮しの貧乏人なのでございますが、絹の一疋もやったからでございますし、湯を沸かすやら、粥を煮るやら、いろいろ経営してくれたそうでございます。そこで、娘も漸く、ほっと一息つく事が出来ました」、「私も、やっと安心したよ」と、青侍は、帯にはさんでいた扇をぬいて、簾の外を眺めながら、それを器用に、ばちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騒々しく笑い興じながら、通りすぎたが、影はまだ往来に残っている。……

「じゃそれでいよいよけりがついたという訳だね」、「ところが」と翁は大仰に首を振って、「その知人の家に居りますと、急に往来の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合う声が聞えます。何しろ、後暗い体ですから、娘はまた、胸を痛めました。あの物盗が仕返ししにでも来たものか、さもなければ、検非違使の追手がかりでもしたもののか、——そう思うともう、おちおち、粥を啜つても居られませぬ」、「成程」、「そこで、戸の隙間から、そつと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、放免が五六人、それに看督長が一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、縄にかかった男が一人、所々裂けた水干を着て烏帽子もかぶらず、曳かれて参ります。どうも物盗りを捕えて、これからその住家へ、実録をしに行く所らしいのでございますな。」

「しかも、その物盗りというのが、昨夜、五条の坂で言いつた、あの男だそうじゃございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございます。これは、当人が、手前に話しました——何も、その男に惚れていたの、どうしたのという訳じゃない。が、その縄目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいじらしくなつて、思わず泣いてしまったと、まあこう言うのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね」、観音様へ願をかけるのも考え物だと、「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやっ行って行けるようになったのだろう」、「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になつて居ります。その綾や絹を売ったのを本に致しましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません」、「それなら、そのくらいな目に遇つても、結構じゃないか」と言うのであった。

外の日の光は、いつの間にか、黄色く夕づいた。その中を、風だった竹藪の音が、かすかながらそこから聞えて来る。往来の人通りも、暫くはとだえたらしい。「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する気でしたんでなければ仕方がないやね」と、青侍は、扇を帯へさしながら、立上つた。翁も、もう提の水で、泥にまみれた手を洗つている——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何かを、感じてでもいるような容子である。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ」、「御冗談で」、「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう」、「手前でございますか。手前なら、そういう運はまっぴらでございますな」、「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、授けて頂くがね」、「じゃ観音様を、御信心なさいまし」、「そうそう、明日から私も、お籠りでもしようよ」。 (完)

さて、この『運』という作品の内容であるが、それは、次のようなものである。まず、清水

へ通う人の往来を仕事場から眺めていた一人の青侍が、ふと思いついたように主の陶器師へ声をかけたとある、それは、「不相変、観音様へ参詣する人が多いようだね」、「左様でございます」。私も一つ、日参でもして見ようか。こう、うだつが上らなくちゃ、やりきれない」、「御冗談で」、「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だって、信心をするよ。日参をしたって、参籠をしたって、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ」と言う。……

そして、「お爺さんなんぞも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね」、「左様でございます。昔は折々、そんな事もあったように聞いて居りますが」、「どんな事があつたね」、「どんな事と言って、そう一口には申せませんが。翁は、「……神仏の御考えなどと申すものは、貴方がたくらいのお年では、中々わからないものでございますよ」、「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね」、「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないという事じゃございません。そのお授けになる運の善し悪しという事が」、「だって、授けて貰えばわかるじゃないか。善い運だとか、悪い運だとか」、「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて」、「私には運の善し悪しより、そういう理窟の方がわからなそうだね」と言うのであつた。この部分は意外と分かり難い内容になっているかと思うので、ここではごく簡単に説明しておきたいと思う。

*

*

まず、「運」とは、まさに「その時の『巡り合わせ』であり、その時の『巡り合わせ』が良ければ、(一般に)『運』が良かったという事になるかと思う。そして、これが一般的な認識かと思うが、しかし、「作者」(芥川龍之介)という人は、もっと深くものを考察しているのであり、例えば、まだ若い青侍という人は、陶器師が語る「一連の話」を聞き終えた後、「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやって行けるようになったのだらう」、「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になって居ります。その綾や絹を売ったのを本に致しましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません」(娘は「一生安樂に暮せます様に」と清水の観音様へ願かけをした)のである)、「それなら、そのくらいな目に遇つても、結構じゃないか」、「人を殺したって、物盗りの女房になつたって、する気でしたんでなければ仕方がないやね」と、青侍は、扇を帯へさしながら、立上つた。そして、「とにかく、その女は仕合せ者だよ」と言うのであつた。つまり、まだ若い青侍という人は、その娘は、「……今では何不自由ない身の上になっているのだから、とにかく、その女は仕合せ者だよ」と、その部分だけを重点的に見て、一方の「……人を殺したって、物盗りの女房になつたって、する気でしたんでなければ仕方がないやね」と、この部分は極めて軽く見流しているのである。そして、これが若い人の一般的なものの「見方や考え方」でもあり、例えば、今日の若者(大学生その他など)でも、『……何かおいしい金儲けの口はないか?と、そのようなことばかりに心を奪われていて、時にはオレオレ詐欺のようなものにも手を染めかねないのである。

ところが、一方の陶器師(お爺さん)という人は、若い青侍の「とにかく、その女は仕合せ者だよ、お爺さんも、そう思うだらう」と訊かれて、「手前でございますか。手前なら、そういう運はまっぴらでございますな」と言うのである。これは、一体、どのよ

うな意味合いになるのかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、この「お爺さん」(陶器師)という人は、当然のことながら、長年、陶磁器などを創り出している「陶芸家」であり、それゆえ、物を創り出す「喜び」というものを我が身に感じて確と実感している人であり、従って、若い青侍のような「……何不自由ない身の上(いわば裕福であれば、それでもう仕合せという価値観)」とは明らかに違うのである。それに加えて、(不可抗力的にも)「人を殺したり、物盗りの女房になったり」、或いは、「その物盗りの綾や絹などを持ち出し売って、それで何自由ない身の上になったとしても」、そのような人生は、自分は「まっぴらでございますな」と言っているのである。

*

*

例えば、若い人の「経験」を踏まえない「頭の中」だけの「観念的意識」では、「……人を殺すことなど何でもない。何の罪の意識なども感じず、平気で人が殺せる」と考えがちである。しかし、実際に「人を殺して」みれば、その人は、その余りにも「生々しい現実」を実感せざるを得ないのである。それは、相手を殺した時の実に様々な「生々しい様子」、例えば、その時のまさに殺人現場の「様子、空気、温度、まわりの風景、臭い、また、相手の生々しい声や顔の表情或いは相手の感触、その他」、まさに相手を殺した時の相手の「生々しい声」や相手の生々しい「顔の表情」、その他が、まさにその人の「目」(五感)に焼き付いて消えないのである。その人の「頭の中」(或いは「心の中」)に焼き付いてしまい、死ぬまで消し去ることができ得ないのである。そして、何らかのきっかけがある度に、その人は、その相手を殺した時の実に様々な「生々しい様子」が何度も何度も津波のように襲って来る(つまり「想い出されて来る」ということである。その度に、その人の「心」は、まさに「恐怖と戦慄」とにうち震えることになる。その「恐怖と戦慄」とに圧倒されてしまう、打ちのめされてしまう。そのように、その人は、まさに「罪の重さ」というものを実感せざるを得ないのである。そして、自分こそ、まさに「風」に過ぎなかったということを思い知らされるのである。しかも、それは、年を取れば取るほど、そのような「傾向」(つまり自分が過去に犯した様々な「罪の重さ」というものに襲われ、そして、打ちのめされることが多くなるということである)。

罪と罰

さて、われわれ人間の「罪」と「罰」というのは、その人自身がいちばん自分が犯した「罪」の何たるかは、極めて微妙なところまで感じ分けけるとともに、その自分自身が犯した「罪」に対して、裁判上の「刑罰」というのは、いわば外的な「罰」に過ぎないということである。そして、最終的に自分を裁くものは、やはりわれわれ人間の「心の中」(或いは「魂の中」)でも、いわゆる「理知的部分」(その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」)であり、それは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とはどこまで行っても妥協できないとともに、自分自身の「善悪」をどこまでも厳密に感じ分けている存在でもあるわけである。つまり、他人をごまかすことは、いくらでもでき得るだろうが、しかし、自分自身をごまかすことはでき得ず、絶えず自分自身が犯した「罪」に対して、いわゆる「理知的部分」(その最も奥深い「無意識の世界」)に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」によって厳密に吟味され続けて

は、内なる「審判」(つまりは「内的制裁」(罰))を受けざるを得ないということである。
それが、まさにわれわれ人間の「罪と罰」ということになるのである。

*

*

鼻

鼻

一、内供は有る事を長く気に病んで来た

禅智内供の鼻と言えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸（約十五六センチ）あって上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。言わば細長い腸詰のような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると言う事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と言う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が碗の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと言う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられている内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう言う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと言つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つていない。内供の自尊心は、妻帯と言うような結果的な事実には左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようとして試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝して見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖をついたり顎の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえつて長く見えるような気さへした。内供は、こう言う時には、鏡を箱へしまひながら、今更のようにため息をついて、不承不承（いやいやながら）にまた元の経机へ、観音經をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗の類も甚だ多い。内供はこういう人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたか

ったからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。――しかし鍵鼻はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所為である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさえ思った事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かったとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹や馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かったという事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなくなるだろうと思った。

内供がこういう消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに言うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上になら下げていくのではないか。

二、長い鼻を短くする法を試みてみる

ところがある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者というのは、もと震旦から渡って来た男で、当時は長樂寺の供僧になっていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないという風をして、わざとその法もすぐにやってみようとは言わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の人数をかけるのが、心苦しいというような事を言った。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそういう策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのである。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聽従する事になった。

その法というのは、ただ、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませるといふ、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が言った。

――もう茹だった時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思ったからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食ったようにむず痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を言った。

——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。内供は首を振って、痛くないという意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼を使って、弟子の僧の足に輝のきれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、——痛うはないで、と答えた。実際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりかえって気もちのいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒のようなものが、鼻へ出来はじめた。言わば毛をむしった小鳥をそっくり丸炙にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう言った。——これを鑷子でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分っても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承（いやいやながら）に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、——もう一度、これを茹でればようござる。と言った。内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の言うなりになっていた。

三、鼻が短くなる

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの顎の下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはしないかという不安があった。そこで内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

ところが二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ

落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を言いつかつた下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。内供ははじめ、これは自分の顔変わりをしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が哂う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ哂うにしても、鼻の長かった昔とは、哂うのにどこもなく容子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると言え、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

四、以前以上に哂われるようになる

——前にはあのようにつけつけとは哂わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こう呶く事があった。愛すべき内供は、そう言う時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。——内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して言えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまいは鼻の療治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠える声があるので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまわして、毛の長い、痩せた彪犬を逐いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら、逐いまわしているのである。(これは「実に悪意に充ちた行為であり」それ故、(温厚な)内供も(激怒して)、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。

五、鼻の大きさが元に戻る

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさいほど枕に通って来た。その上、寒さもめつきり加わったので、老年の内供は寝つ

こうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光っている。禅智内供は、蓆を上げた縁に立つて、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来たのはこの時である。内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなつたのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。(完)

*

*

さて、この芥川龍之介の『鼻』という作品は、有名な夏目漱石から「高い評価」を得たという事であるが、それでは、夏目漱石自身、この作品の何所に「心が動かされた」という事になるのだろうか？ 其等のことを少し順を追って考察してみたいと思う。

まず、その内容であるが、「……禅智内供の鼻と言え、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸(約十五六センチ)あつて上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。言わば細長い腸詰のような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。——五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてしまっている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると言う事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と言う語が出て来るのを何よりも惧れていた。そして、内供が鼻を持てあました理由は二つあり、——一つは実際の、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと言う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦しめた重大理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである」。

さて、ここまでの引用文でも判るように、「……禅智内供という人は、表面では今でもさほど気にしていない様な顔をして澄ましているが、実は、内心では始終この鼻を苦しめた

んで来たのである。しかも、自分が鼻を気にしていると言う事を、人に知られるのが嫌だったとともに、内供は日常の談話の中に、鼻と言う語が出て来るのを何よりも惧れていたのである。これは、心理学的には明らかに、「劣等感」(コンプレックの)類であるが、また、内供が鼻を持てあました理由には二つあり、「……一つは、実際に鼻の長いのが不便だったからであるが、しかし、それは内供にとって決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではなく、むしろ内供は実にこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだのである」とある。これは非常に興味深い「言葉」であり、それ故、もう少し深めて考えてみたい。

まず、われわれ人間というのは、多かれ少なかれ、誰でも何らかの「劣等感」(コンプレックの)類を持つているものであり、それは、太っているとかやせているとか、頭が薄いかか禿げているとか、色が白いか黒いとか、脚が長いとか短いとか、顔にしみやしわ或いはほくろがあるとかないとか、その他、そのような容姿容貌だけではなく、例えば、その人の「……身分、生い立ち、年齢、学歴、職歴、収入、社会的地位、恋愛、結婚、家族、生活状況、病気、老い、様々な人間関係、その他」などもあり、其等から生じる何らかの「劣等感」(コンプレックの)類もあり、そして、表面的には何も気にしていない様な顔をして澄ましているが、実は、内心では始終その「何か」をいつも気にして悩んだり、また、自分がそのことを気にしていると言う事を、人に知られるのが嫌であったり、日常の談話の中に、それに関する語が出て来るのを何よりも惧れていたたりして、その人はその「何か?」によって(自分や他人から)傷つけられる「自尊心」のために苦しんだりしているのである。これは、この地球上のありとあらゆる人たちにとって、(たった一人の例外もないほどの)絶対的な「真理」でもあるのである。

*
そこで、内供という人は、この長い鼻を実際以上に短く見せる方法はないかと密かに考えて、人のいない時に、鏡へ向って、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝して見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖をういたり頤の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もなかった。

*
それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧侶講説などのしばしば行われる寺であり、従つてここへ出入する僧俗の類も甚だ多い。内供はこういう人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたのである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子も、まして柑子色の帽子や椎鈍の法衣などは、有れども無きが如くであり、内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。しかし鍵鼻はあつても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従つて、内供の心は次第にまた不快になつた。最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つたが、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹や馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、蜀漢の劉玄德の耳が長かつたという事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこういう消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに言うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。

しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸（約十五六センチ）の長さをぶらりと唇の上
にぶら下げているのであった。

さて、これらは何一つ特別のことではなく、多かれ少なかれ、誰もが同じような事を考
えたり試みたりするものであるが、例えば、（女性であれば）化粧をはじめ、髪型や髪
色などを変えたり、（男であれば）発毛剤をはじめ、増毛やかつらなどを被ったり、また、
痩せて見える様な服装や厚底などで背を高く見せたり、その他、そのようなことで少しで
も自分を良く見せようとするものであり、勿論、それでうまく行くような場合もあれば、
なかなか思うように行かない場合もあるだろうが、主人公の内供という人は、最終的には
「……ある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を
短くする法を教わって来たというので、最初は、いつものように鼻などは気にもかけて
いないという風を装って、わざとその法もすぐにやって見ようとは言わずにいたが、内供
のそういう策略（心情）を弟子は深く汲み取って、口を極めてこの法を試みる事を勧める
ので、内供は、その熱心な勧告に聴従する事になるのである。そして、その法（方法）
というのは、「……ただ湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませるという極めて簡単なもの
であった」が、これを現代風に置き換えてみれば、最終的にはまさに最新の『美容整形』
（それは「顔の各部位を始め、胸、腰、脚、全身美容、その他」などを実際に試行（試
みて見る）という事である。

*

*

さて、実際に『……内供の鼻を湯で茹でて、その鼻を人に踏ませるということを実行す
る』ことよって、鼻は――あの顎の下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮し
て、今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保っている。こうなれば、もう誰も晒うも
のではないにちがいない。――鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満
足そうに眼をしばたいた。しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはしないかと
いう不安があった。そこで内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手
を出して、そっと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけ
で、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさ
めると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、
幾年にもなく、法華経書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。（終に
内供の「長年の念願」《大きな鼻を小さくしたいという願望》が叶ったのである。）

ところが二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、
池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろ
じろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。それのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ
落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向い
て可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出して
しまった。用を言いつかった下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いてい
ても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。
内供ははじめ、これは自分の顔変わりをしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈
だけでは十分に説明がつかないようである。――勿論、中童子や下法師が晒う原因は、そ
こにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにとど
ことなく容子がちがう（つまり悪意がある）。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の

方が滑稽に見えると言え、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

そして、次の文章が、(恐らく)夏目漱石の『心を動かした内容』の一つになっているのではないかと思うが、それは、次のようなものである。

つまり、「……人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来る時、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して言えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者(第三者)の利己主義(つまりエゴ)をそれとなく感づいたからにほかならない」とある。

まず、われわれ人間には自分の「位置」というものがあり、それは、自分の「……身分、生い立ち、年齢、学歴、職歴、収入、社会的地位、恋愛、結婚、家族、生活状況、病気、老い、様々な人間関係、また、(自分の)考え方、価値観、道徳(倫理)感、人生観、生き方、その他」などであるが、われわれ人間というのは、それが意識的であれ無意識的であれ、いつも他人と自分を比較対照しているものであり、そして、自分よりも恵まれているものを見ると、(自然と)うらやましいと思ったり自分もああいふふうになりたいとか、逆に、ねたんだり恨んだり時には批判的になったり、また、自分と同じくらいであれば、なにか共有の感情を抱いたり安心したりするものであり、そして、自分よりも恵まれていない様な場合には、(自然と)同情的になったり時には何か助けてやろうと思ったり、逆に、(今度は)相手を軽く見たり軽蔑したり時には差別したりするものである。このような「思いや考え」がわいわい人間の「心の中」では絶えず生々しく蠢いているのである。

例えば、ある人が(長年)自分の或る美容のことで深く悩んでいて、そこで一大決心をして、まさに最新の『美容整形』(それは「顔の各部位を始め、胸、腰、脚、全身美容、その他」などを実際に試行(試みて見る)と、自分でも大満足の理想的な美容になったとする。つまり、本人は大満足であるが、他人が自分の美容をどう見るかはまた別問題になるのだろう。そして、それが芸能人やタレントのような人であれば、各メディアをはじめ、実に様々な機会に自分の容姿容貌を世間に晒すことになるかと思う。すると、それを見た人たちは、「……あれ、今までとは何か違うんじゃないの?」とか、「……あれ、今までより綺麗になったじゃないの?」とか、実に色々な意見や感想などがSNS上などでも飛び交うようになるかと思う。

もちろん、(一般的には)「……あつ、きれい! かわいい!」などという感想になるかと思うが、一方、その人をよく知るファンなどであれば、「……あれ、前はこうだったのに、何か美容整形でもしたんじゃないの!」という疑惑が生じたり、また、それをSNS上などで拡散などをすれば、たちまち多くの人たちの知るところとなり、すると、或るメディアの取材などで、「……実はこういう噂があるんですが、実際、どうなんですか?」と訊かれた時に、一つは、「……自分は美容整形などはしていません」と応える場合と、もう一つは、「……実はどここの部分を美容整形しました」と応える場合があるかと思うが、特に後者の場合、何も知らずに見ていた時には、素直に、「……あつ、きれい! かわいい!」と思えていたものが、「……えつ、美容整形していたの?」ということ、

今までのように素直に見ることが出来なくなったり、或いは、批判的になったりする場合もあるかと思う。(例えば、昔、弘田三枝子さんという非常に人気があった女性歌手がいて、ある時、その人が別人のような容貌になったのを見て世間は驚き、(勿論)それを素直に受け入れる人たちも多かったが、逆に、「……あれは絶対に美容整形したに違いない」と批判的にとらえて、いわばバッシングの様なことも実際にあったのである。)

また、夏目漱石の場合、父親から非常に憎悪されていて、生後四ヶ月で「里子」、又、一歳の時には、父の親友であった「塩原夫婦の養子」として知られて行くのである。この時、塩原夫婦は、経済的にも余裕があり、それ故、夏目漱石を可哀想と思つて、大事に育てた事になるかと思う。(つまり「塩原夫婦の位置が上で夏目漱石の位置は下になる。')

ところが、義理の「父親の不倫騒動」などから夫婦仲が悪くなり、結果、別居・離婚という事になるとともに、塩原家は没落してしまうのである。一方、夏目漱石は、再び、実家に戻り、その後、東京帝国大学英文科卒業後、松山で愛媛県尋常中学校教師、熊本で第五高等学校教授などを務めたあと、三十歳の時、イギリスへ二年間留学し、帰国後は東京帝国大学講師として英文学を講じ、やがて朝日新聞の専属小説家として有名人になっていくのである。すると、没落して、生活に困っていた義理の塩原氏は、有名になった夏目漱石の所を頻繁に訪れては、お金をせびるようになるのである。(この時の二人の關係は、逆転して、夏目漱石の位置が上で義理の塩原氏の位置は下になる)。すると、義理の塩原氏に見れば、何で自分だけこんな酷い境遇に陥っているのか、その様に夏目漱石を羨んだり妬んだりしている内に、ふと自分と同じ様な不幸に陥れて見たいような気になる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事にもなる。それが、夏目漱石の所を頻繁に訪れては、お金をせびるという行為であり、相手を「困らせてやれ！」という悪意にもなつて行くのである。

また、今日の様な「インターネット時代」には、実に膨大な多種多様な意見や感想などがSNSなどで飛び交うようになるが、これらも基本はすべて同じことであり、われわれ人間には自分の「位置」というものがあり、それは、自分の「……身分、生い立ち、年齢、学歴、職歴、収入、社会的地位、恋愛、結婚、家族、生活状況、病氣、老い、様々な人間関係、また、(自分の)考え方、価値観、道徳(倫理)感、人生観、生き方、その他」などであるが、われわれ人間というのは、それが意識的であれ無意識的であれ、いつも他人と自分を比較対照しているものであり、そして、自分よりも恵まれているものを見ると、(自然と)うらやましいと思つたり自分もああいうふうになりたいとか、逆に、ねたんだり恨んだり時には批判的になったり、また、自分と同じくらいであれば、なにか共有の感情を抱いたり安心したりするものであり、そして、自分よりも恵まれていない様な場合には、(自然と)同情的になったり時には何か助けてやろうと思つたり、逆に、(今度)相手を軽く見たり軽蔑したり時には差別したりするものである。このような「思いや考え」がわれわれ人間の「心の中」では絶えず生々しく蠢いているのである。

*

*

さて、主人公の内供という人は、『……前にはあのようにつけつけとは睨わなんだて……』と思ひなして、なまじいに、鼻の短くなつたのが、かえつて恨めしくなつて来た。すると、「……ある夜の事である。ふと鼻がいつになく、むず痒いのにながが。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ」と思うのであった。……

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰つて来たのはこの時である。内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸(約十五六寸)あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中にまた元通り長くなつたのを知ると、それと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた。「……こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない」と、内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。(完)

さて、ここで誰もが不思議に思うのは、「……こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない」という言葉であり、たとえ長い大きな鼻に戻つたとしても、まわりの人たちに「晒われ続ける事」には何も変わりはないのである。それでは、なぜ「……内供は鼻が一夜の中にまた元通り長くなつたのを知ると、それと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた」となるのか? ——ここにこそ、まさに「作者」(芥川龍之介)の真に優れた「深い洞察」があるのである。それは、一体、何かと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、たとえ同じ笑われるにしても、「……自然に笑われるのと、悪意を以て笑われるのとでは、全く違うのであり、悪意を以て笑われる方が、遙かにその人の『自尊心』を深く傷つけられる事になるのである」。これは、すべてのことに通じてのことであり、人は「悪意に充ちた言動」によってこそ、深く傷つくのである。人を深く悩まし、深く苦しめ、そして、終には死(自殺)へと追いやるのは、まさにこの「悪意に充ちた言動」に寄つてなのである。どれほど多くの人たちが、まさに「悪意に充ちた言動」によって、その人の「自尊心」を深く傷つけられ、精神的に深く追い込まれ、終には精神を病んでしまひ、そして、最後には死(自殺)へと追い込まれてしまふ事にもなつてしまふことか。……

一方、「悪意に充ちた言動」に対して、自分も「悪意に充ちた言動」で応酬する場合もあるかと思うが、この場合、お互いに相手の悪口を悪意を以て言い合うので、結局、お互い深く傷つく事になり易いかと思うが、それでも「言い返す」(やり返す)ことで自分の「自尊心」は(その人なりに)保たれる事になるのかも知れない。そして、様々な「悪意に充ちた言動」によって、その人の「自尊心」が深く傷つけられ、精神的に深く追い込まれて来た時に、その人は、今度はその「人間や社会」などに対して敵対的になつて、何らかの「不正や犯罪」などを行なう様な人間にもなりかねないのである。

例えば、無差別殺人者というのは、突然、無差別殺人者になるのではない。そのためには、長いいわば「負の感情」の積み重ねがなければならぬ。例えば、ある人にいじめられれば、その人を恨み、また、ある人に馬鹿にされれば、その人を憎む。或いは、ある人に虐待されれば、今度は、その人に殺意を抱く。その他、そのように、実にいろいろな人たちから実に様々な形でいじめられた人は、最初のうちは、ある特定の相手に「恨みの感情」を抱くものであるが、あまりにも数が多くなり過ぎてしまふと、今度は、特定の相手だけを憎むだけでは、とても追いつかなくなつてしまひ、最後には、まさに「人間」そのものへの「恨み」(怨念)へと変貌してしまふという事である。そうなると、今度は、特定の相手ではなく、「……人間であれば、もう誰でもいい」という、まさに典型的な「無

差別殺人者」の「心理状態」が、初めてここに形成されるのである。例えば、アメリカなどでもよく発生する「ライフル銃乱射事件」なども、多くの場合、それは、さんざんいじめられた人の、いわば人間への「復讐劇」になっている場合が多いのだろう。

*

*

さて、本文に戻りたいと思うが、主人公の内供という人は、『……前にはあのようにつけつけとは晒わなんだて……』と思いなして、なまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなってきた。すると、ある夜のこと、ふと鼻がいつになく、むず痒いのに気がついて、手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。――翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来たのである。それは昔の長い鼻の感覚である。内供は鼻が一夜の中にまた元通り長くなったのを知ると、それと同時に、鼻が短くなった時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。「……こうなれば、もう誰も（悪意に充ちた言動）で（自分を）晒うものはないにちがいない」と、内供は心の中でこう自分に囁くのであった。（完）

*

*

芋
粥いもがゆ

一、主人公の具えた風采と周囲から受けるその待遇

元慶の末か、仁和の始にあつた話であろう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めていない。読者は唯、平安朝という、遠い昔が背景になつていとう事を、知つてさえいてくれれば、よいのである。——その頃、摂政藤原基経に仕えていた侍の中に、某という五位があつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちゃんと姓名を明にしたいのであるが、生憎旧記には、それが伝わっていない。恐らくは、實際、伝わる資格がない程、平凡な男だつたのであろう。一体旧記の著者などという者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがう。王朝時代の小説家は、存外、閑人でない。——とにかく、摂政藤原基経に仕えている侍の中に、某という五位があつた。これが、この話の主人公である。

五位は、風采の甚揚らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下つている。口髭は勿論薄い。頬が、こけているから、頤が、人並はずれて、細く見える。唇は——一々、数え立てていければ、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出来上つていたのである。

この男が、何時、どうして、基経に仕えるようになったのか、それは誰も知っていない。が、余程以前から、同じような色の褪めた水干に、同じような菱々した烏帽子をかけて、同じような役目を、飽きずに、毎日、繰返している事だけは、確である。その結果であるう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思われない。(五位は四十を越していた)。その代り、生れた時から、あの通り寒むような赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路の衢風に、吹かせていたという気がする。上は主人の基経から、下は牛飼の童児まで、無意識ながら、悉くそう信じて疑う者がない。

こういう風采を具えた男が、周囲から受ける待遇は、恐らく書くまでもないことである。侍所にいる連中は、五位に対して、殆ど蠅程の注意も払わない。有位無位、併せて二十人に近い下役さえ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めていゝ。五位が何か言いつけても、決して彼等同志の雑談をやめた事はない。彼等にとっては、空気存在が見えないように、五位の存在も、眼を遮らないのであろう。下役でさえそうだとすれば、別当(政所の長官)とか、侍所の司とかいう上役たちが頭から彼を相手にしないのは、寧ろ自然の数(成り行き)である。彼等は、五位に対すると、殆ど、子供らしい無意味な悪意を、冷然とした表情の後に隠して、何を言うのでも、手真似だけで用を足した。人間に言語があるのは、偶然ではない。従つて、彼等も手真似では用を弁じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだど、思っているらしい。そこで彼等は用が足りない、この男の歪んだ採烏帽子の先から、(下は)切れかかった藁草履の尻まで、万遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で晒いながら、急に後を向いてしまふ。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意気地のない、臆病な人間だつたのである。

ところが、同僚の侍たちになると、進んで、彼を鬪弄しようとした。年かさの同僚が、

彼の振わない風采を材料にして、古い洒落を聞かせようとするとする如く、年下の同僚も、また、それを機会にして、所謂興言利口（人を笑わせたり感心させたりする話術）の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを品隣して（其等の優劣や品質などを論じて）飽きる事を知らなかった。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ唇の女房と、その女房と関係があったという酒のみの法師とも、屢彼等の話題になった。その上、どうかすると、彼等は甚だ、性質の悪い悪戯さえする。それを今一々、列記する事は出来ない。が、彼の篠枝の酒を飲んで、後へ尿を入れて置いたという事を書けば、その外は凡、想像される事だろうと思う。

しかし、五位はこれらの揶揄に対して、全然無感覚であった。少くも、わき眼には、無感覚であるらしく思われた。彼は何を言われても、顔の色さえ変えた事がない。黙って例の薄い口髭を撫ながら、するだけの事をしてすましている。唯、同僚の悪戯が、嵩じすぎで、鬚に紙切れをくつつけたり、太刀の鞘に草履を結びつけたりすると、彼は笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは」と言う。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時或いじらしさに打たれてしまう。（彼等にいじめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが――多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めている）。――そういう気が、臙げながら、彼等の心に、一瞬間の間、しみこんで来るからである。唯その時の心もちを、何時までも持ち続ける者は甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があった。これは丹波の国から来た男で、まだ柔かい口髭が、やと鼻の下に、生えかかった位の青年である。勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を軽蔑した。ところが、或日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」という声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るようになった。栄養の不足した、血色の悪い、間のぬけた五位の顔にも、世間の迫害に、べそを掻いた、「人間」が覗いているからである。この無位の侍には、五位の事を考える度に、世の中のすべてが急に本来の下等さ（質の悪さ）を露すように思われた。そうしてそれと同時に霜げた赤鼻と数える程の口髭とが何となく一味の慰安を自分の心に伝えてくれるように思われたのである。……

しかし、それは、唯この男一人に、限った事である。こういう例外を除けば、五位は、依然として周囲の軽蔑の中に、犬のような生活を続けて行かなければならなかった。第一彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍の水干と、同じ色の指貫とが一つずつあるのが、今ではそれが上白んで、藍とも紺とも、つかないような色に、なっている。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴の色が怪しくなっているだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が一通りでない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が出ているのを見ると、口の悪い同僚でなくとも、瘦公卿の車を牽いている、瘦牛の歩みを見るような、みすばらしい心もちがする。それに佩っている太刀も、頗る寛束ない物で、柄の金具も如何わしければ、黒鞆の塗も剥げかかっている。これが例の赤鼻で、だらしなく草履をひきずりながら、唯でさえ猫背なのを、一層寒空の下に背ぐくまって、もの欲しうに、左右を眺め眺め、きざみ足に歩くのだから、通りがかりの物売りまで莫迦にするのも、無理はない。現に、こういう事さえあった。……

或る日、五位が三条坊門を神泉苑の方へ行く所で、子供が六七人、路ばたに集って、何

かしているのを見た事がある。「こまつぶり」（独楽の呼称）でも、廻しているのかと思つて、後ろから覗いて見ると、何処かから迷つて来た、彪犬の首へ繩をつけて、打つたり殴いたりしているのであつた。臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があつても、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行為に現わしたことがない。が、この時だけは相手が子供だと言うので、幾分か勇氣が出た。そこで出来るだけ、笑顔をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれば、痛いでのう」と声をかけた。すると、その子供はふりかえりながら、上眼を使つて、蔑すむように、じろじろ五位の姿を見た。言わば侍所の別当が用の通じない時に、この男を見るような顔をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれとうもない」、その子供は一足下りながら、高慢な唇を反らせて、こう言った。「何じゃ、この鼻赤めが」と。五位はこの語が自分の顔を打つたように感じた。が、それは悪態をつかれて、腹が立つたからでは毛頭ない。言わなくともいい事を言つて、恥をかけた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが悪いのを苦しい笑顔に隠しながら、黙つて、又、神泉苑の方へ歩き出した。後では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べつかつこう」（あかんべえ）をしたり、舌を出したりしている。勿論彼はそんな事を知らない。知つていたにしても、それが、この意気地のない五位にとつて、何であらう。……

では、この話の主人公は、唯、軽蔑される為にのみ生れて来た人間で、別に何の希望も持つていないかと言うと、そうでもない。五位は五六年前から芋粥という物に、異常な執着を持つている。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を言うのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさえ、上せられた。従つて、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさえ、飲めるのは僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいという事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつていた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さえそれが、彼の一生を貫いている欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は彼がその為に、生きていると言つても、差支えない程であつた。——人間は、時として、充されるか充されないか、わからない欲望の為に、一生を捧げてしまう。その愚を晒う者は、畢竟、人生に対する路傍の人に過ぎない。

しかし、五位が夢想していた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事實となつて現れた。その始終を書こうと言うのが、芋粥の話の目的なのである。

二、饗宴の席で、利仁から芋粥を飽かせ申そうという提案を

或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。（臨時の客は二宮の大饗と同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に vari が無い）。五位も、外の侍たちにまじつて、その残肴の相伴をした。当時はまだ「取食み」（残り物を乞食に与える）の習慣はなくて、残肴（残り物）は、その家の侍が一堂に集まつて、食う事になつていたからである。尤も、大饗に等しいと言つても昔の事だから、品数の多い割りに疎な物はない、餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮎、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしている。が、何時も人数が多いの

で、自分が飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かった。そうして気のせい
いか、何時もより、余程味が好い。そこで、彼は飲んでしまった後の椀をしげしげと眺め
ながら、うすい口髭についている滴を、掌で拭いて誰に言うともなく、「何時になつた
ら、これに飽ける事かろう」と、こう言った。

「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないそうな」。五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑
った。鏝のある、鷹揚な、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、
その人の方を見た。声の主は、その頃、同じ基経の恪勤になっていた、民部卿時長の子藤
原利仁である。肩幅の広い、身長の群を抜いた逞しい大男で、これは、ゆで栗を噛みな
がら、黒酒の杯を重ねていた。もう大分酔がまわっているらしい。「お気の毒な事じゃ
の」と、利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫とを一つにしたような声で、語
を継いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申そう」と言うのであった。

始終、いじめられている犬は、たまに肉を貰っても容易によりつかない。五位は、例の
笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、利仁の顔と、空の椀とを等分に見比
べていた。「おいやかな」、「……」、「どうじゃ」、「……」、五位は、その中に、衆人の視
線が、自分の上に、集まっているのを感じ出した。答え方一つで、又、一同の嘲弄を、
受けなければならぬ。或は、どう答えても、結局、莫迦にされそうな気さえる。彼は
躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭そうな声で、「おいやなら、たつてとは
申すまい」と言わなかったなら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べていた事で
あろう。彼は、それを聞くと、慌しく答えた。「いや……忝うござる」と……。

この問答を聞いていた者は、皆、一時に、失笑した。「いや……忝うござる」。――
こう言つて、五位の答を、真似る者さえある。所謂、橙黄橘紅(黄色い橙と赤い橘の
果実)を盛った窪坏や高坏の上に多くの揉烏帽子や立烏帽子が、笑声と共に一しきり、波
のように動いた。中でも、最も、大きな声で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。
「では、その中に、御誘い申そう」と、そう言いながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。
こみ上げて来る笑と今飲んだ酒とが、喉で一つになったからである。「……しかと、よろ
しいな」。「忝うござる」と言うのであった。

五位は赤くなつて、吃りながら、又、前の答を繰返した。一同が今度も、笑つたのは、
言うまでもない。それが言わせたさに、わざわざ念を押し当の利仁に至つては、前より
も一層可笑そうに広い肩をゆすつて、哄笑した。この朔北の野人は、生活の方法を二つ
しか心得ていない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑う事である。

しかし幸に談話の中心は、程なく、この二人を離れてしまった。これは事によると、
外の連中が、たとい嘲弄にしる、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるのが、不快だ
つたからかも知れない。とにかく、談柄(話題)はそれからそれへと移つて、酒も肴も
残り少なくなつた時分には、某という侍学生が、行膝の片皮へ、両足を入れて馬に
乗ろうとした話が、一座の興味を集めていた。が、五位だけは、まるで外の話が聞えない
らしい。恐らく芋粥の二字が、彼のすべての思量を支配しているからであろう。前に雉子
の炙いたのがあつても、箸をつけない。黒酒の杯があつても、口を触れない。彼は、唯、
両手を膝の上に置いて、見合いをする娘のように霜に犯されかかった鬢の辺まで、初心
らしく上気しながら、何時までも空になった黒塗の椀を見つめて、多愛もなく、微笑して
いるのである。……

三、今朝利仁は五位を誘い、遠く越前の敦賀まで馬旅に出る

それから、四五日たった日の午前、加茂川の河原に沿って、栗田口へ通う街道を、静に馬を進めてゆく二人の男があった。一人は濃い縹の狩衣に同じ色の袴をして、打出の太刀を佩いた「鬚黒く鬢ぐきよき」男である。もう一人は、みすぼらしい青鈍の水干に、薄綿の衣を二つばかり重ねて着た、四十恰好の侍で、これは、帯のむすび方のだらしない容子と言ひ、赤鼻でしかも穴のあたりが、涙にぬれてる容子と言ひ、身のまわり万端のみすぼらしい事夥しい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛、後のは蘆毛の三歳駒で、道をゆく物売りや侍も、振向いて見る程の駿足である。その後から又二人、馬の歩みに遅れまいとして随いて行くのは、調度掛と舎人とに相違ない。——これが、利仁と五位との一行である事は、わざわざ、ここに断るまでもない話であろう。

冬とは言いながら、物静に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲たる（さらさら流れている）水の辺に立枯れている蓬の葉を、ゆする程の風もない。川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴の如く、滑かな日の光りをうけて、梢にいる鶺鴒の尾を動かすのさえ、鮮にそれと、影を街道に落している。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鷲絨のような肩を、丸々と出しているのは、大方、比叡の山であろう。二人はその中に鞍の螺鈿を、まばゆく日にきらめかせながら鞭をも加えず悠々と、栗田口を指して行くのである。

「どこでござるかな、手前をつれて行って、やろうと仰せられるのは」と、五位が馴れない手に手綱をかいくりながら、言った。「すぐ、そこじゃ。お案じになる程遠くはない」と言うので、「すると、栗田口辺でござるかな」と言うと、「まず、そう思われたがよろしかろう」と言うのであった。

利仁は今朝五位を誘うのに、東山の近くに湯の湧いている所があるから、そこへ行こうと言って出て来たのである。赤鼻の五位は、それを真にうけた。久しく湯にはいらないうで、体中がこの間からむづ痒い。芋粥の馳走になった上に、入湯が出来れば、願ってもない仕合せである。こう思つて、予め利仁が牽かせて来た、蘆毛の馬に跨った。ところが、轡を並べて此処まで来て見ると、どうも利仁はこの近所へ来るつもりではないらしい。現に、そうこうしている中に、栗田口は通りすぎた。「栗田口では、ござらぬのう」。「いかにも、もそつと、さきでござるよ」と言うのであった。

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないようにして、静に馬を歩ませている。両側の人家は、次第に稀になつて、今は、広々とした冬田の上に、餌をあさる鴉が見えるばかり、山の陰に消残つて、雪の色も仄かに青く煙つている。晴れながら、とげとげしい櫛の梢が、眼に痛く空を刺しているのさえ、何となく肌寒い。「では、山科辺でもござるかな」。「山科は、これじゃ。もそつと、さきでござるよ」と言うのである。

成程、そういう中に、山科も通りすぎた。それ所ではない。何かとする中に、関山も後にして、彼是、午少しすぎた時分には、とうとう三井寺の前へ来た。三井寺には、利仁の懇意にしている僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になった。それがすむと、又、馬に乗つて、途を急ぐ。行手は今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に当時は盗賊が四方に横行した、物騒な時代である。——五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顔を見上げるようにして訊ねた。「まだ、さきでござるのう」と、利仁は微笑した。悪戯

をして、それを見つけられそうになった子供が、年長者に向ってするような微笑である。鼻の先へよせた皺と、眼尻にたたえた筋肉のたるみとが、笑ってしまおうか、しまうまいかとためらっているらしい。そうして、とうとう、こう言った。

「実はな、敦賀まで、お連れ申そうと思うたのじゃ」と笑いながら、利仁は鞭を挙げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的驒として（鮮やかに輝いて）、午後の日を受けた近江の湖が光っていた。五位は、狼狽した。「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越前の——」と問うのであった。

利仁が、敦賀の人、藤原有仁の女婿になつてから、多くは敦賀に住んでいるという事も、日頃から聞いていない事はない。が、その敦賀まで自分をつれて行く気だろとは、今の今まで思わなかった。第一、幾多の山河を隔てている越前の国へ、この通り、僅二人の伴人をつれただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、往來の旅人が、盜賊の為に殺されたという噂さえ、諸方にある。——五位は歎願するように、利仁の顔を見た。

「それは又、滅相な、東山じゃと心得れば、山科。山科じゃと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、一体どうしたという事でござる。始めから、そう仰せらりようなら、下人共なりと、召つれようものを。——敦賀とは、滅相な」と言うのであった。

五位は、殆ど、それを搔かないばかりになつて、呷いた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇気を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ独り帰つて来た事であろう。「利仁が一人居るのは、千人ともお思いなされ。路次の心配は、御無用じや」。——五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰めながら、嘲笑つた。そうして調度掛を呼寄せて、持たせて来た壺胡録を背に負うと、やはり、その手から、黒漆の真弓をうけ取つて、それを鞍上に横えながら、先に立つて、馬を進めた。こうなる以上、意気地のない五位は、利仁の意志に盲従するより外に仕方がない。それで、彼は心細そうに、荒涼とした周囲の原野を眺めながら、うろ覚えの観音經を口の中に念じ念じ、例の赤鼻を鞍の前輪にすりつけるようにして、覚束ない馬の歩みを、不相変とぼとぼと進めて行った。

馬蹄の反響する野は、茫々たる黄茅に蔽われて、その所々にある行潦も、つめたく、青空を映したまま、この冬の午後を、何時かそれなり凍つてしまふかと疑われる。その涯には、一帯の山脈が、日に背いているせいとか、かがやく可き残雪の光もなく、紫がかつた暗い色を、長々となすっているが、それさえ蕭条たる幾叢の枯薄に遮られて、二人の従者の眼には、はいらない事が多い。——すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、声をかけた。「あれに、よい使者が参つた。敦賀への言づけを申そう」と言う。

五位は利仁の言う意味が、よくわからないので、怖々ながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるような所ではない。唯、野葡萄か何かの蔓が、灌木の一むらにからみついている中を、一疋の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝しながら、のそりのそり歩いて行く。——と思う中に、狐は、慌しく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐つた。従者も勿論、遅れてはいられない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、憂々として、曠野の静けさを破っていたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕えたのか、もう狐の後足を掴んで、倒に、鞍の側へ、ぶら下げている。狐が、走れなくなるまで、追いつめた所で、それを馬の下に敷い

て、手取りにしたものであろう。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸、その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ」と、利仁は、狐を高く眼の前へつるし上げながら、わざと物々しい声を出してこう言った。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ参って、こう申せ。『利仁は、唯今俄に客人を具して下ろうとする所じや。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎いに遣わし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて参れ』よいか忘れるなよ」と言い畢ると共に、利仁は、一ふり振って狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。「いや、走るわ。走るわ」。やっと、追いついた二人の従者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍って囃立てた。落葉のような色をしたその獣の背は、夕日の中を、まっしぐらに、木の根石くれの嫌いなく、何処までも、走って行く。それが一行の立っている所から、手にとるようによく見えた。狐を追っている中に、何時か彼等は、曠野が緩い斜面を作って、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出ていたからである。「広量（つかみどころのない使者）の御使でござるのう」と言うのであった。

五位は、ナイイヴな尊敬と讚嘆とを洩らしながら、この狐さえ願使する（思いのままに動かす）野育ちの武人の顔を、今更のように、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考える暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に包容される自分の意志も、それだけ自由が利くようになった事を、心強く感じるだけである。——阿諛（媚びること）は、恐らく、こういう時に、最も自然に生れて来るものであろう。読者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幫間（太鼓持ち）のような何物かを見出しても、それだけで妄にこの男の人格を、疑う可きではない。抛り出された狐は、なぞ、えの斜面を、転がるようにして、駈け下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、びよびよび、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すじかに駈け上った。駈け上りながら、ふりかえって見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立っている。それが皆、指を揃えた程に、小さく見えた。殊に入目を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりもくつきりと、浮き上っている。

狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のように走り出した。

四、狐は使者の勤めを果たし、二三十人の男たちが二人を出迎える

一行は、予定通り翌日の巳時ばかりに、高島の辺へ来た。此処は琵琶湖に臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇った空の下に、幾戸の藁屋が、疎にちらばっているばかり、岸に生えた松の樹の間には、灰色の漣滴をよせる湖の水面が、磨ぐのを忘れた鏡のように、さむざむと開けている。——此処まで来ると利仁が、五位を顧みて言った。「あれを御覧じろ。男どもが、迎いに参ったげでござる」と言うのであった。

見ると、成程、二疋の鞍置馬を牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨がったのもあり徒歩のもあり、皆水干の袖を寒風に翻えして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで来る。やがてこれが、間近くなったと思うと、馬に乗っていた連中は、慌ただしく鞍を下り、徒歩の連中は、路傍に蹲踞して、いづれも恭々しく、利仁の来るのを、待ちうけた。

「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう」。「生得、変化ある獣じゃて、

あの位の用を勤めるのは、何でもござらぬ」。五位と利仁とが、こんな話をしている中に、一行は、郎等たちの待つている所へ来た。「大儀じゃ」と、利仁が声をかける。躊躇していた連中が、忙しく立って、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽気になった。

「夜前、稀有な事が、ございましてな」と、二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色の水干を着た、白髪の郎等が、利仁の前へ来て、こう言った。「何じゃ」と、利仁は、郎等の持って来た篠枝や破籠を、五位にも勧めながら、鷹揚に問いかけた。「さればでございします。夜前、戌時ばかりに、奥方が俄に、人心地をお失いなされましてな。『おのれは、阪本の狐じゃ。今日、殿の仰せられた事を、言伝てしようほどに、近う寄って、よう聞きやれ』と、かう仰有るのでございします。さて、一同がお前に参りますと、奥方の仰せられますには、『殿は、唯今俄に客人を具して、下られようとす所じゃ。明日巳時頃、高島の辺まで、男どもを迎いに遣わし、それに鞍置馬二疋牽かせて参れ』と、こう御意遊ばすのでございします」と言う。

「それは、又、稀有な事でござるのう」と、五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、両方に満足を与えるような、相槌を打った。「それも唯、仰せられるのではございませぬ。さも、恐ろしそうに、わなわなとお震えになりましたな、『遅れまいぞ。遅れば、おのれが、殿の御勘当をうけねばならぬ』と、しつきりなしに、お泣きになるのでございします」と言う。「して、それから、如何いかがした」と問うと、「それから、多愛なく、お休みになりましたな。手前共の出で参ります時にも、まだ、お眼覚にはならぬようで、ございました」と言うのであった。

「如何でござるな」と、郎等の話を聞き完ると、利仁は五位を見て、得意らしく言った。「利仁には、獣も使われ申すわ」、「何とも驚き入る外は、ござらぬのう」と、五位は、赤鼻を搔きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざとらしく、呆れたように、口を開いて見せた。口髭には、今飲んだ酒が、滴になって、くつついている。

五、目の前に山ほどの大量の芋粥を見せられると……

その日の夜の事である。五位は、利仁の館の一間に、切燈台の灯を眺めるともなく、眺めながら、寝つかれない長の夜をまじまじして、明していた。すると、夕方、此処へ着くまでに、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のにおい、――そういうものが、一つずつ五位の心に浮んで来た。殊に、雀色時の霽の中をやつとこの館へ辿りついて、長櫃に起してある炭火の赤い焰を見た時の、ほつとした心もち、――それも、今こうして寝ていると、遠い昔にあった事としか思われぬ。五位は、綿の四五寸も入った黄色い直垂の下に、楽々と足をのぼしながら、ぼんやりとわれとわが寝姿を見廻した。……

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色の衣の綿厚なのを、二枚まで重ねて着こんでいる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やった、酒の酔が手伝っている。枕元の蓆一つ隔てた向うは、霜の冴えた広庭だが、それも、こう陶然としていれば、少しも苦にならない。万事が、京都の自分の曹司にいた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも係わらず、我五位の心には、何となく釣合のとれない不安があった。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明

けるといふ事が、——芋粥を食う時になるといふ事が、そう早く、来てはならないような心もちがする。そうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合う後には、境遇の急激な変化から来る、落着かない気分が、今日の天気のように、うすら寒く控えている。それが、皆、邪魔になつて、折角の暖かさも、容易に、眠りを誘いそうもない。

すると、外の広庭で、誰か大きな声を出しているのが、耳にはいった。声からでは、どうも、今日、途中まで迎えに出た、白髪の郎等が何か告げられているらしい。その乾からびた声が、霜に響くせいとか、凜々として、凜々として、一語ずつ五位の骨に、応えるような気さえる。「この辺の下人、承はれ。殿の御意遊ばさるるには、明朝、卯時までに、切口三寸（三寸）、長さ五尺（二五〇寸）の山の芋を、老若各、一筋ずつ、持って参る様にとある。忘れまいぞ、卯時までにじゃ」と言うのであった。

それが、二三度、繰返されたかと思うと、やがて、人のけはいが止んで、あたりは忽ち元のように、静な冬の夜になった。その静な中に、切燈台の油が鳴る。赤い真綿のような火が、ゆらゆらする。五位は欠伸を一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量に耽り出した。——山の芋というからには、勿論芋粥にする気で、持って来させるのに相違ない。そう思うと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れていた、さっきの不安が、何時の間にか、心に帰つて来る。殊に、前よりも、一層強くなったのは、あまり早く芋粥にありつきたくないという心もちで、それが意地悪く、思量の中心を離れない。どうもこう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待つていたのが、如何にも、無駄な骨折のように、見えてしまう。出来る事なら、突然何か故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると言うような、そんな手続きに、万事を運ばせたい。——こんな考えが、「こまつぶり」（独樂の古称）のように、ぐるぐる一つ所を廻っている中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐっすりとお熟睡してしまつた。

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、気になるので、五位は、何よりも先に部屋を覗いて見た。すると、知らない中に、寝すごして、もう卯時を過ぎていたのであろう。広庭へ敷いた、四五枚の長筵の上には、丸太のような物が、凡そ、二三本、斜につき出した、檜皮葺の軒先へつかえる程、山のように、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長さ五尺の途方もなく大きい、山の芋であつた。

五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章（あわてふためく）に近い驚愕に襲われて、呆然と、周囲を見廻した。広庭の所々には、新しく打つたらしい枕の上に五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖を着た若い下司女が、何十人となく、そのまわりに動いている。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶に、「あますらみせん」（甘葛を煎じた汁）を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまわる程忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯気とが、まだ消え残っている明方の靄と一つになって、広庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩めた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焰ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの、悉く、戦場か火事場へでも行つたような騒ぎである。五位は、今更のように、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考えた。そうして、自分が、その芋粥を食う為に京都から、わざわざ、越前の敦賀まで旅をして来た事を考えた。考えれば考える程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食慾は、実に、此時も

う、一半(半分)を減却してしまつたのである。

それから、一時間の後、五位は利仁や、舅の有仁と共に、朝飯の膳に向つた。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはいるのに、なみなみと海の如くたたえた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るように、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがって、一つ残らず、五斛納釜へすくっては入れ、すくっては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のおいと、甘葛のおいとを含んだ、幾道かの湯気の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に対した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であろう。

五位は、提を前にして、間の悪そうに、額の汗を拭いた。「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上つて下され」と、舅の有仁は、童児たちに言いつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつている。五位は眼をつぶつて、唯でさえ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくつて、いやいやながら飲み干した。

「父も、そう申すじゃや。平に、遠慮は御無用じゃ」と、利仁も側から新たな提をすすめて、意地悪く笑いながらこんな事を言う。弱つたのは五位である。遠慮のない所を言えば、始めから芋粥は、一椀も吸いたくない。それを今、我慢して、やつと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、そうかと言って、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をつぶつて、残りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸いようがない。

「何とも、忝うござつた。もう十分頂戴致したて。——いやはや、何とも忝うござつた」と、五位は、しどろもどろになつて、こう言つた。余程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思われない程、汗が玉になつて、垂れている。「これは又、御少食じゃ。客人は、遠慮をされると思へたぞ。それぞれの方ども、何を致して居る」と、童児たちは、有仁の語につれて、新たな提の中から、芋粥を、土器に汲まうとする。五位は、両手を蠅でも逐うように動かして、平に辞退の意を示した。「いや、もう、十分でござる。……失礼ながら、十分でござる」と言うのであつた。

もし、此時、利仁が、突然、向うの家の軒を指して、「あれを御覧じろ」と言わなかつたなら、有仁は猶、五位に、芋粥をすすめて、止まなかつたかも知れない。が、幸いにして、利仁の声は、一同の注意を、その軒の方へ持つて行つた。檜皮葺の軒には、丁度、朝日がさしている。そうして、そのまばゆい光に、光沢のいい毛皮を洗わせながら、一疋の獣が、おとなしく、坐っている。見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。

「狐も、芋粥が欲しさに、見参したそうな。男ども、しゃつにも、物を食わせてつかわせ」と、利仁の命令は、言下に行われた。軒からとび下りた狐は、直に広庭で芋粥の馳走に、与つたのである。

五位は、芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此処へ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。それは、多くの侍たちに愚弄されている彼である。京童にさえ「何

じゃ。この鼻赤めが」と、罵られてはいる彼である。色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない彪犬のように、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き、孤独な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいという欲望を、唯一人大事に守っていた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥を飲まずにすむという安心と共に、満面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくを感じた。晴れてはいても、敦賀の朝は、身にしみるように、風が寒い。五位は慌てて、鼻をおさえると同時に銀の提に向って大きな嚏をした。(完)

*

*

さて、今回の『芋粥』という作品と前の『鼻』という作品は、二人とも同じ様な境遇にいて同じ様な扱いを受けている人達であるが、ただ二人の「長年の願望」はそれぞれ違っていて、一方の『鼻』の主人公(内供)という人は、自分の「自尊心」を深く傷つけ苦しめているその張本人の「長くて大きな鼻」を何とか短くしたいという願望であり、それに対して、今回の『芋粥』の主人公(五位)という人は、「……五、六年前から芋粥という物に異常な執着を持っていて、当時はこれが無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさえ上せられた。従って、五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、入らない。その時でさえ、飲めるのは僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいという事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になっていた」ということである。

それでは、その本文の内容についてごく簡単に説明したいと思うが、まず、主人公(五位)という人は、「……風采の甚揚らない男であった。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下っている。口髭は勿論薄い。頬が、こけているから、頤が、人並はずれて、細く見える。唇は――一々、数え立てていけば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出来上っていたのである。……」

こういう風采を具えた男が、周囲から受ける待遇は、恐らく書くまでもないことであろう。侍所にいる連中は、五位に対して、殆ど蠅程の注意も払わない。有位無位、併せて二十人に近い下役さえ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めている。五位が何か言いつけても、決して彼等同志の雑談をやめた事はない。彼等にとつては、空気の存在が見えないように、五位の存在も、眼を遮らないのであろう。下役でさえそうだとすれば、別当(政所の長官)とか、侍所の司とかいう上役たちが頭から彼を相手にしないのは、寧ろ自然の数(成り行き)である。彼等は、五位に対すると、殆ど、子供らしい無意味な悪意を、冷然とした表情の後に隠して、何を言うのでも、手真似だけで用を足した。人間に言語があるのは、偶然ではない。従って、彼等も手真似では用を弁じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだ、思っているらしい。そこで彼等は用が足りない、この男の歪んだ採鳥帽子の先から、(下は)切れかかった藁草履の尻まで、万遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で哂いながら、急に後を向いてしまう。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意気地のない、臆病な人間だったのである。

少くも、わき眼には、無感覚であるらしく思われた。彼は何を言われても、顔の色さえ変えた事がない。黙って例の薄い口髭を撫ながら、するだけの事をしてすましていく。唯、同僚の悪戯が、嵩じすぎて、鬚に紙切れをくつつけたり、太刀の鞘に草履を結びつけたり

すると、彼は笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは」と言う。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時或いじらしさに打たれてしまう。(彼等にいじめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが――多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めている。)

さて、ここで大事な言葉は、「……いけぬのう、お身たちは」という言葉であり、この「言葉」に対して、作者(芥川龍之介)は、次のように解釈している。まず、「彼等にいじめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない」とある。これは「……この世の中の実に数多くの人達が「同じ様な理由」(或いは「何らかの理由」)で同じ様にひどい目やいじめなどに合っている。(その同じ様にひどい目やいじめなどに合っている)多数の誰か(多数の人達)は、彼の顔と声とを借りて、同じ様に「彼等」(いじめをする人達)の無情を責めている」のである。そして、まだ若い或る無位の侍には、「いけぬのう、お身たちは」と言う、五位の事を考える度に、世の中のすべてが急に本来の下等さ(質の悪さ)を露すように思われたとある。これは、人間の優れている面は勿論在るが、一方、人間の持ち合せている「本来の下等さ」(質の悪さ)が露骨に露になつて思われたという事である。

ところで、この話の主人公は、唯、軽蔑される為にのみ生れて来た人間で、別に何の希望も持っていないかと言うと、そうでもない。五位は五六年前から芋粥という物に、異常な執着を持っている。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を言うのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさえ、上せられた。従つて、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさえ、飲めるのは僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいという事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつていた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さえそれが、彼の一生を貫いている欲望だとは、明白に意識しなかつた事であろう。が事実は彼がその為に、生きていと言つても、差支えない程であつた。――人間は、時として、充されるか充されないか、わからない欲望の為に、一生を捧げてしまう。その愚を晒う者は、畢竟、人生に対する路傍の人に過ぎない。しかし、五位が夢想していた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事実となつて現れた。その始終を書こうと言うのが、この芋粥の話の(本来の)目的であるとする。

さて、或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事であり、その饗宴に五位も、外の侍たちにまじつて、その残肴の相伴をした。当時はまだ「取食み」(残り物を乞食に与える)の習慣はなくて、残肴(残り物)は、その家の侍が一堂に集まつて、食う事になつていたのである。尤も、大饗に等しいと言つても昔の事だから、品数の多い割りに碌な物はなく、例えば、餅、蒸鮑、近江の鮎、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛤、大海老、大柑子、小柑子、その他の類である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしている。が、何時も人数が多いので、自分が飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。そうして気のせいか、何時もより、余程味が好い。そこで、彼は飲んでしまった後の椀を上げ上げと眺めながら、うすい口髭についている滴を、掌で拭いて誰に言うともなく、「何時になつたら、これに飽ける事か」と、(思はず)こう言つてしまふのである。(この思はず言つてしまふことで、その人のその後の

人生に大きな影響を与えることも多く、例えば、ウェブ上で思わず言ってしまった事で、大炎上してしまう様な場合もよくある事ではないかと思う。）

すると、「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないそうな」。五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑った。錆のある、鷹揚な、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。声の主は、その頃、同じ基経の恪勤になっていた、民部卿時長の子藤原利仁である。肩幅の広い、身長の群を抜いた遅い大男で、これは、ゆで栗を噛みながら、黒酒の杯を重ねていた。もう大分酔がまわっているらしい。「お気の毒な事じゃの」と、利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫とを一つにしたような声で、語を継いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申そう」と言うのであった。

始終、いじめられている犬は、たまに肉を貰っても容易によりつかない。五位は、例の笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、利仁の顔と、空の椀とを等分に見比べていた。「おいやかな」、「……」、「どうじゃ」、「……」、五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まっているのを感じ出した。答え方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならぬ。或は、どう答えても、結局、莫迦にされそうな気さえする。彼は躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭そうな声で、「おいやなら、たつてとは申すまい」と言わなかったなら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べていた事であろう。彼は、それを聞くと、慌しく答えた。「いや……忝うござる」と……。

この問答を聞いていた者は、皆、一時に、失笑した。「いや……忝うござる」。——こう言って、五位の答を、真似る者さえある。所謂、橙黄橘紅（黄色い橙と赤い橘の果実）を盛った窪坏や高坏の上に多くの採鳥帽子や立鳥帽子が、笑声と共に一しきり、波のように動いた。中でも、最も、大きな声で、機嫌よく、笑ったのは、利仁自身である。「では、その中に、御誘い申そう」と、そう言いながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。こみ上げて来る笑と今飲んだ酒とが、喉で一つになったからである。「……しかと、よろしいな」。「忝うござる」と言うのであった。

それから、四五日たった日の午前、加茂川の河原に沿って、栗田口へ通う街道を、静に馬を進めてゆく二人の男があった。一人は利仁で、もう一人は主人公の五位であり、馬は二人とも、前のは月毛、後のは蘆毛の三歳駒で、どちらも駿足である。その後から又二人、馬の歩みに遅れまいとして随いて行くのは、調度掛と舎人とに相違ない。……

冬とは言いながら、物静に晴れた日で、白けた加茂川の河原の石の間、さらさら流れている水の辺に立枯れている蓬の葉を、ゆるる程の風もなく、川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴の如く、滑らかな日の光りをうけている。五位は、「どこでござるかな、手前をつれて行って、やろうと仰せられるのは」と、馴れない手に手綱を持ちながら、言った。利仁は、「すぐ、そこじゃ。お案じになる程遠くはない」と言うので、「すると、栗田口辺でござるかな」と訊くと、「まず、そう思われたがよろしかろう」と言うのであった。

ところが、栗田口は通り過ぎてしまい、「栗田口では、ござらぬのう」と言うのと、「いかにも、もそつと、さきでござるよ」と言うのであった。また、しばらくすると、「では、山科辺でもござるかな」。「山科は、これじゃ。もそつと、さきでござるよ」と言い、そうして、最後にはどうとう言うのであった。「実はな、敦賀まで、お連れ申そうと思うたのじゃ」と笑いながら、利仁は鞭を挙げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、鮮

やかに輝いて、午後の日を受けた近江の湖が光っていた。五位は、狼狽した。「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越前の——」と問うのであった。

利仁が、敦賀の人、藤原有仁の女婿になつてから、多くは敦賀に住んでいるという事も、日頃から聞いていない事はない。が、その敦賀まで自分をつれて行く気だろうとは、今の今まで思わなかつた。第一、幾多の山河を隔てている越前の国へ、この通り、僅二人の伴人をつれただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、往來の旅人が、盜賊の為に殺されたという噂さえ、諸方にある。——五位は歎願するように、利仁の顔を見た。「それは又、滅相な、東山じゃと心得れば、山科、山科じゃと心得れば、三井寺、揚句が越前の敦賀とは、一体どうしたという事でござる。始めから、そう仰せらりようなら、下人共なりと、召つれようものを。——敦賀とは、滅相な」と言うのであった。

もし、「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇氣を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ独り帰つて来た事であろう。利仁は、五位の狼狽するのを見ると、「利仁が一人居るのは、千人ともお思いなされ。路次の心配は、御無用じゃ」と、少し眉を擧めながら、嘲笑つた。そして、意気地のない五位は、利仁の意志に盲従するより外に仕方がない。それで、彼は心細そうに、荒涼とした周囲の原野を眺めながら、うろ覚えの観音經を口の中に念じ念じ、覺束ない馬の歩みを、不相変とぼとぼと進めて行つた。

すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、声をかけた。「あれに、よい使者が参つた。敦賀への言づけを申そう」と言うのであつた。五位は利仁の言う意味が、よくわからないので、怖々ながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるような所ではない。唯、野葡萄か何かの蔓が、灌木の一むらにからみついていて、一疋の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝しながら、のそりのそり歩いて行く。——と思う中に、狐は、慌しく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らして、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐つた。従者も勿論、遅れては行られない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、憂々として、曠野の静けさを破っていたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕えたのか、もう狐の後足を掴んで、倒に、鞍の側へ、ぶら下げている。狐が、走れなくなるまで、追いつめた所で、それを馬の下に敷いて、手取りにしたものである。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸、その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ」と、利仁は、狐を高く眼の前へつるし上げながら、わざと物々しい声を出してこう言つた。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ参つて、こう申せ。『利仁は、唯今俄に客人を具して下ろうとする所じゃ。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎いに遣わし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて参れ』よいか忘れるなよ」と言い畢ると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。「いや、走るわ。走るわ」。やっと、追いついた二人の従者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍つて囀立てた。落葉のような色をしたその獣の背は、夕日の中を、まっしぐらに、木の根石くれの嫌いなく、何処までも、走つて行く。それが一行の立っている所から、手にとるようによく見えた。狐を追っている中に、何時か彼等は、曠野が緩い斜面を作つて、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出ていたからである。「広量（つかみどころのない使者）の御使でござるのう」と言うのであつた。

五位は、ナイイヴな尊敬と讚嘆とを洩らしながら、この狐さえ願使する（思いのまま

に動かす)野育ちの武人の顔を、今更のように、仰いで見た。一方、抛り出された狐は、なぞえの斜面を、転げるようにして、駈け下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、びよびよい、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すじかに駈け上った。駈け上りながら、ふりかえって見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立っている。それが皆、指を揃えた程に、小さく見えた。狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のように走り出した。

さて、この『芋粥』という作品を読んで、多くの読者たちが不思議に思うことは、次の様な幾つかの「疑問点」ではないだろうか。一つは、利仁という人は、そもそもなぜ五位に『芋粥を飽くまで食べさせてやろう』と思ったのか。それは、本文の中では次のように説明されている。まず、五位は、毎年、この芋粥を楽しみにしていたが、何時も人数が多いので、自分が飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かった。そうして気のせいも、何時もより、余程味が好い。そこで、彼は飲んでしまった後の碗を上げしげと眺めながら、(思わず)「何時になったら、これに飽ける事かろう」と言うのであった。

すると、「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないそう」と、五位の語が完らない中に、誰かが嘲笑った。鏗のある、鷹揚な、武人らしい声である。声の主は、その頃、同じ基経に恪勤になっていた、藤原利仁という人である。肩幅の広い、身長を抜いた逞しい大男で、もう大分酔がまわっているらしく、「お気の毒な事じゃの」と、利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫とを一つにしたような声で、語を継いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申そう」と言うのであった。つまり、一つは「軽蔑」(低く見下げて)、そして、もう一つは「憐憫」(不憫や可哀そうに思つて) そう言うのであった。

次に、なぜ京都近くではなく、わざわざ越前の敦賀(自分の屋敷)まで連れて行つたのか。まず、ここで熟慮すべきは、次の様なことである。「……或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。(臨時の客は二宮の大饗と同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に変りがない)。五位も、外の侍たちにもまじつて、その残肴の相伴をした」とある。つまり、問題の利仁という人は、この正月二日の「饗宴」に招かれて、わざわざ越後の敦賀から京都へとやって来た武士なのか。それなら、四五日たった日の午前、主人公の五位を連れて、再び、越前の敦賀(自分の屋敷)へと戻り、そこで(自分の屋敷)で「芋粥を飽くまで食べさせてやろう」と考えたとしても、何も不思議なことはない。一方、もし主人公の五位と同じように京都に住んでいたのであれば、正月なので、自分の実家(越前の敦賀)へと主人公の五位を連れて里帰りをして、そこで(自分の屋敷)で「芋粥を飽くまで食べさせてやろう」と、そう考えたという事になるかと思う。というのも、何所かの「芋粥」の店で食べさせたとしても、(恐らくは)その分量には限度があるだろう。それゆえ、越前の敦賀(自分の屋敷)で「芋粥を飽くまで食べさせてやろう」と、そう考えたという事である。

さて、次は、今日では極めて不思議な感じがするが、利仁という人は、山で見つめた野生の「一匹の狐」を馬で追つて素早く捕えては、「これ、狐、よう聞けよ」と、利仁は、狐を高く眼の前へつるし上げながら、わざと物々しい声を出してこう言った。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ参つて、こう申せ。『利仁は、唯今俄に客人を具して下ろうとする所じゃ。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎いに遣わし、それに、鞍置馬

二疋、牽かせて参れ』よいか忘れるなよ」と言い畢ると共に、利仁は、一ふり振って狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。「いや、走るわ。走るわ。落葉のような色をしたその獸の背は、夕日の中を、まっしぐらに、木の根石くれの嫌いなく、何処までも、走って行く。それが一行の立っている所から、手にとるようによく見えた。狐を追っている中に、何時か彼等は、曠野が緩い斜面を作って、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出ていたからである。「広量（つかみどころのない使者）の御使でござるのう」と五位は、そう言うのであった。

これは、誰が考えても、「……広量（つかみどころのない使者）の御使でござるのう」であるが、やがて、此処（或る場所）まで来ると利仁が、五位を顧みて言った。「あれを御覧じろ。男どもが、迎いに参ったげでござる」と言うのであった。すると、五位は、「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう」と言うので、利仁という人は、「生得（生まれ付き）、変化ある獸じゃやて、あの位の用を勤めるのは、何でもござらぬ」と言うのであった。つまり、時は「平安朝」であり、その頃はまた、狐が人に取り憑いたり、人を騙したり、或いは狐が神や人間の使いをするという様なことは、それほど不思議でも何でもなく、一般にそのように考えられていたと考える方が遙かに正しい事になるのだろう。そして、最後の「最大の疑問」は、巨大な「山芋の山」とそれを「大きな鍋」で調理している様子を見て、五位という人は、あれほど「芋粥を飽くまで食べてみたい」という極めて強い欲求が、なぜ急激に「衰えてしまった」のか、この問題については、最後の所でまとめて解説したいと思えますので、物語の次への展開を見てみたいと思う。

さて、迎いに来た二三十人の男たちの中の、一人の白髪の郎等が、利仁の前へ来て、こう言った。「何じゃ」、「さればでござりまする。夜前、戌時ばかりに、奥方が俄に、人心地をお失いなされましたな。『おのれは、阪本の狐じゃ。今日、殿の仰せられた事を、言伝てしようほどに、近う寄って、よう聞きやれ』と、かう仰有るのでござりまする。そして、奥方の仰せられますには、『殿は、唯今俄に客人を具して、下られようとする所じゃ。明日巳時頃、高島の辺まで、男どもを迎いに遣わし、それに鞍置馬二疋牽かせて参れ』と、こう御意遊ばすのでござりまする」と言う。

「それは、又、稀有な事でござるのう」と、五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、両方に満足を与えるような、相槌を打った。「それも唯、仰せられるのではございませぬ。さも、恐ろしそうに、わなわなとお震えになりましたな、『遅れまいぞ。遅ればば、おのれが、殿の御勘当をうけねばならぬ』と、しつきりなしに、お泣きになるのでござりまする」と言う。「して、それから、如何いかがした」と問うと、「それから、多愛なく、お休みになりましたな。手前共の出で参ります時にも、また、お眼覚にはならぬようで、ございました」と言うのであった。これは、まさに「狐が奥方に乗り移って殿の伝言を伝えた」という事である。

「如何でござるな」と、利仁は五位の方を見て、得意らしく言った。「利仁には、獸も使われ申すわ」、「何とも驚き入る外は、ござらぬのう」と、五位は、赤鼻を掻きながら、ちよいと頭を下げて、それからわざとらしく呆れたように口を開いて見せた。——やがて、一行は、利仁の館（屋敷）へと到着したという事である。

*

*

その日の夜の事である。五位は、利仁の館の一間に、切燈台の灯を眺めるともなく、眺めながら、寝つかれない長の夜をまじまじして、明していた。すると、夕方、此処へ着くまでの事が色々と思い出されながら、ぼんやりとわれとわが寝姿を見廻した。……その我五位の心には、何となく釣合のとれない不安があった。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けるといふ事が、——芋粥を食う時になるといふ事が、そう早く、来てはならないような心もちがする。そうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合う後には、境遇の急激な変化から来る、落着かない気分が、皆、邪魔になつて、折角の（厚綿の）暖かさも、容易に、眠りを誘いそうもない。すると、外の広庭で、誰か大きな声を出しているのが、耳にはいった。声がらでは、どうも、今日、途中まで迎えに出た、白髪の郎等が何か告げられているらしい。その乾からびた声が、霜に響くせいとか、凜々として、凧のように、一語ずつ五位の骨に、応えるような気さえする。「この辺の下の人、承はれ。殿の御意遊ばさるるには、明朝、卯時までに、切口三寸（三寸）、長さ五尺（二五〇寸）の山の芋を、老若各、一筋ずつ、持つて参る様に。忘れまいぞ、卯時までにじゃ」と言うのであった。

それが、二三度、繰返されたかと思うと、やがて、人の気配が止んで、あたりは忽ち元のように静な冬の夜になった。そして、山の芋というからには、勿論芋粥にする気で、持つて来させるのに相違ない。そう思うと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れていた、さっきの不安が、何時の間にか、心に帰つて来る。殊に、前よりも、一層強くなったのは、あまり早く芋粥にありつきたくないという心もちで、それが意地悪く、思量の中心を離れない。「……どうもこう容易に『芋粥に飽かむ』事が、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待っていたのが、如何にも、無駄な骨折のように、見えてしまう。出来る事なら、突然何か故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると言うような、そんな手続きに、万事を運ばせたいと思うのであった。——これは、一体、どの様な心理状態になるのだろうか？ それは、次のようなことである。……

つまり、自分の長年の願望、『芋粥に飽かむ』といふ事が、こうも容易に（自分の何らの努力も要らず）唯々相手からの一方的な提供だけで易々と実現し、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく辛抱して待っていたのが、如何にも無駄な骨折のように見えてしまう。出来る事なら、突然何か故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると言うような、そんな手続きに、万事を運ばせたいと思うのも、これでは、心の底からの『喜び』が得られないからである。

例えば、山登りなどでも、「……足が草臥れたり、途中では旨いものが食べられない」といふ様なことが、われわれ人間の「心」をより強く「動かす」（つまり「感動」）させるためには、むしろ極めて「大事な要素」であり、そのような「肉体の疲労や空腹感」などによつてこそ、初めて山頂からの「自然の景色」や「様々な食事」などもより「美味しい素晴らしいもの」に感じられるといふ事である。——つまり、一般論として、それはどのような事であれ、すぐに手に入つてしまうもの、また、すぐにできてしまうもの、或いは、すぐに思いが叶つてしまうようなもの。そういうものでは、なかなか「歓喜」（真の「喜び」）とはなりにくいのである。真の「歓喜」（つまり真の「喜び」）となるためには、多くの場合、長い時間と忍耐とたゆまぬ努力と持続的エネルギーとが必要不可欠であり、

その結果、何かをついにやり遂げたと思えるような時にこそ、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)では「ついに、やった!」というような感じにもなるのであり、それこそは、まさに真の「歓喜」(つまり真の「喜び」)と呼べるものである。逆に言えば、何の「努力」も必要としないところでは、いわゆる真の「歓喜」(つまり真の「喜び」)というのは、永遠に生じようがないのである。

*

*

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、気になるので、五位は、何よりも先に部屋の前をあげて見た。すると、知らない中に、寝すごして、もう卯時を過ぎていたのである。広庭へ敷いた、四五枚の長筵の上には、丸太のような物が、凡そ、二千本、斜につき出した、檜皮葺の軒先へつかえる程、山のように、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長さ五尺の途方もなく大きい、山の芋であった。

五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章(あわてふためく)に近い驚愕に襲われて、呆然と、周囲を見廻した。広庭の所々には、新しく打つたらしい杭の上に五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖を着た若い下司女が、何十人となく、そのまわりに動いている。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶に、「あますらみせん」(甘葛を煎じた汁)を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまわる程忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯気とが、まだ消え残っている明方の靄と一つになって、広庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩めた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焔ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの、悉く、戦場か火事場へでも行ったような騒ぎである。五位は、今更のように、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考えた。そうして、自分が、その芋粥を食う為に京都から、わざわざ、越前の敦賀まで旅をして来た事を考えた。考えれば考える程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食欲は、実に、此時もう、一半(半分)を減却してしまつたのである。

それから、一時間の後、五位は利仁や舅の有仁と共に、朝飯の膳に向つた。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはいるのに、なみなみと海の如くたたえた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るように、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがって、一つ残らず、五斛納釜へすくっては入れ、すくっては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなった時に、芋のにおいと、甘葛のにおいとを含んだ、幾道かの湯気の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上って行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に対した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であろう。

五位は、提を前にして、間の悪そうに、額の汗を拭いた。「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上って下され」と、舅の有仁は、童児たちに言いつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつている。五位は眼をつぶって、唯でさえ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくって、いやいやながら飲み干した。

「父も、そう申すじゃ。平に、遠慮は御無用じゃ」と、利仁も側から新たな提をす

すめて、意地悪く笑いながらこんな事を言う。弱ったのは五位である。遠慮のない所を言え、始めから芋粥は、一椀も吸いたくない。それを今、我慢して、やっと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、そうかと言って、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をつぶって、残りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸いようがない。

「何とも、忝うござった。もう十分頂戴致したて。——いやはや、何とも忝うござった」と、五位は、しどろもどろになつて、こう言った。余程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思われない程、汗が玉になつて、垂れている。「これは又、御少食じゃ。客人は、遠慮をされると見えたぞ。それそれその方ども、何を致して居る」と、童児たちは、有仁の語につれて、新たな提の中から、芋粥を、土器に汲まうとする。五位は、両手を蠅でも逐うように動かして、平に辞退の意を示した。「いや、もう、十分でござる。……失礼ながら、十分でござる」と言うのであつた。

*

*

さて、いよいよこの『芋粥』という作品の「最大の疑問」に決着を付ける時が来たかと思うが、それは、あれほど長年「芋粥を飽くまで食べてみたい」という極めて強い欲求がありながら、どうして巨大な「山芋の山」とそれを「大きな鍋」で調理している様子を見ただけで、あれほど急激に「その食欲が衰えてしまった」のかという疑問であり、それは、次のようなことではないかと思う。

まず、主人公の五位という人にとって、『芋粥』というのは、ごく当たり前のふつうの食べ物などではなく、それはもう彼にとってはまさに人生の「生きがい」(いわば「唯一絶対のもの」ともなっている食べ物であり、しかも、それは、もうどのような「芋粥」であつてもよいという様なものではなく、それは、五位がいつも彼の「頭の中」(或いは「心の中」)で想い描いている様ないわば(理想的な)「芋粥」であつてほしいということである。それをもっと具体的な例を挙げて言えば、それは、まさに次のようなものである。

つまり、「……或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事であり、その饗宴に五位も、外の侍たちにまじつて、その残肴の相伴をした。当時はまだ「残肴」(残り物)は、その家の侍が一堂に集まつて、食う事になつていたのである。尤も、大饗に等しいと言つても昔の事だから、品数の多い割りに碌な物はなかつたが、唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしていたが、何時も人数が多いので、自分が飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。そうして気のせいか、何時もより、余程味が好い。そこで、彼は飲んでしまつた後の椀をしげしげと眺めながら、うすい口髭についている滴を、掌で拭いて誰に言うともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、(思わず)こう言つてしまふのである。つまり、毎年、このような饗宴で出される(極上の)「芋粥」こそは、主人公の五位という人があれほど長年「芋粥を飽くまで食べてみたい」という心の底から「希つていたもの」になるのである。

ところが、巨大な「山芋の山」とそれを「大きな鍋」で調理している様子という様なものは、五位がいつも彼の「頭の中」(或いは「心の中」)で想い描いていた様ないわば(理想的な)「芋粥」とはほど遠いものであり、それは「少量」(或いは適量)であればこそ、まさに「貴く貴重なもの」ともなり得るのであり、それ故、もっとも飽くまで食べてみたいという心の底からの強い欲求にも襲われるものであり、一方、その巨大な「山芋

の山」がその巨大な五斛納釜の中で巨大な量の「芋粥」となる事を考えた時に、我五位の同情すべき食慾は、実に、此時もう「一半」(半分)を減却してしまったのである。これは(もう誰であれ)、同じ様な「想い」に襲われるかと思うが、それは「少量(或いは適量)」であればこそ、まさに「貴く貴重なもの」ともなり得るのであり、逆に、余りにも大量の「芋粥」では(それは何であれ)、その「有り難み」(その「貴く貴重なもの」という様な意識はまさに減却してしまうのである)。

*

*

さて、本文に戻ると、『それから一時間の後、五位は利仁や舅の有仁と共に、朝飯の膳に向った。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはいるのに、なみなみと海の如くたたえた、恐るべき芋粥である。五位はさっき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るように、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがって、一つ残らず、五斛納釜へすくっては入れ、すくっては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のにおいと、甘藷のにおいとを含んだ、幾道かの湯気の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上って行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に對した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であろう」となるのである。

そして、五位は、提を前にして、間の悪そうに、額の汗を拭いた。「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上って下され」と、(この言葉に悪意はない)、舅の有仁は、童児たちに言いつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつている。五位は眼をつぶって、唯でさえ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくって、いやいやながら飲み干した。(この「いやいやながら飲み干した」とすれば、それは自ら喜んで飲んでいゝというよりは、むしろ無理やりに(強いられて)飲んでいゝ様な心理的状态に近い)。

「父も、そう申すじやて。平に、遠慮は御無用じや」と、利仁も側から新たな提をすすめて、意地悪く笑いながらこんな事を言う。(これは困っている五位を見て面白がつているのであり、所謂「悪意に充ちた言動」とは違ふのである。その証拠は「確かに言葉では勧めているが、無理やり口元まで持つて行って飲ませようとはしてはいない。そこまでの悪意は無いのである)。弱つたのは五位である。遠慮のない所を言えば、始めから芋粥は、一椀も吸いたくない。それを今、我慢して、やっと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、そうかと言って、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をつぶって、残りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸いようがない。(ここまで来て、初めて文字通り「嘔吐りなく」百%芋粥に飽いた」という「心理的状态」になつたという事である)。

「何とも、忝うござつた。もう十分頂戴致したて。——いやはや、何とも忝うござつた」と、五位は、しどろもどろになつて、こう言つた。余程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思われない程、汗が玉になつて、垂れている。「これは又、御少食じゃ。客人は、遠慮をされると見えたぞ。それぞれの方ども、何を致して居る」と、童児たちは、有仁の語につれて、新たな提の中から、芋粥を、土器に汲まうとする。五位は、両手を蠅でも逐うように動かして、平に辞退の意を示した。「いや、もう、十分で

ござる。……失礼ながら、十分でござる」と言うのであった。(これは、もうまさに「百%芋粥に飽いた」という「心理的状态」になっているという事であるが、しかし、これは、五位がいつも彼の「頭の中」(或いは「心の中」)で想い描いていたいわば(彼が望んだ)「芋粥」(に飽く)という事とは違っているのである。)

もし、此時、利仁が、突然、向うの家の軒を指して、「あれを御覧じろ」と言わなかったなら、有仁は猶、五位に、芋粥をすすめて、止まなかったかも知れない。が、幸いにして、利仁の声は、一同の注意を、その軒の方へ持って行つた。檜皮葺の軒には、丁度、朝日がさしている。そうして、そのまばゆい光に、光沢のいい毛皮を洗わせながら、一疋の獣が、おとなしく、坐っている。見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。——「狐も、芋粥が欲しさに、見参したそう。男ども、しゃつにも、物を食わせてつかわせ」と、利仁の命令は、言下に行われた。軒からとび下りた狐は、直に広庭で芋粥の馳走に、与つたのである。

ところで、なぜ利仁という人は、これほど大量の「芋粥」を敢えて使用人たちに作らせる必要があつたのか。もし五位一人の為のものであれば、これほど大量の「芋粥」を敢えて作らせる必要など何所にもなかったのである。だとすれば、当然のことながら、五位以外の何か他の「違う目的」があつて、このような大量の「芋粥」を作らせた事になるのだろう。それでは、それは一体何かと敢えて問えば、それは次のようなことである。

まず、この『芋粥』という作品は、「……或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。(臨時の客は二宮の大饗と同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に变りがない)。五位も、外の侍たちにまじつて、その残肴の相伴をした」。この時、利仁という人も同じく同席していたのである。そして、その饗宴の食事の時に、五位という人は、(思わず)「何時になつたら、これに飽ける事かかう」と言うのを聞いた、その頃、同じ基経の恪勤になつていた、民部卿時長の子藤原利仁という人は、「……お望みなら、利仁がお飽かせ申そう」と言うのであつた。

そして、四五日後、二人は馬に乗って旅立つことになるが、五位という人は、(恐らく)京都の近くで「芋粥」の食事をするのだからと思つていたが、一方、利仁という人は、(むしろ)正月なので越前の敦賀の自分の屋敷へと「里帰り」をして、その自分の「屋敷」で五位に「芋粥」を「飽くまで食べさせてやろう」と考えていたことになるのだろう。

そして、越前の敦賀の自分の「屋敷」へと無事に辿り着いたその夜、主人公の五位という人は、深夜眠れず床の中になると、外の広庭で、誰か大きな声を出しているのが耳に入り、それは、今日、途中まで迎えに出た、白髪の郎等が何か告げていて、「この辺の下人、承はれ。殿の御意遊ばさるるには、明朝、卯時までに、切口三寸(三セウ)、長さ五尺(一五〇セウ)の山の芋を、老若各、一筋ずつ、持って参る様に、忘れまいぞ、卯時までにじゃ」と言うのであつた。

翌朝、(五位は)眼がさめて広庭を見ると、四五枚の長筵の上には、切口三寸(三セウ)、長さ五尺(一五〇セウ)の山の芋が凡そ「二三千本」山のように積まれていた。また、広庭の所々には、新しく打つたらしい杭の上に五斛納釜を「五つ六つ」かけ連ねて、白い布の襖を着た若い下司女たちやその他の、何十人となくそのまわりに動いていた。そして、

その巨大な「山芋の山」をその五六個もある巨大な五斛納釜の中で巨大な量の「芋粥」をつくり出していたのである。それは、一体、何のためかと問えば、一つは、屋敷に招いた五位という人に「芋粥」を飽くまで食べさせてやるためと、もう一つは、当時、残肴（残り物）は、その家の侍が一堂に集まって、食う事になっていたので、その屋敷の侍たちをはじめ、そこで働いていた数多くの使用人たち、また、この辺の下人たちにも、（恐らく）正月なので、そのお祝いの御馳走として振る舞われたことになるのだろう。勿論、役目を果たした一匹の狐にも当然御馳走として振る舞われたのである。

さて、最後の本文は、「……五位は、芋粥を飲んでいる狐を眺めながら、此処へ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返った。それは、多くの侍たちに愚弄されている彼である。京童にさえ『何じゃ。この鼻赤めが』と、罵られている彼である。色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない杉犬のように、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き孤独な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいという欲望を、唯一人大事に守っていた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥を飲まずにすむという安心と共に、満面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくのを感じた。晴れてはいても、敦賀の朝は、身にしみるように、風が寒い。五位は慌てて、鼻をおさえると同時に銀の提に向って大きな嚏をした」とある。

これは一般に極めて「解り難い結末」になっているかと思うが、しかし、前の『鼻』という作品と全く同じ様な結論であり、それは、「……他人の言動にふりまわされて、あれこれ右往左往して（自分を見失っている）自分よりは、他人の言動に意味なくふりまわされず、自分を保っている自分の方がはるかに良い」という、それが作者（芥川龍之介）の結論になっているのである。

*

*

河童

河童

どうか Kappa と発音してください。

芥川龍之介

序

これはある精神病院の患者、——第二十三号がだれにでもしゃべる話である。彼はもう三十を越しているであろう。が、一見したところはいかにも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでもよい。彼はただじつと両膝をかかえ、時々窓の外へ目をやりながら、(鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さえ見えない檜の木が一本、雪曇りの空に枝を張っていた)。院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしゃべりつづけた。もつとも身ぶりはしなかつたわけではない。彼はたとえ「驚いた」と言う時には急に顔をのけぞらせたりした。……

僕はこういう彼の話をかなり正確に写したつもりである。もしまただれか僕の筆記に飽き足りない人があるとすれば、東京市外××村のS精神病院を尋ねてみるがよい。年よりも若い第二十三号はまず丁寧に頭を下げ、蒲団のない椅子を指さすであろう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、静かにこの話を繰り返すであろう。最後に、——僕はこの話を終わった時の彼の顔色を覚えていた。彼は最後に身を起すが早いか、たちまち拳骨をふりまわしながら、だれにでもこう怒鳴りつけるであろう。——「出て行け！ この悪党めが！ 貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、ずうずうしい、うぬぼれきった、残酷な、虫のいい動物なんだろう。出ていけ！ この悪党めが！」

一、山の谷川の傍でカッパを見つけ、それを追いかけていくと穴に落ちてしまう。

三年前の夏の事です。僕は人並みにリュック・サックを背負い、あの上高地の温泉宿から穂高山へ登ろうとしました。穂高山へ登るのには御承知のとおり梓川をさかのぼるほかはありません。僕は前に穂高山はもちろん、槍ヶ岳にも登っていましたが、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登ってゆきました。朝霧の下りた梓川の谷を——しかしその霧はいつまでたっても晴れる景色は見えません。のみならずかえって深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思いましたが、けれども上高地へ引き返すにしても、とにかく霧の晴れるのを待った上にしなければなりません。と行って霧は一刻ごとにずんずん深くなるばかりなのです。「ええ、いっそ登ってしまえ。」——僕はこう考えましたから、梓川の谷を離れないように熊笹の中を分けてゆきました。

しかし僕の目をさえぎるものはやはり深い霧ばかりです。もつとも時々霧の中から太い毛生樺や樅の枝が青と葉を垂らしたのも見えなかつたわけではありません。それからまた放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれらは見えたと思うと、たちまち濛々とした霧の中に隠れてしまうのです。そのうちに足もくたびれてくれば、腹もだんだん減りはじめる、——おまけに霧にぬれ透った登山服や毛布なども並たいていの重さで

はありません。僕はとうとう我を折りましたから、岩にせかれている水の音をたよりに梓川の谷へ下りることにしました。

僕は水ぎわの岩に腰かけ、とりあえず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの罐を切ったり、枯れ枝を集めて火をつけたり、――そんなことをしているうちにかれこれ十分はたったでしょう。その間にどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンをかじりながら、ちよつと腕時計をのぞいてみました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か気味の悪い顔が一つ、円い腕時計の硝子の上へちらりと影を落としたことです。僕は驚いてふり返りました。すると、――僕が河童というものを見たのは実にこの時がはじめてだったのです。僕の後ろにある岩の上には画にあるとおりの河童が一匹、片手は白樺の幹を抱え、片手は目の上にかざしたなり、珍しそうに僕を見おろしていました。

僕は呆つ気にとられたまま、しばらくは身動きもしませんでした。河童もやはり驚いたとみえ、目の上の手さえ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いかな、岩の上の河童へおどりがかりました。同時にまた河童も逃げ出しました。いや、おそらくは逃げ出したのでしよう。実はひらりと身をかわしたと思うと、たちまちどこかへ消えてしまったのです。僕はいよいよ驚きながら、熊笹の中を見まわしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メートル隔たった向こうに僕を振り返って見ているのです。それは不思議でもありません。しかし僕に意外だったのは河童の体の色のことです。岩の上に僕を見ていた河童は一面に灰色を帯びていました。けれども今は体中すっかり緑色に変わっているのです。僕は「畜生！」とおお声をあげ、もう一度河童へ飛びかかりました。河童が逃げ出したのはもちろんです。それから僕は三十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を飛び越え、遮二無二河童を追いつづけました。

河童もまた足の早いことは決して猿などに劣りません。僕は夢中になって追いかける間に何度もその姿を見失おうとしました。のみならず足をすべらして転がったこともたびたびです。が、大きい橡の木が一本、太ぶとと枝を張った下へ来ると、幸いにも放牧の牛が一匹、河童の往く先へ立ちふさがりました。しかもそれは角の太い、目を血走らせた牡牛なのです。河童はこの牡牛を見ると、何か悲鳴をあげながら、ひとときわ高い熊笹の中へもんどりを打つように飛び込みました。僕は、――僕も「しめた」と思いましたから、いきなりそのあとへ追いつがりました。するとそこには僕の知らない穴でもあいていたのでしよう。僕は滑らかな河童の背中にやっと思先がさわったと思うと、たちまち深い闇の中へまっさかさまに転げ落ちました。が、我々人間の心はこういう危機一髪の際にも途方もないことを考えるものです。僕は「あつ」と思う拍子にあの上高地の温泉宿のそばに「河童橋」という橋があるのを思い出しました。それから、――それから先のことは覚えていません。僕はただ目の前に稲妻に似たものを感じたぎり、いつの間まにか正気を失っていました。

二、主人公は「特別保護住民」としてチャックの隣に住むことになる

そのうちにやっとな気がついてみると、僕は仰向けに倒れたまま、大勢の河童にとり囲まれています。のみならず太い嘴の上に鼻目金をかけた河童が一匹、僕のそばへひざまずきながら、僕の胸へ聴診器を当てていました。その河童は僕が目をあいたのを見ると、

僕に「静かに」という手真似をし、それからだれか後ろにいる河童へ「Quax, quax」と声をかけました。するとどこからか河童が二匹、担架を持って歩いてきました。僕はこの担架にのせられたまま、大勢の河童の群がった中を静かに何町か進んでゆきました。僕の両側に並んでいる町は少しも銀座通りと違いありません。やはり毛生櫂の並み木のかげにいろいろの店が日除を並べ、そのまた並み木にはさまれた道を自動車は何台も走っているのです。

やがて僕を載せた担架は細い横町を曲つたと思うと、ある家の中へかつぎこまれました。それは後に知つたところによれば、あの鼻目金をかけた河童の家、――チャックという医者の家だったので。チャックは僕を小ぎれいなベッドの上へ寝かせました。それから何か透明な水菓を一杯飲ませました。僕はベッドの上に横たわつたなり、チャックのするままになっていました。実際また僕の体はろくに身動きもできないほど、節々が痛んでいたのですから。

チャックは一日に二三度は必ず僕を診察にきました。また三日に一度ぐらいは僕の最初に見かけた河童、――バッグという漁夫も尋ねてきました。河童は我々人間が河童のことを知っているよりもはるかに人間のことを知っています。それは我々人間が河童を捕獲することよりもずっと河童が人間を捕獲することが多いためでしょう。捕獲というのは当然いまでも、我々人間は僕の前にもたびたび河童の国へ来ています。のみならず一生河童の国に住んでいたものも多かったのです。なぜと言つてごらんなさい。僕らはただ河童ではない、人間であるという特権のために働かず食つていられるのです。現にバッグの話によれば、ある若い道路工夫などはやはり偶然この国へ来た後、雌の河童を妻にめとり、死ぬまで住んでいたということです。もっともそのまた雌の河童はこの国第一の美人だった上、夫の道路工夫をごまかすのにも妙をきわめていたということです。

僕は一週間ばかりたった後、この国の法律の定めるところにより、「特別保護住民」としてチャックの隣に住むことになりました。僕の家は小さい割にいかにも瀟洒（上品で垢抜けて）できあがっていました。もちろんこの国の文明は我々人間の国の文明――少なくとも日本の文明などとあまり大差はありません。往來に面した客間の隅には小さいピアノが一台あり、それからまた壁には額縁へ入れたエッティングなども懸っていました。ただ肝腎の家をはじめ、テーブルや椅子の寸法も河童の身長に合わせてありますから、子どもの部屋に入れられたようにそれだけは不便に思いました。

僕はいつも日暮れがたになると、この部屋にチャックやバッグを迎え、河童の言葉を習いました。いや、彼らばかりではありません。特別保護住民だった僕にだれも皆好奇心を持っていましたから、毎日血圧を調べてもらいに、わざわざチャックを呼び寄せるゲエルという硝子会社の社長などもやはりこの部屋へ顔を出したものです。しかし最初の半月ほどの間に一番僕と親しくしたのはやはりあのバッグという漁夫だったので。

ある生暖かい日の暮れです。僕はこの部屋のテーブルを中に漁夫のバッグと向かい合っていました。するとバッグはどう思ったか、急に黙ってしまった上、大きい目をいつそう大きくしてじっと僕を見つめました。僕はもちろん妙に思いましたから、「Quax, Bag, quo quel, quan?」と言いました。これは日本語に翻訳すれば、「おい、バッグ、どうしたんだ」ということです。が、バッグは返事をしません。のみならずいきなり立ち上がる、べろりと舌を出したなり、ちょうど蛙の跳ねるように飛びかかる気色さえ示しまし

た。僕はいよいよ無気味になり、そっと椅子から立ち上がると、一足飛びに戸口へ飛び出そうとしました。ちょうどそこへ顔を出したのは幸いにも医者いのチャックです。

「こら、バッグ、何をしているのだ？」と、チャックは鼻目金をかけたまま、こういうバッグをにらみつけました。するとバッグは恐れいったとみえ、何度も頭へ手をやりながら、こう言つてチャックにあやまるのです。「どうもまことに相済みません。実はこの旦那の気味悪がるのがおもしろかったものですから、つい調子に乗つて悪戯をしたのです。どうか旦那も堪忍してください」。

三、カッパについての基本的な特徴をあれこれと説明する

僕はこの先を話す前にちょっと河童というものを説明しておかなければなりません。河童はいまだに実在するかどうかも疑問になつてゐる動物です。が、それは僕自身が彼らの間に住んでいた以上、少しも疑う余地はないはずで、ではまたどういふ動物かと言へば、頭に短い毛のあるのもちろん、手足に水掻きのついでゐることも「水虎考略」などに出てゐるのと著しい違いはありません。身長もざつと一メートルを越えるか越えぬくらいでしょう。体重は医者いのチャックによれば、二十ポンドから三十ポンドまで、――まれには五十何ポンドぐらいの大河童もいふと言つていました。それから頭のまん中には楕円形の皿があり、そのまた皿は年齢により、だんだん固さを加えるようです。現に年をとつたバッグの皿は若いチャックの皿などとは全然手ざわりも違うのです。しかし一番不思議なのは河童の皮膚の色のことでしょう。河童は我々人間のように一定の皮膚の色を持っていません。なんでもその周囲の色と同じ色に変わつてしまふ、――たとえば草の中なかにゐる時には草のように緑色に変わり、岩の上うへにゐる時には岩のように灰色に変わるのです。これももちろん河童に限らず、カメレオンにもあることです。あるいは河童は皮膚組織の上に何かカメレオンに近いところを持つてゐるのかもしれない。僕はこの事実を発見した時、西国の河童は緑色であり、東北の河童は赤いといふ民俗学上の記録を思い出しました。のみならずバッグを追いかける時、突然どこへ行つたのか、見えなくなつたことを思い出しました。しかも河童は皮膚の下したにほど厚い脂肪を持つてゐるとみえ、この地下の国の温度は比較的低いのもかかわらず、（平均華氏五十度前後です）。着物といふものを知らずにゐるのです。もちろんどの河童も目金をかけたり、巻煙草の箱を携えたり、金入れを持つたりはしてゐるでしょう。しかし河童はカンガルーのように腹に袋を持つてゐますから、それらのものをしまう時にも格別不便はしないのです。ただ僕におかしかったのは腰のまわりさえおおわないことです。僕はある時この習慣をなぜかとバッグに尋ねてみました。するとバッグはのけぞつたまま、いつまでもげらげら笑つていました。おまけに「わたしはお前さんの隠してゐるのがおかしい」と返事をしました。

四、河童の出産の時、お前はこゝの世に生まれたいかどうかを訊く

僕はだんだん河童の使う日常の言葉を覚えてきました。従つて河童の風俗や習慣ものみこめるようになってきました。その中でも一番不思議だったのは河童は我々人間の真面目に思うことをおかしがる、同時に我々人間のおかしがることを真面目に思う――こういう

とんちんかんな習慣です。たとえば我々人間は正義とか人道とかいうことを真面目に思う、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかえて笑い出すのです。つまり彼らの滑稽という観念は我々の滑稽という観念と全然標準を異にしているのです。僕はある時医者やチャックと産児制限の話をしていました。するとチャックは大口をあいて、鼻目金の落ちるほど笑い出しました。僕はもちろん腹が立ちましたから、何がおかしいかと詰問しました。なんでもチャックの返答はだいたいこうだったように覚えています。もつとも多少細かいところは間違っているかもしれませんが。なにしろまだそのころは僕も河童の使う言葉をつかり理解していなかったのですから。「しかし両親のつごうばかり考えているのはおかしいですからね。どうもあまり手前勝手ですからね」と言うのであった。

その代わりに我々人間から見れば、実際また河童のお産ぐらい、おかしいものはありません。現に僕はしばらくたってから、バッグの細君のお産をするところをバッグの小屋へ見物にゆきました。河童もお産をする時には我々人間と同じことです。やはり医者や産婆などの助けを借りてお産をするのです。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけ、「お前は这个世界へ生まれてくるかどうか、よく考えた上で返事をしろ」と大きな声で尋ねるのです。バッグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してこう言いました。それからテーブルの上にあった消毒用の水薬でうがいをしました。すると細君の腹の中の子は多少気兼ねでもしているとみえ、こう小声に返事をしました。「僕は生まれたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでもたいへんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じていますから」と言う。

バッグはこの返事を聞いた時、てれたように頭をかいていました。が、そこにい合わせた産婆はたちまち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液体を注射しました。すると細君はほっとしたように太い息をもらしました。同時にまた今まで大きかった腹は水素瓦斯を抜いた風船のようにへたへたと縮んでしまいました。

こういう返事をするくらいですから、河童の子どもは生まれるが早いか、もちろん歩いたりしゃべったりするのです。なんでもチャックの話では出産後二十六日目に神の有無について講演をした子どももあつたとかいうことです。もつともその子どもは二月日には死んでしまったということですが。

お産の話をしたついでですから、僕がこの国へ来た三月目に偶然ある街の角で見かけた、大きいポスターの話をししましょう。その大きいポスターの下には喇叭を吹いている河童だの剣を持つている河童だのが十二三匹描いてありました。それからまた上には河童の使う、ちょうど時計のゼンマイに似た螺旋文字が一面に並べてありました。この螺旋文字を翻訳すると、だいたいこういう意味になるのです。これもあるいは細かいところは間違っているかもしれませんが、とにかく僕としては僕といっしょに歩いていて、ラップという河童の学生が大声に読み上げてくれる言葉をいちいちノートにとっておいたのです。

遺伝的義勇隊を募る※

健全なる男女の河童よ※

悪遺伝を撲滅するために

不健全なる男女の河童と結婚せよ※

僕はもちろんその時にもそんなことを行なわれないことをラップに話して聞かせました。するとラップばかりではない、ポスターの近所にいた河童はことごとくげらげら笑い

出しました。

「行なわれない？ だってあなたの話ではあなたがたもやはり我々のように行なっているとありますがね。あなたは令息が女中に惚れたり、令嬢が運転手に惚れたりするのはなんのためだと思ってるのです？ あれは皆無意識的に悪遣伝を撲滅しているのですよ。第一この間あなたの話したあなたがた人間の義勇隊よりも、——一本の鉄道を奪うために互いに殺し合う義勇隊ですね、——ああいう義勇隊に比べれば、ずっと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思えますがね」。

ラップは真面目にこう言いながら、しかも太い腹だけはおかしそうに絶えず浪立たせていました。が、僕は笑うどころか、あわててある河童をつかまえようとしました。それは僕の油断を見すまし、その河童が僕の万年筆を盗んだことに気がついたからです。しかし皮膚の滑らかな河童は容易に我々にはつかまりません。その河童もぬらりとすべり抜けるが早いかいっさんに逃げ出してしまいました。ちょうど蚊のようにやせた体を倒れるかと思うくらいのめらせながら。

五、トックという河童仲間の詩人と親しくなっていく

僕はこのラップという河童にバッグにも劣らぬ世話になりました。が、その中でも忘れられないのはトックという河童に紹介されたことです。トックは河童仲間の詩人です。詩人が髪を長くしていることは我々人間と変わりません。僕は時々トックの家へ退屈しのぎに遊びにゆきました。トックはいつも狭い部屋に高山植物の鉢植を並べ、詩を書いたり煙草をのんだり、いかにも気楽そうに暮らしていました。そのまた部屋の隅には雌の河童が一匹、(トックは自由恋愛家ですから、細君というものは持たないのです)。編み物か何かしていました。トックは僕の顔を見ると、いつも微笑してこう言うのです。(もつとも河童の微笑するのはあまりいいものではありません。少なくとも僕は最初のうちはむしろ無気味に感じたものです)。「やあ、よく来たね。まあ、その椅子にかけたまえ」。

トックはよく河童の生活だの河童の芸術だの話をしました。トックの信ずるところによれば、当たり前前の河童の生活ぐらい、莫迦げているものはありません。親子夫婦兄弟などというのはことごとく互いに苦しめ合うことを唯一の楽しみにして暮らしているのです。ことに家族制度というものは莫迦げている以上に莫迦げているのです。トックはある時窓の外を指さし、「見たまえ。あの莫迦加減を！」と吐き出すように言いました。窓の外の往来にはまだ年の若い河童が一匹、両親らしい河童をはじめ、七八匹の雌雄の河童を頸のまわりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いていました。しかし僕は年の若い河童の犠牲的精神に感心しましたから、かえってその健気さをほめ立てました。

「ふん、君はこの国でも市民になる資格を持っている。……時に君は社会主義者かね？」僕はもちろん *quá* (これは河童の使う言葉では「然り」という意味を現わすのです。)と答えました。「では百人の凡人のために甘んじてひとりの天才を犠牲にすることも顧みないはずだ」。「では君は何主義者だ？ だれかトック君の信条は無政府主義だと言っていたが、……」、「僕か？ 僕は超人(直訳すれば超河童です)だ」。

トックは昂然と言い放ちました。こういうトックは芸術の上にも独特な考えを持っている。トックの信ずるところによれば、芸術は何ものの支配をも受けたい、芸術のための

芸術である、従って芸術家たるものは何よりも先に善悪を絶した超人でなければならぬというのです。もっともこれは必ずしもトック一匹の意見ではありません。トックの仲間の詩人たちはたいがい同意見を持っているようです。現に僕はトックといっしょにたびたび超人倶楽部へ遊びにゆきました。超人倶楽部に集まってくるのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、画家、音楽家、彫刻家、芸術上の素人等です。しかしいづれも超人です。彼らは電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合っていました。のみならず時には得々と彼らの超人ぶりを示し合っていました。たとえばある彫刻家などは大きい鬼羊歯の鉢植の間に年の若い河童をつかまえながら、しきりに男色をもてあそんでいました。またある雌の小説家などはテーブルの上に立ち上がったなり、アブサントを六十本飲んで見せました。もっともこれは六十本目にテーブルの下へ転げ落ちるが早いかな、たちまち往生してしまいました。

僕はある月のいい晩、詩人のトックと肘を組んだまま、超人倶楽部から帰ってきました。トックはいつになく沈みこんでひとことも口をきかずにいました。そのうちに僕は火かげのさした、小さい窓の前を通りかかりました。そのまた窓の向こうには夫婦らしい雌雄の河童が二匹、三匹の子どもの河童といっしょに晩餐のテーブルに向かっているのです。するとトックはため息をしながら、突然こう僕に話しかけました。「僕は超人的恋愛家だと思っっているがね、ああいう家庭の容子を見ると、やはりうらやましさを感じるんだよ」。「しかしそれはどう考えても、矛盾しているとは思わないかね？」

けれどもトックは月明りの下にじつと腕を組んだまま、あの小さい窓の向こうを、——平和な五匹の河童たちの晩餐のテーブルを見守っていました。それからしばらくしてこう答えました。「あすこにある玉子焼きはなんとと言っても、恋愛などよりも衛生的だからね」というのであった。

六、河童の恋愛は我々人間の恋愛とはよほど趣を異にしている

実際また河童の恋愛は我々人間の恋愛とはよほど趣を異にしています。雌の河童はこれぞという雄の河童を見つけたが早いかな、雄の河童をとらえるのにいかなる手段も顧みません、一番正直な雌の河童は遮二無二に雄の河童を追いかけけるのです。現に僕は気遣いのように雄の河童を追いかけている雌の河童を見かけました。いや、そればかりではありません。若い雌の河童はもちろん、その河童の両親や兄弟までいっしょになって追いかけるのです。雄の河童こそみじめです。なにしろさんざん逃げまわったあげく、運よくつかまらずにすんだとしても、二三个月は床についてしまうのですから。僕はある時僕の家にはトックの詩集を読んできました。するとそこへ駆けこんできたのはあのラップという学生です。ラップは僕の家へ転げこむと、床の上へ倒れたなり、息も切れ切れにこう言うのです。「大変だ！　とうとう僕は抱きつかれてしまった！」と。

僕はとっさに詩集を投げ出し、戸口の錠をおろしてしまいました。しかし錠穴からのぞいてみると、硫黄の粉末を顔に塗った、背の低い雌の河童が一匹、また戸口にうろついているのです。ラップはその日から何週間か僕の床の上に寝ていました。のみならずいつかラップの嘴はすっかり腐って落ちてしまいました。

もっともまた時には雌の河童を一生懸命に追いかける雄の河童もないではありません。

しかしそれもほんとうのところは追いかけてはいられないように雌の河童が仕向けるのです。僕はやはり気違いのように雌の河童を追いかけている雄の河童も見かけました。雌の河童は逃げてゆくうちにも、時々わざと立ち止まってみたり、四つん這いになつたりして見せるのです。おまけにちよいどいい時分になると、さもがっかりしたように樂々とつませてしまうのです。僕の見かけた雄の河童は雌の河童を抱いたなり、しばらくそこに転がっていました。が、やっと起き上がったのを見ると、失望というか、後悔というか、とにかくなんとも形容できない、気の毒な顔をしていました。しかしそれはまだいいのです。これも僕の見かけた中に小さい雄の河童が一匹、雌の河童を追いかけていました。雌の河童は例のとおり、誘惑的遁走をしているのです。するとそこへ向かうの街から大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いてきました。雌の河童はなにかの拍子にふとこの雄の河童を見ると「大変です！ 助けてください！ あの河童はわたしを殺そうとするのです！」と金切声を出して叫びました。もちろん大きい雄の河童はたちまち小さい河童をつかまえ、往來のまん中へねじ伏せました。小さい河童は水掻きのある手に二三度空をつかんだなり、とうとう死んでしまいました。けれどももうその時には雌の河童はにやにやしながら、大きい河童の頸つ玉へしつかりしがみついてしまっていたのです。

僕の知っていた雄の河童はだれも皆言い合わせたように雌の河童に追いかけられました。もちろん妻子を持っているバッグでもやはり追いかけられたのです。のみならず二三度はつかまつたのです。ただマッグという哲学者だけは（これはあのトックという詩人の隣にいる河童です）。一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマッグぐらい、醜い河童も少ないためでしょう。しかしまた一つにはマッグだけはあまり往來へ顔を出さずに家にばかりいるためです。僕はこのマッグの家へも時々話しに出かけました。マッグはいつも薄暗い部屋に七色の色硝子のランタアンをともし、脚の高い机に向かいながら、厚い本ばかり読んでいます。

僕はある時こういうマッグと河童の恋愛を論じ合いました。「なぜ政府は雌の河童が雄の河童を追いかけるのをもっと嚴重に取り締まらないのです？」「それは一つには官吏の中に雌の河童の少ないためです。雌の河童は雄の河童よりもいっそう嫉妬心は強いものですからね、雌の河童の官吏さえ殖えれば、きっと今よりも雄の河童は追いかけられずに暮らせるでしょう。しかしその効力もしれたものです。なぜと言ってごらんさい。官吏同志でも雌の河童は雄の河童を追いかけますからね」「じゃあなたのように暮らしているのは一番幸福なわけですね」と言うのであった。

するとマッグは椅子を離れ、僕の両手を握ったまま、ため息といっしょにこう言いました。「あなたは我々河童ではありませんから、おわかりにならないのももつとです。しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追いかけられたい気も起るのですよ」と言うのであった。

七、主人公は詩人のトックとたびたび音楽会へも出かけたのでした

僕はまた詩人のトックとたびたび音楽会へも出かけました。が、いまだに忘れられないのは三度目に聴きにいった音楽会のことです。もつとも会場の容子などはあまり日本と変わっていません。やはりだんだんせり上がった席に雌雄の河童が三四百匹、いづれもプロ

グラムを手にしなから、一心に耳を澄ませているのです。僕はこの三度目の音楽会の時にはトックやトックの雌の河童のほかに哲学者のマッグといっしょになり、一番前の席にすわっていました。するとセロの独奏が終わった後、妙に目の細い河童が一匹、無造作に譜本を抱えたまま、壇の上へ上がってきました。この河童はプログラムの教えるとおりの、名高いクラバックという作曲家です。プログラムの教えるとおりの、クラバックはプログラムの教えるとおりの、超倶楽部の会員ですから、僕もまた顔だけは知っているのです。「Lied—Craback」（この国のプログラムもたいていは独逸語を並べていました。）

クラバックは盛んな拍手のうちにちよつと我々へ一礼した後、静かにピアノの前へ歩み寄りました。それからやはり無造作に自作のリイドを弾きはじめました。クラバックはトックの言葉によれば、この国の生んだ音楽家中、前後に比類のない天才だそうです。僕はクラバックの音楽はもちろん、そのまた余技の抒情詩にも興味を持っていましたから、大きい弓なりのピアノの音に熱心に耳を傾けていました。トックやマッグも恍惚としていたことはあるいは僕よりもまさっていたでしょう。が、あの美しい（少なくとも河童たちの話によれば）雌の河童だけはしっかりプログラムを握ったなり、時々さもいらだたしうに長い舌をべろべろ出していました。これはマッグの話によれば、なんでもかれこれ十年前にクラバックをつかまえそなたたものですから、いまだにこの音楽家を目の敵にしているのだとかいうことです。

クラバックは全身に情熱をこめ、戦うようにピアノを弾きつけました。すると突然会場の中に神鳴りのように響き渡ったのは「演奏禁止」という声です。僕はこの声にびつくりし、思わず後ろをふり返りました。声の主は紛れもない、一番後ろの席にいる身の丈抜群の巡査です、巡査は僕がふり向いた時、悠然と腰をおろしたまま、もう一度前よりもお声に「演奏禁止」と怒鳴りました。それから、――

それから先は大混乱です。「警官横暴！」「クラバック、弾け！ 弾け！」「莫迦！」「畜生！」「ひっこめ！」「負けるな！」「――こういう声のわき上がった中に椅子は倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけにだれが投げけるのか、サイダーの空罎や石ころやかじりかけの胡瓜さえ降ってくるのです。僕は呆気にとられましたから、トックにその理由を尋ねようとしました。が、トックも興奮したとみえ、椅子の上に乗っ立ちながら、「クラバック、弾け！ 弾け！」とわめきつけています。のみならずトックの雌の河童もいつの間にも敵意を忘れたのか、「警官横暴」と叫んでいることは少しもトックに変わりません。僕はやむを得ずマッグに向かい、「どうしたのです？」と尋ねてみました。「これですか？ これはこの国ではよくあることですよ。元来画だの文芸だのは……」と言う。

マッグは何か飛んでくるたびにちよつと頸を縮めながら、相変わらず静かに説明しました。「元来画だの文芸だのはだれの目にも何を表わしているかほとにかくちやんとわかるはずですから、この国では決して発売禁止や展覧禁止は行なわれません。その代わりにあるのが演奏禁止です。なにしろ音楽というものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね」。「しかしあの巡査は耳があるのですか？」「さあ、それは疑問ですね。たぶん今の旋律を聞いているうちに細君といっしょに寝ている時の心臓の鼓動でも思い出したのでしょう」と言うのであった。

こういう間にも大騒ぎはいよいよ盛んになるばかりです。クラバックはピアノに向かっ

たまま、傲然と我々をふり返っていました。が、いくら傲然としていても、いろいろのものの飛んでくるのはよけないわけにゆきません。従ってつまり二三秒置きにせっかくの態度も変わったわけです。しかしとにかくだいたいとしては大音楽家の威厳を保ちながら、細い目をすさまじくかがやかせていました。僕は――僕ももちろん危険を避けるためにトックを小楯にとっていたものです。が、やはり好奇心に駆られ、熱心にマッグと話しつづけました。「そんな検閲は乱暴じゃありませんか?」「なに、どの国の検閲よりかえって進歩しているくらいですよ。たとえば××をごらんなさい。現について一月ばかり前にも、……」と言うのであった。

ちようどう言いかけたとたんです。マッグはあいにく脳天に空罫が落ちたものですか、quack (これはただ間投詞です) と一声叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

八、解雇した職工たちはみな殺して肉にして食べてしまうという風習

僕は硝子会社の社長のゲエルに不思議にも好意を持っていました。ゲエルは資本家中の資本家です。おそらくはこの国の河童の中でも、ゲエルほど大きい腹をした河童は一匹もいなかったのに違いありません。しかし荔枝に似た細君や胡瓜に似た子どもを左右しながら、安楽椅子にすわっているところはほとんど幸福そのものです。僕は時々裁判官のベツプや医者やチャックにつれられてゲエル家の晚餐へ出かけました。またゲエルの紹介状を持ってゲエルやゲエルの友人たちが多少の関係を持っているいろいろの工場も見えて歩きました。そのいろいろの工場の中でもことに僕にもしろかかったのは書籍製造会社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはいり、水力電気を動力にした、大きい機械をながめた時、今さらのように河童の国の機械工業の進歩に驚嘆しました。なんでもそこでは一年間に七百万部の本を製造するそうです。が、僕を驚かしたのは本の部数ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手数のかからないことです。なにしろこの国では本を造るのにただ機械の漏斗形の口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのです。それらの原料は機械の中へはいると、ほとんど五分とたたないうちに菊版、四六版、菊半裁版などの無数の本になって出てくるのです。僕は瀑のように流れ落ちるいろいろの本をながめながら、反り身になった河童の技師にその灰色の粉末はなんと言うものかと尋ねてみました。すると技師は黒光りに光った機械の前にたたずんだまま、つまらなそうにこう返事をしました。「これですか? これは驢馬の脳髄ですよ。ええ、一度乾燥させてから、ざっと粉末にしただけのものです。時価は一噸二三錢ですがね」。

もちろんこういう工業上の奇蹟は書籍製造会社にばかり起こっているわけではありません。絵画製造会社にも、音楽製造会社にも、同じように起こっているのです。実際またゲエルの話によれば、この国では平均一か月に七八百種の機械が新案され、なんでもずんずん人手を待たずに大量生産が行なわれるそうです。従ってまた職工の解雇されるのも四五万匹を下らないそうです。そのくせまだこの国では毎朝新聞を読んでも、一度も罷業という字に出会いません。僕はこれを妙に思いましたから、ある時またベツプやチャックとゲエル家の晚餐に招かれた機会にこのことをなぜかと尋ねてみました。「それはみんな食ってしまうのですよ」と言うのであった。

食後の葉巻をくわえたゲエルはいかにも無造作にこう言いました。しかし「食ってしまふ」というのはなんのことだかわかりません。すると鼻目金をかけたチャックは僕の不審を察したとみえ、横あいから説明を加えてくれました。「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使うのです。ここにある新聞をごらん下さい。今月はちょうど六万四千七百六十九匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下がったわけですよ」、「職工は黙って殺されるのですか?」、「それは騒いでもしかたはありません。職工屠殺があるのですから」と言うのである。

これは山桃の鉢植えを後ろに苦い顔をしていたペップの言葉です。僕はもちろん不快を感じました。しかし主人公のゲエルはもちろん、ペップやチャックもそんなことは当然と思っているらしいのです。現にチャックは笑いながら、あざけるように僕に話しかけました。「つまり餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略してやるのですね。ちよつと有毒瓦斯をかがせるだけですから、たいした苦痛はありませんよ」、「けれどもその肉を食うというのは、……」、「常談を言つてはいけません。あのマググに聞かせたら、さぞ大笑いに笑うでしょう。あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になつてゐるではありませんか? 職工の肉を食ふことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ」。

こういう問答を聞いていたゲエルは手近いテーブルの上にあつたサンドウィッチの皿を勧めながら、恬然と（恥ずべき事などを何とも思わないで、平気で）僕にこう言いました。「どうですか? 一つとりませんか? これも職工の肉ですがね」と。

僕はもちろん辟易しました。いや、そればかりではありません。ペップやチャックの笑い声を後ろにゲエル家の客間を飛び出しました。それはちょうど家々の空に星明かりも見えない荒れ模様の夜です。僕はその闇の中を僕の住居へ帰りながら、のべつ幕なしに嘔吐を吐きました。夜目にも白じらと流れる嘔吐を。

九、硝子会社の社長のゲエルと河童の国の政治やその他などを話す

しかし硝子会社の社長のゲエルは人なつこい河童だつたのに違ひません。僕はたびたびゲエルといつしよにゲエルの属している倶楽部へ行き、愉快に一晚を暮らしました。これは一つにはその倶楽部はトックの属している超人倶楽部よりはるかに居心のよかつたためです。のみならずまたゲエルの話は哲学者のマググの話のように深みを持つていなかつたにせよ、僕には全然新しい世界を、——広い世界をのぞかせました。ゲエルは、いつも純金の匙に珈琲の茶碗をかきまわしながら、快活にいろいろの話をしたものです。

なんでもある霧の深い晩、僕は冬薔薇を盛つた花瓶を中にゲエルの話を聞いていました。それはたしか部屋全体はもちろん、椅子やテーブルも白い上に細い金の縁をとつたセツシヨン風の部屋だつたように覚えてゐます。ゲエルはふだんよりも得意そうに顔中に微笑をみなぎらせたまま、ちよつどそのころ天下を取つていた Quorax 党内閣のことなどを話しました。クオラックスという言葉はただ意味のない間投詞ですから、「おや」とでも訳すほかはありません。が、とにかく何よりも先に「河童全体の利益」ということを標榜してゐた政党だつたのです。

「クオラックス党を支配してゐるものは名高い政治家のロッペです。『正直は最良の外交である』とはビスマルクの言つた言葉でしょう。しかしロッペは正直を内治の上にも及

ぼしているのです。……」、「けれどもロッペの演説は……」、「まあ、わたしの言うことをお聞きなさい。あの演説はもちろんことごとく嘘です。が、嘘ということはだれでも知っていますから、畢竟正直と変わらないでしょう、それを一概に嘘と言うのはあなたがただけの偏見ですよ。我々河童はあなたがたのように、……しかしそれはどうでもよろしい。わたしの話したいのはロッペのことです。ロッペはクオラックス党を支配している、そのまたロッペを支配しているものは Pou- Fou 新聞の（この『プウ・フウ』という言葉もやはり意味のない間投詞です。もし強いて訳すれば、『ああ』とでも言うほかはありません）。社長のクイクイです。が、クイクイも彼自身の主人というわけにはゆきません。クイクイを支配しているものはあなたの前にいるゲエルです」。

「けれども——これは失礼かもしれませんが、プウ・フウ新聞は労働者の味かたをする新聞でしょう。その社長のクイクイもあなたの支配を受けているというのは、……」、「プウ・フウ新聞の記者たちはもちろん労働者の味かたです。しかし記者たちを支配するのはクイクイのほかはありますまい。しかもクイクイはこのゲエルの後援を受けずにはいられないのです」。

ゲエルは相変わらず微笑しながら、純金の匙をおもちゃにしています。僕はこういうゲエルを見ると、ゲエル自身を憎むよりも、プウ・フウ新聞の記者たちに同情の起るのを感じました。するとゲエルは僕の無言にたちまちこの同情を感じたとみえ、大きい腹をふくらませてこう言うのです。「なに、プウ・フウ新聞の記者たちも全部労働者の味かたではありませんよ。少なくとも我々河童というものはだれの味かたをするよりも先に我々自身の味かたをしますからね。……しかしさらに厄介なことにはこのゲエル自身さえやはり他人の支配を受けているのです。あなたはそれをだれだと思えますか？ それはわたしの妻ですよ。美しいゲエル夫人ですよ」。

ゲエルはおお声に笑いました。「それはむしろしあわせでしょう」、「とにかくわたしは満足しています。しかしこれもあなたの前だけに、——河童でないあなたの前だけに手放して吹聴できるのです」、「するとつまりクオラックス内閣はゲエル夫人が支配しているのですね」、「さあそうも言われませんか。……しかし七年前の戦争などはたしかにある雌の河童のために始まったものに違いありません」、「戦争？ この国にも戦争はあったのですか？」、「ありましたとも。将来もいつあるかわかりません。なにしろ隣国のある限りは、……」

僕は実際この時はじめて河童の国も国家的に孤立していないことを知りました。ゲエルの説明するところによれば、河童はいつも 獺を仮設敵にしているということです。しかも 獺は河童に負けない軍備を具えているということです。僕はこの 獺を相手に河童の戦争した話にならぬから興味を感じました。（なにしろ河童の強敵に 獺のいるなどということは「水虎考略」の著者はもちろん、「山島民譚集」の著者 柳田国男さえ知らずにいたらしい新事実ですから。）

「あの戦争の起る前にはもちろん両国とも油断せずじつと相手をうかがっていました。というのはどちらも同じように相手を恐怖していたからです。そこへこの国にいた 獺が一匹、ある河童の夫婦を訪問しました。そのまた雌の河童というのは亭主を殺すつもりでいたのです。なにしろ亭主は道楽者でしたからね。おまけに生命保険のついていたことも多少の誘惑になったかもしれせん」。

「あなたはその夫婦を御存じですか?」、「ええ、——いや、雄の河童だけは知っています。わたしの妻などはこの河童を悪人のように言っていますかね。しかしわたしに言わせれば、悪人よりもむしろ雌の河童につかまることを恐れている被害妄想の多い狂人です。……そこでこの雌の河童は亭主のココアの茶碗の中へ青化加里を入れておいたのです。それをまたどう間違えたか、客の癩に飲ませてしまったのです。癩はもちろん死んでしまいました。それから……」、「それから戦争になったのですか?」、「ええ、あいにくその癩は勲章を持っていたものですからね」、「戦争はどちらの勝ちになったのですか?」、「もちろんこの国の勝ちになったのです。三十六万九千五百匹の河童たちはそのために健気にも戦死しました。しかし敵国に比べれば、そのくらいの損害はなんともありません。この国にある毛皮という毛皮はたいいてい癩の毛皮です。わたしもあの戦争の時には硝子を製造するほかに石炭殻を戦地へ送りました」、「石炭殻を何にするのですか?」、「もちろん食糧にするのです。我々は、河童は腹さえ減れば、なんでも食うのにきまっていますからね」、「それは——どうか怒らずにください。それは戦地にいる河童たちには……我々の国では醜聞ですがね」。

「この国でも醜聞には違いありません。しかしわたし自身こう言っていれば、だれも醜聞にはしないものです。哲学者のマジグも言っているでしょう。『汝の悪は汝自ら言え。悪はおのずから消滅すべし』、……しかもわたしは利益のほかにも愛国心に燃え立っているのですからね」。

ちようどそこへはいつてきたのはこの倶楽部の給仕です。給仕はゲエルにお時宜をした後、朗読でもするようにこう言いました。「お宅のお隣に火事がございます」、「火——火事は落ち着き払って次の言葉をつけ加えました。「しかしもう消し止めました」と。仕は落ち着き払って次の言葉をつけ加えました。「しかしもう消し止めました」と。

ゲエルは給仕を見送りながら、泣き笑いに近い表情をしました。僕はこういう顔を見ると、いつかこの硝子会社の社長を憎んでいたことに気づきました。が、ゲエルはもう今では大資本家でもなんでもないただの河童になって立っているのです。僕は花瓶の中の冬薔薇の花を抜き、ゲエルの手へ渡しました。「しかし火事は消えたといっても、奥さんはさぞお驚きでしょう。さあ、これを持ってお帰りなさい」、「ありがとう」と、ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑い、小声にこう僕に話しかけました。「隣はわたしの家作ですからね。火災保険の金だけはとれるのですよ」。

僕はこの時のゲエルの微笑を——軽蔑することもできなければ、憎悪することもできないゲエルの微笑をいまだにありありと覚えています。

十、学生のラップと大音楽家のクラブバックの家で音楽の話をする

「どうしたね? きょうはまた妙にふさいでいるじゃないか?」、その火事のあった翌日です。僕は巻煙草をくわえながら、僕の客間の椅子に腰をおろした学生のラップにこう言いました。実際またラップは右の脚の上へ左の脚をのせたまま、腐った嘴も見えないほど、ぼんやり床の上ばかり見ていたのです。「ラップ君、どうしたね」と言えは、「いや、なに、つまらないことなのですよ。——」

ラップはやっと頭をあげ、悲しい鼻声を出しました。「僕はきょう窓の外を見ながら、

『おや虫取り董すみれが咲いた』と何気なにげなしにつぶやいたのです。すると僕の妹は急に顔色を変えたとすると、『どうせわたしは虫取り董よ』と当たり前散らすじゃありませんか？ おまけにまた僕のおふくろも大の妹鼻ひいき屑くずですから、やはり僕に食ってかかるのです。『虫取り董すみれが咲いた』ということはどうして妹さんには不快なのだね？』「さあ、たぶん雄おとこの河童かどうをつかまえるという意味にでもとったのでしょう。そこへおふくろと仲悪い叔母おばも喧嘩けんかの仲間入りをしたのですから、いよいよ大騒動だいさうどうになってしまいました。しかも年中酔っ払っているおやじはこの喧嘩けんかを聞きつけると、たれかれの差別さべつなしに殴り出したのです。それだけでも始末しまつのつかないところへ僕の弟はその間あいだにおふくろの財布さいふを盗むが早い、キネマか何かを見にいってしまいました。僕は……ほんとうに僕はもう、……」

ラップは両手に顔を埋うずめ、何も言わずに泣いてしまいました。僕の同情したのはもちろんです。同時にまた家族制度かぞくせいどに対する詩人のトックの軽蔑けいべつを思い出したのももちろんです。僕はラップの肩をたたき、一生懸命いっしょうけんめいに慰めました。「そんなことはどこでもありがちだよ。まあ勇気を出したまえ」、「しかし……しかし……でも腐くちまっていなければ、……」、「それはあきらめるほかはないさ。さあ、トック君の家へでも行こう」、「トックさんは僕を軽蔑けいべつしています。僕はトックさんのように大胆だたんに家族を捨てることができせんから」、「じゃクラバツク君の家へ行こう」と言うのであった。

僕はあの音楽会以来、クラバツクにも友だちになっていましたから、とにかくこの大音楽家の家へラップをつれ出すことにしました。クラバツクはトックに比べれば、はるかに贅ぜい沢たくに暮らしています。というのは資本家のゲエルのように暮らしているという意味ではありません。ただいろいろの骨董こつどうを、一タナグラの人形やペルシアの陶器たうきを部屋へやいっばいに並べた中にトルコ風の長椅子ながいすを据すえ、クラバツク自身の肖像画の下にいつも子どもたちと遊んでいるのです。が、きょうはどうしたのか両腕りょううでを胸へ組んだまま、苦い顔をしてすわっていました。のみならずそのまた足もとには紙屑かみくずが一面に散らばっていました。ラップも詩人トックといっしょにたびたびクラバツクには会っているはずです。しかしこの容子ようすに恐れたとみえ、きょうは丁寧ていねいにお時宜じぎをしたなり、黙もくって部屋へやの隅すみに腰をおろしました。

「どうしたね？ クラバツク君」と、僕はほとんど挨拶あいさつの代わりにこう大音楽家へ問いかけました。「どうするものか？ 批評家の阿呆あほうめ！ 僕の抒情詩はトックの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ」、「しかし君は音楽家だし、……」、「それだけならば我慢がまんもできる。僕はロックに比べれば、音楽家の名に値なしないと言やがるじゃないか？」

ロックというのはクラバツクとたびたび比べられる音楽家です。が、あいにく超人俱樂部くらぶの会員かいぎんになっていない関係上、僕は一度も話したことはありません。もつとも嘴くちばしの反り上そがった、一癖ひとくせあるらしい顔だけはたびたび写真でも見かけていました。「ロックも天才てんさいには違ちがいがない。しかしロックの音楽は君の音楽にあふれている近代的情熱きんたいてきじやうねつを持っていない」、「君はほんとうにそう思うか？」、「そう思うとも」と言う。

するとクラバツクは立ち上がるが早い、タナグラの人形をひつつかみ、いきなり床ゆかの上うへにたたきつけました。ラップはよほど驚いたとみえ、何か声をあげて逃げようとした。が、クラバツクはラップや僕にはちょっと「驚おどろきな」という手真似てまねをした上、今度は冷やかにこう言うのです。「それは君もまた俗人ぞくじんのように耳を持つていないからだ。僕はロックを恐れている。……」、「君が？ 謙遜家けんそんかを気どるのはやめたまえ」、「だれが謙遜家けんそんか

を氣どるものか？ 第一君たちに氣どって見せるくらいならば、批評家たちの前に氣どって見せている。僕は——クラブバックは天才だ。その点ではロックを恐れていない」、「では何を恐れているのだ？」、「何か正体の知れないものを、——言わばロックを支配している星を」、「どうも僕には腑に落ちないがね」、

「ではこう言えばわかるだろう。ロックは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にかロックの影響を受けてしまうのだ」、「それは君の感受性の……」、「まあ、聞きたまえ。感受性などの問題ではない。ロックはいつも安んじてあいつだけにできる仕事をしている。しかし僕はいらいらするのだ。それはロックの目から見れば、あるいは一步の差かもしれない。けれども僕には十哩も違うのだ」、「しかし先生の英雄曲は……」

クラブバックは細い目をいつそう細め、いまいましそうにラップをにらみつけました。「黙りましたまえ。君などに何がわかる？ 僕はロックを知っているのだ。ロックに平身低頭する犬どもよりもロックを知っているのだ」、「まあ少し静かにしたまえ」、「もし静かにしていられるならば、……僕はいつもこう思っている。——僕らの知らない何ものかは僕を、——クラブバックをあざけるためにロックを僕の前に立たせたのだ。哲学者のマグはこういうことをなにもかも承知している。いつもあの色硝子のランタアンの下に古ぼけた本ばかり読んでいるくせに」、「どうして？」、「この近ごろマグの書いた『阿呆の言葉』という本を見たまえ。——」と言うのであった。

クラブバックは僕に一冊の本を渡す——というよりも投げつけました。それからまた腕を組んだまま、突っけんどんにこう言い放ちました。「じゃきようは失敬しよう」

僕はしよげ返ったラップといっしょにもう一度往来へ出ることにしました。人通りの多い往来は相変わらず毛生櫂の並み木のかげにいろいろの店を並べています。僕はなんとすることもなしに黙って歩いてゆきました。するとそこへ通りかかったのは髪の毛の長い詩人のトックです。トックは僕らの顔を見ると、腹の袋から手巾を出し、何度も額をぬぐいました。「やあ、しばらく会わなかったね。僕はきようは久しぶりにクラブバックを尋ねようと思うのだが、……」

僕はこの芸術家たちを喧嘩させては悪いと思ひ、クラブバックのいかにも不機嫌だったことを婉曲にトックに話しました。「そうか。じゃやめにしよう。なにしろクラブバックは神経衰弱だからね。……僕もこの二三週間は眠られないのに弱っているのだ」、「どうだね、僕らといっしょに散歩をしては？」、「いや、きようはやめにしよう。おや！」と、トックはこう叫ぶが早いか、しつかり僕の腕をつかみました。しかもいつか体中に冷汗を流しているのです。「どうしたのだ？」、「どうしたのです？」、「なにあの自動車の窓の中から緑いろの猿が一匹首を出したように見えたのだよ」と言う。

僕は多少心配になり、とにかくあの医者 of チヤックに診察してもらおうように勧めました。しかしトックはなんと言っても、承知する気色さえ見せません。のみならず何か疑わしうに僕らの顔を見比べながら、こんなことさえ言い出すのです。「僕は決して無政府主義者ではないよ。それだけはきつと忘れずにいてくれたまえ。——ではさようなら。チャックなどはまっぴらごめんだ」。

僕らはぼんやりたたずんだまま、トックの後ろ姿を見送っていました。僕らは——いや、「僕ら」ではありません。学生のラップはいつの間にか往来のまん中に脚をひろげ、しつかりない自動車や人通りを股目金にのぞいているのです。僕はこの河童も発狂したかと思

い、驚いてラップを引き起こしました。「常談じゃない。何をしている？」
しかしラップは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。「いえ、あまり憂鬱ですから、さかさまに世の中をながめて見たのです。けれどもやはり同じことですね」と言うのであった。

十一、哲学者マッグの「阿呆の言葉」（自身の「或阿呆の一生」）と重なる

これは哲学者のマッグの書いた「阿呆の言葉」の中の何章かです。――

阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じている。

我々の自然を愛するのは自然は我々を憎んだり嫉妬したりしないためもないことはない。

もっとも賢い生活は一時代の習慣を軽蔑しながら、しかもそのまた習慣を少しも破らなように暮らすことである。

我々のもっとも誇りたいものは我々の持っていないものだけである。

何も偶像を破壊することに異存を持っているものはない。同時にまた何びとも偶像になることに異存を持っているものはない。しかし偶像の台座の上に安んじてすわっていられるものももっとも神々に恵まれたもの、――阿呆か、悪人か、英雄かである。（クラブツクはこの章の上へ爪の痕をつけていました。）

我々の生活に必要な思想は三千年前に尽きたかもしれない。我々はただ古い薪に新しい炎を加えるだけであろう。

我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としている。

幸福は苦痛を伴い、平和は倦怠を伴うとすれば、――？

自己を弁護することは他人を弁護することよりも困難である。疑うものは弁護士を見よ。

矜誇（自慢・プライド）、愛欲、疑惑（疑念）――あらゆる罪は三千年来、この三者から発している。同時にまたおそらくはあらゆる徳も。

物質的欲望を減ずることは必ずしも平和をもたらさない。我々は平和を得るためには精神的欲望も減じなければならぬ。（クラブツクはこの章の上にも爪の痕を残していました。）

我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化していない。（僕はこの章を読んだ

だったら、刑法千二百八十五条をお調べなさい」と言うのであった。

「巡査はこう言いつてたなり、さつきとどこかへ行つてしまいました。僕はしかたがありませんから、「刑法千二百八十五条」を口の中に繰り返し、マッグの家へ急いでゆきました。哲学者のマッグは好きです。現にきょうも薄暗い部屋には裁判官のペップや医者やチャックや硝子会社の社長のゲエルなどが集まり、七色の色硝子のランタアンの下に煙草の煙を立ち昇らせていました。そこに裁判官のペップが来ていたのは何よりも僕には好つごうです。僕は椅子にかけられるが早いかな、刑法第千二百八十五条を検べる代わりにさつそくペップへ問いかけました。「ペップ君、はなはだ失礼ですが、この国では罪人を罰しないのですか？」と。

ペップは金口の煙草の煙をまず悠々と吹き上げてから、いかにもつまらなそうに返事をしました。「罰しますとも。死刑さえ行なわれるくらいですからね」、「しかし僕は一月ばかり前に、……」と、僕は委細を話した後、例の刑法千二百八十五条のことを尋ねてみしました。「ふむ、それはこういうのです。——『いかなる犯罪を行ないたりといえども、該犯罪を行なわしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を処罰することを得ず』つまりあなたの場合で言えば、その河童はかつては親だったのですが、今はもう親ではありませんから、犯罪も自然と消滅するのです」、「それはどうも不合理ですね」、「常談を言つてはいけません。親だった河童も親である河童も同一に見るのこそ不合理です。そうそう、日本の法律では同一に見ることになっているのですね。それはどうも我々には滑稽です。ふふふふふふふふ」と言うのであった。

ペップは巻煙草をほうり出しながら、気のない薄笑いをもらしていました。そこへ口を出したのは法律には縁の遠いチャックです。チャックはちよつと鼻目金を直し、こう僕に質問しました。「日本にも死刑はありますか?」、「ありますとも。日本では絞罪です」、僕は冷然と構えこんだペップに多少反感を感じていましたから、この機会に皮肉を浴びせてやりました。「この国の死刑は日本よりも文明的にできていますか?」、「それはもちろん文明的です」と、ペップはやはり落ち着いていました。

「この国では絞罪などは用いませぬ。まれには電氣を用いることもあります。しかしたいていは電氣も用いませぬ。ただその犯罪の名を言つて聞かせるだけです」、「それだけで河童は死ぬのですか?」、「死にますとも。我々河童の神経作用はあなたがたのよりも微妙ですからね」、「それは死刑ばかりではありません。殺人にもその手を使うのがあります」と、社長のゲエルは色硝子の光に顔中紫に染まりながら、人なつこい笑顔を見せて見せました。「わたしはこの間もある社会主義者に『貴様は盗人だ』と言われたために心臓麻痺を起こしかかったものです」、「それは案外多いようですね。わたしの知っていたある弁護士などはやはりそのため死んでしまったのですからね」と言う。

僕はこう口を入れた河童、——哲学者のマッグをふりかえりました。マッグはやはりいつものように皮肉な微笑を浮かべたまま、だれの顔も見ずにしゃべっているのです。「その河童はだれかに蛙だと言われ、——もちろんあなたも御承知でしょう、この国で蛙だと言われるのは人非人という意味になることぐらいは。——己は蛙かな? 蛙ではないかな? と毎日考えているうちにとうとう死んでしまったものです」、「それはつまり自殺ですね」、「もつともその河童を蛙だと言つたやつは殺すつもりで言つたのですがね。あなたがたの目から見れば、やはりそれも自殺という……」と、ちよつとマッグがこう言

らずに笑っているのです。僕は雌の河童の代わりに子どもの河童をあやしてやりました。するといつか僕の目にも涙のたまるのを感じました。僕が河童の国に住んでいるうちに涙というものをこぼしたのは前にもあとにもこの時だけです。「しかしこういうわがままの河童といっしょになった家族は気の毒ですね」、「なにしろあとのことも考えないのですから」と、裁判官のペップは相変わらず、新しい巻煙草まきたばこに火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしていました。すると僕らを驚かせたのは音楽家のクラバックのお声です。クラバックは詩稿を握ったまま、だれにもなしに呼びかけました。「しめた！ すばらしい葬送曲ができるぞ」と言うのであった。

クラバックは細い目をかがやかせたまま、ちよつとマッグの手を握ると、いきなり戸口へ飛んでいきました。もちろんもうこの時には隣近所の河童が大勢、トックの家の戸口に集まり、珍しそくに家の中をのぞいているのです。しかしクラバックはこの河童たちを遮しや二無二にむにに左右へ押しつけるが早いか、ひらりと自動車へ飛び乗りました。同時にまた自動車は爆音を立ててたちまちどこかへ行ってしまいました。「こら、こら、そうのぞいてはいかん」と言う。

裁判官のペップは巡査の代わりに大勢の河童かつぼを押し出した後、トックの家の戸をしめてしまいました。部屋へやの中はそのせいか急にひっそりなったものです。僕らはこういう静かさの中に――高山植物の花の香に交じったトックの血の匂におの中に後始末あとしまつのことなどを相談しました。しかしあの哲学者のマッグだけはトックの死散しがいをながめたまま、ぼんやり何か考えています。僕はマッグの肩をたたき、「何を考えているのです？」と尋ねました。

「河童の生活というものをね」、「河童の生活がどうなるのです？」、「我々河童はなんと言つても、河童の生活をまっとうするためには、……」と、マッグは多少はざかしそうにこう小声でつけ加えました。「とにかく我々河童以外の何ものかの力を信ずることですな」と言うのであった。

一四、河童の国の宗教と大寺院内部にある様々な半身像を見てまわる

僕に宗教というものを思い出させたのはこういうマッグの言葉です。僕はもちろん物質主義者ですから、真面目まじめに宗教を考えたことは一度もなかったのに違いありません。が、この時はトックの死にある感動を受けていたためにいったい河童の宗教はなんであるかと考え出したのです。僕はさっそく学生のラップにこの問題を尋ねてみました。

「それは基督教キリストきょう、仏教、モハメット教、拜火教はいかきょうなども行なわれています。まず一番勢力のあるものはなんといつても近代教でしょう。生活教とも言いますがね。」「(「生活教」という訳語は当たっていないかもしれませんが。この原語は Quemoocha です。cha は英吉利語の ism という意味に当たるでしょう。quemoo の原形 quernal の訳は単に「生きる」というよりも「飯を食ったり、酒を飲んだり、交合ごうごうを行なったり」する意味です)、「じゃこの国にも教会だの寺院だのはあるわけなのだね？」、「常談じょうだんを言つてはいけません。近代教の大寺院などはこの国第一の大建築ですよ。どうです、ちよつと見物に行つては？」と言うのであった。

ある生温なまあたかい曇天の午後、ラップは得々とくとくと僕といっしょにこの大寺院へ出かけました。なるほどそれはニコライ堂の十倍もある大建築です。のみならずあらゆる建築様式を一つ

に組み上げた大建築です。僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や円屋根をながめた時、なにか無気味にさえ感じました。実際それらは天に向かって伸びた無数の触手のように見えたものです。僕らは玄関の前にたたずんだまま、(そのまた玄関に比べても、どのくらい僕らは小さかったのでしょうか!)、しばらくこの建築よりもむしろ途方もない怪物に近い稀代の大寺院を見上げていました。

大寺院の内部もまた広大です。そのコリント風の円柱の立った中には参詣人が何人も歩いていました。しかしそれらは僕らのように非常に小さく見えたものです。そのうちに僕らは腰の曲がった一匹の河童に出会いました。するとラップはこの河童にちよつと頭を下げた上、丁寧にかう話しかけました。「長老、御達者なのは何よりもです」と。

相手の河童もお時宜をした後、やはり丁寧に戻事をしました。「これはラップさんですか? あなたも相変わらぬ、——(と言いかげながら、ちよつと言葉をつがなかったのはラップの嘴の腐っているのにやつと気がついたためだっただけでしょう)。——ああ、とにかく御丈夫らしいようですね。が、きょうはどうしてまた……」、「きょうはこの方のお伴をしてきたのです。この方はたぶん御承知のとおり、——」と、それからラップは滔々と僕のことを話しました。どうもまたそれはこの大寺院へラップがめつたに出来ないことの弁解にもなっていたらしいのです。「ついでにどうかこの方の御案内を願いたいと思うのですが」。

長老は大様に微笑しながら、まず僕に挨拶をし、静かに正面の祭壇を指さしました。「御案内と申しても、何もお役に立つことはできません。我々信徒の礼拝するのは正面の祭壇にある『生命の樹』です。『生命の樹』にはごらんのとおり、金と緑との果がなっています。あの金の果を『善の果』と言ひ、あの緑の果を『悪の果』と言ひます。……」

僕はこういう説明のうちにもう退屈を感じ出しました。それはせつかくの長老の言葉も古い比喩のように聞こえたからです。僕はもちろん熱心に聞いている容子を装っていました。が、時々は大寺院の内部へそつと目をやるのを忘れずにいました。

コリント風の柱、ゴシック風の穹窿、アラビアじみた市松模様の床、セセッションまがいの祈祷机、——こういうものの作っている調和は妙に野蛮な美を具えていました。しかし僕の目をひいたのは何よりも両側の龕の中にある大理石の半身像です。僕は何かそれらの像を見知っているように思いました。それもまた不思議ではありません。あの腰の曲った河童は「生命の樹」の説明をおわると、今度は僕やラップといっしょに右側の龕の前へ歩み寄り、その龕(仏像などを安置するための厨子や小室)の中の半身像にこういう説明を加え出しました。

「これは我々の聖徒のひとり、——あらゆるものに反逆した聖徒ストリントベリイです。この聖徒はさんざん苦しんだあげく、スウェデンボルグの哲学のために救われたように言われています。が、実は救われなかったのです。この聖徒はただ我々のように生活教を信じていました。——というよりも信じるほかにはなかったのです。この聖徒の我々に残した『伝説』という本を読んでごらん下さい。この聖徒も自殺未遂者だったことは聖徒自身告白しています」。

僕はちよつと憂鬱になり、次の龕へ目をやりました。次の龕にある半身像は口髭の太い独逸人です。「これはツアラトストラの詩人ニイチエです。その聖徒は聖徒自身の造った超人に救いを求めました。が、やはり救われずに気違いになってしまったのです。もし気

違いにならなかったとすれば、あるいは聖徒の数へはいることもできなかったかもしれない……」と、長老はちよつと黙った後、第三の龕の前へ案内しました。

「三番目にあるのはトルストイです。この聖徒はだれよりも苦行をしました。それは元来貴族だったために好奇心の多い公衆に苦しみを見せることをきらったからです。この聖徒は事実上信ぜられない基督を信じようと努力しました。いや、信じているようにさえ公言したこともあったのです。しかしとうとう晩年には悲壮な嘘つきだったことに堪えられないようになりました。この聖徒も時々書齋の梁に恐怖を感じたのは有名です。けれども聖徒の数にはいつているくらいですから、もちろん自殺したではありません」。

第四の龕の中の半身像は我々日本人のひとりです。僕はこの日本人の顔を見た時、さすがに懐しさを感じました。「これは国木田独歩です。轢死する人足の心もちをはつきり知っていた詩人です。しかしそれ以上の説明はあなたには不必要に違いありません。では五番目の龕の中をごらんください。——」

「これはワグネルではありませんか?」「そうです。国王の友だちだった革命家です。聖徒ワグネルは晩年には食前の祈祷さえしていました。しかしもちろん基督教よりも生活教の信徒のひとりだったのです。ワグネルの残した手紙によれば、娑婆苦は何度この聖徒を死の前に駆りやっただかわかりません」と言うのであった。

僕らはもうその時には第六の龕の前に立っていました。「これは聖徒ストリントベリーの友だちです。子どもの大勢ある細君の代わりに十三四のタイテイの女をめぐった商売人上りの仏蘭西の画家です。この聖徒は太い血管の中に水夫の血を流していました。が、唇をごらんください。砒素か何かの痕が残っています。第七の龕の中にあるのは……もうあなたはお疲れでしょう。ではどうかこちらへおいでください」と言う。

僕は実際疲れていましたから、ラップといっしょに長老に従い、香の匂いのする廊下伝いにある部屋へはいりました。そのまた小さい部屋の間には黒いヴェヌスの像の下に山葡萄が一ふさ献じてあるのです。僕はなんの装飾もない僧房を想像してただけにちよつと意外に感じました。すると長老は僕の容子にこういう気もちを感じたとみえ、僕らに椅子を薦める前に半ば気の毒そうに説明しました。

「どうか我々の宗教の生活教であることを忘れずにください。我々の神、——『生命の樹』の教えは『旺盛に生きよ』というのですから。……ラップさん、あなたはこのかたに我々の聖書をごらんにいれましたか?」「いえ、……実はわたし自身もほとんど読んだことはないのです」。

ラップは頭の皿を搔きながら、正直にこう返事をしました。が、長老は相変わらず静かに微笑して話しつづけました。「それではおわかりになりますまい。我々の神は一日のうちにこの世界を造りました。『生命の樹』は樹というものの、成しあたわらないことはないのです。のみならず雌の河童を造りました。すると雌の河童は退屈のあまり、雄の河童を求めました。我々の神はこの嘆きを憐れみ、雌の河童の脳髓を取り、雄の河童を造りました。我々の神はこの二匹の河童に『食えよ、交合せよ、旺盛に生きよ』という祝福を与えました。……」

僕は長老の言葉のうちに詩人のトックを思い出しました。詩人のトックは不幸にも僕のように無神論者です。僕は河童ではありませんから、生活教を知らなかったのも無理はあ

りません。けれども河童の国に生まれたトックはもちろん「生命の樹」を知っていたはず
です。僕はこの教えに従わなかったトックの最後を憐れみましたが、長老の言葉をさ
ざるようにトックのことを話し出しました。「ああ、あの気の毒な詩人ですね」、長老は
僕の話聞き、深い息をもらしました。「我々の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然と
だけです。(もつともあなたがたはそのほかに遺伝をお数えなさるでしょう)。トックさ
んは不幸にも信仰をお持ちにならなかったのです」。「トックはあなたをうらやんでいた
でしょう。いや、僕もうらやんでいません。ラップ君などは年も若いし、……」、「僕も嘴
さえちゃんとしていればあるいは楽天的だったかもしれない」と、長老は僕らにこう言
われると、もう一度深い息をもらしました。しかもその目は涙ぐんだまま、じつと黒いヴ
ェヌスを見つめているのです。「わたしも実は、——これはわたしの秘密ですから、どう
かだれにもおっしゃらずにください。——わたしも実は我々の神を信ずるわけにいかない
のです。しかしいつかわたしの祈禱は、——」と言うのであった。

ちょうど長老のこう言った時です。突然部屋へやの戸があいたと思うと、大きい雌の河童が
一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。僕らがこの雌の河童を抱きとめようとしたのは
もちろんです。が、雌の河童はとっさの間に床の上へ長老を投げ倒しました。「この爺
め！ きょうもまたわたしの財布から一杯やる金を盗んでいったな！」

十分ばかりたった後、僕らは実際逃げ出さなければかりに長老夫婦をあとに残し、大寺院
の玄関を下りていきました。「あれではあの長老も『生命の樹』を信じないはずですね」。

しばらく黙って歩いた後、ラップは僕にこう言いました。が、僕は返事をするよりも思
わず大寺院を振り返りました。大寺院はどんより曇った空にやはり高い塔や円屋根を無数
の触手のように伸ばしています。なにか沙漠の空に見える蟹気楼の無気味さを漂わせたま
ま。……

一五、死んだ詩人トックの幽霊(靈魂)と交流した心靈学協会の報告

それからかれこれ一週間の後、僕はふと医者いしやのチャックに珍しい話を聞きました。とい
うのはあのトックの家うちに幽霊の出るとい話なのです。そのころにはもう雌の河童はどこ
かほかへ行ってしまった、僕らの友だちの詩人の家も写真師のステュディオに変わっていま
した。なんでもチャックの話によれば、このステュディオでは写真をとると、トックの姿
もいつの間にか必ず朦朧もうろうと客の後ろに映っているとかいうことです。もつともチャックは
物質主義者ですから、死後の生命などを信じていません。現にその話をした時にも悪意の
ある微笑を浮かべながら、「やはり靈魂というものも物質的存在とみえますね」などと註
釈めたことをつけ加えていました。僕も幽霊を信じないことはチャックとあまり変わり
ません。けれども詩人のトックには親しみを感じていましたから、さっそく本屋の店へ駆
けつけ、トックの幽霊に関する記事やトックの幽霊の写真の出ている新聞や雑誌を買って
きました。なるほどそれらの写真を見ると、どこかトックらしい河童が一匹、老若男女
の河童の後ろにぼんやりと姿を現わしていました。しかし僕を驚かせたのはトックの幽霊
の写真よりもトックの幽霊に関する記事、——ことにトックの幽霊に関する心靈学協会の
報告です。僕はかなり逐語的にその報告を訳しておきましたから、下に大略を掲げること
にしましょう。ただし括弧の中にあるのは僕自身の加えた註釈なのです。——

詩人トック君の幽霊に関する報告。(心霊学協会雑誌第八千二百七十四号所載)

わが心霊学協会は先般自殺したる詩人トック君の旧居にして現在は××写真師のステュディオなる□□街第二百五十一号に臨時調査会を開催せり。列席せる会員は下のごとし。(氏名を略す。)

我ら十七名の会員は心霊協会会長ペック氏とともに九月十七日午前十時三十分、我らのもっとも信頼するメデアム、ホップ夫人を同伴し、該ステュディオの一室に参集せり。ホップ夫人は該ステュディオにはいるや、すでに心霊的空氣を感じ、全身に痙攣を催しつつ、嘔吐すること数回に及べり。夫人の語るところによれば、こは詩人トック君の強烈なる煙草を愛したる結果、その心霊的空氣もまたニコティンを含有するためなりという。

我ら会員はホップ夫人とともに円卓をめぐりて黙坐したり。夫人は三分二十五秒の後、きわめて急劇なる夢遊状態に陥り、かつ詩人トック君の心霊の憑依するところとなれり。我ら会員は年齢順に従い、夫人に憑依せるトック君の心霊と左のごとき問答を開始したり。

問 君は何ゆえに幽霊に出ずるか？

答 死後の名声を知らんがためなり。

問 君——あるいは心霊諸君は死後もなお名声を欲するや？

答 少なくとも予は欲せざるあたわず。しかれども予の邂逅したる日本の一詩人のごときは死後の名声を軽蔑しいたり。

問 君はその詩人の姓名を知れりや？

答 予は不幸にも忘れてたり。ただ彼の好んで作れる十七字詩の一章を記憶するのみ。

問 その詩は如何？

答 「古池や蛙飛びこむ水の音」。

問 君はその詩を佳作なりとなすや？

答 予は必ずしも悪作なりとなさず。ただ「蛙」を「河童」とせんか、さらに光彩陸離たるべし。

問 しからばその理由は如何？

答 我ら河童はいかなる芸術にも河童を求むること痛切なればなり。

会長ペック氏はこの時にあたり、我ら十七名の会員には心霊学協会の臨時調査会にして合評会にあらざるを注意したり。

問 心霊諸君の生活は如何？

答 諸君の生活と異なることなし。

問 しからば君は君自身の自殺せしを後悔するや？

答 必ずしも後悔せず。予は心霊的生活に倦まば、さらにピストルを取りて自活すべし。

問 自活するは容易なりや否や？

答 トック君の心霊はこの問に答うるにさらに問をもつてしたり。こはトック君を知れるものにはすこぶる自然なる応酬なるべし。

答 自殺するは容易なりや否や？

問 諸君の生命は永遠なりや？

答 我らの生命に關しては諸説紛々として信ずべからず。幸いに我らの間にも基督教、仏教、モハメット教、拜火教等の諸宗あることを忘るるなかれ。

問 君自身の信ずるところは？

答 予は常に懷疑主義者なり。

問 しかれども君は少なくとも心霊の存在を疑わざるべし？

答 諸君のごとく確信するあたわず。

問 君の交友の多少は如何？

答 予の交友は古今東西にわたり、三百人を下らざるべし。その著名なるものをあぐれば、クライスト、マインレンデル、ワイニングル……

問 君の交友は自殺者のみなりや？

答 必ずしもしかりとせず。自殺を弁護せるモンテエニユのごときは予が畏友の一人なり。ただ予は自殺せざりし厭世主義者、——シヨオペンハウエルの輩とは交際せず。

問 シヨオペンハウエルは健在なりや？

答 彼は目下心霊的厭世主義を樹立し、自活する可否を論じつつあり。しかれどもコレラも黴菌病なりしを知り、すこぶる安堵せるもののごとし。

我ら会員は相次いでナポレオン、孔子、ドストエフスキイ、ダーウイン、クレオパトラ、釈迦、デモステネス、ダンテ、千の利休等の心霊の消息を質問したり。しかれどもトック君は不幸にも詳細に答うることをなさず、かえってトック君自身に関する種々のゴシップを質問したり。

問 予の死後の名声は如何？

答 ある批評家は「群小詩人のひとり」と言い。

問 彼は予が詩集を贈らざりしに怨恨を含めるひとりなるべし。予の全集は出版せられしや？

答 君の全集は出版せられたれども、売行きはなほだ振わざるがごとし。

問 予の全集は三百年の後、——すなわち著作権の失われたる後、万人の購うところとなるべし。予の同棲せる女友たちは如何？

答 彼女は書肆ラック君の夫人となれり。

問 彼女はいまだ不幸にもラックの義眼なるを知らざるなるべし。予が子は如何？

答 国立孤児院にありと聞けり。

トック君はしばらく沈黙せる後、新たに質問を開始したり。

問 予が家は如何？

答 某写真師のステュディオとなれり。

問 予の机はいかになれるか？

答 いかになれるかを知るものなし。

問 予は予の机の抽斗に予の秘蔵せる一束の手紙を——しかれどもこは幸いにも多忙なる諸君の関するところにあらず。今やわが心霊界はおもむろに薄暮に沈まんとす。予は諸君と訣別すべし。さらば。諸君。さらば。わが善良なる諸君。

ホップ夫人は最後の言葉とともにふたたび急劇に覚醒したり。我ら十七名の会員はこの問答の真なりしことを上天の神に誓って保証せんとす。（なおまた我らの信賴するホップ夫人に対する報酬はかつて夫人が女優たりし時の日当に従いて支弁したり。）

一六、主人公は、やがて人間の国に帰りたいと想うようになる……

僕はこういう記事を読んだ後、だんだんこの国にいることも憂鬱ゆううつになってきましたから、どうか我々人間の国へ帰ることにしたいと思いました。しかしいくら探さがして歩いてても、僕の落ちた穴は見つかりません。そのうちにあのバッグという漁夫りょうしの河童の話には、なんでもこの国の街まちはずれにある年をとった河童が一匹、本を読んだり、笛ふえを吹いたり、静かに暮らしているということです。僕はこの河童に尋ねてみれば、あるいはこの国を逃げ出す途みちもわかりはしないかと思いましたが、さっそく街はずれへ出かけてゆきました。しかしそこへ行ってみると、いかにも小さい家の中に年をとった河童どころか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々ゆうゆうと笛を吹いていました。僕はもちろん間違まちがった家へは行ったではないかと思いましたが、念のために名をきいてみると、やはりバッグの教えてくれた年よりの河童に違ちがいがないのです。

「しかしあなたは子どもなのですが……」、「お前さんはまだ知らないのかい？ わたしはどういう運命か、母親の腹を出た時には白髪しろが頭あたまをしていたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子どもになったのだよ。けれども年を勘定すれば生まれる前を六十としても、かれこれ百五十六にはなるかもしれない」。

僕は部屋へやの中を見まわしました。そこには僕の気のせいとか、質素な椅子いすやテーブルの間に何か清らかな幸福が漂ただよっているように見えるのです。「あなたはどうもほかの河童よりもしあわせに暮らしているようですね？」、「さあ、それはそうかもしれない。わたしは若い時は年よりだったし、年をとった時は若いものになっている。従って年よりのように欲ほにも渴かわかず、若いもののように色にもおぼれない。とにかくわたしの生涯はたといしあわせではないにしろ、安らかだったのには違いあるまい」、「なるほどそれでは安らかでしょう」、「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。わたしは体からだだも丈夫じやうぶだったし、一生食うに困らぬくらいの財産を持っていたのだよ。しかし一番しあわせだったのはやはり生まれてきた時に年よりだったことだと思っている」。

僕はしばらくこの河童と自殺したトックの話だの毎日医者に見てもらっているゲエルの話だのをしていました。が、なぜか年をとった河童はあまり僕の話などに興味のないような顔をしていました。「ではあなたはほかの河童のように格別かくべつ生きていることに執しゆう着ちやくを持ってはいないのですね？」と、年をとった河童は僕の顔を見ながら、静かにこう返事をしました。——「わたしもほかの河童のようにこの国へ生まれてくるかどうか、一応父親に尋ねられてから母親の胎内を離れたのだよ」、「しかし僕はふとした拍子ひらきに、この国へ転ころげ落ちてしまったのです。どうか僕にこの国から出ていかれる路みちを教えてください」、「出ていかれる路は一つしかない」、「というの？」、「それはお前さんのここへ来た路だ」、「僕はこの答えを聞いた時になぜか身の毛がよだちました。「その路があいにく見つからないのです」と言う。

年をとった河童は水々しい目にじっと僕の顔を見つめました。それからやつと体からだを起たこし、部屋へやの隅すみへ歩み寄ると、天井からそこに下がっていた一本の綱つなを引きました。すると今まで気のつかなかった天窓あまどが一つ開きました。そのまた円まるい天窓の外には松や檜ひのきが枝を張った向こうに大空おおぞらが青あおと晴れ渡っています。いや、大きい鋸のこぎりに似た槍やりヶ岳たけの峯もそびえています。僕は飛行機を見た子どものように実際飛び上がって喜びました。「さあ、あすこから出ていくがいい」と、年をとった河童はこう言いながら、さっきの綱を指さしました。今まで僕の綱つなと思っていたのは実は綱梯子つなはしごにできていたのです。

「ではあすこから出さしてもらいます」、「ただわたしは前もって言うがね。出ていって後悔しないように」、「大丈夫です。僕は後悔などはしません」と、僕はこう返事をするが早いかな、もう綱梯子をよじ登っていました。年をとった河童の頭の皿をはるか下にながめながら。

一七、今は精神病室に居て、知り合った河童たちの見舞いを受けている

僕は河童の国から帰ってきた後、しばらくは我々人間の皮膚の匂いに閉口しました。我々人間に比べれば、河童は実に清潔なものです。のみならず我々人間の頭は河童ばかり見ていた僕にはいかにも気味の悪いものに見えました。これはあるいはあなたにはおわかりにならないかもしれません。しかし目や口はともかくも、この鼻というものは妙に恐ろしい気を起こさせるものです。僕はもちろんできるだけ、だれにも会わない算段をしました。が、我々人間にもいつか次第に慣れ出したとみえ、半年ばかりたつうちにどこへでも出るようになりました。ただそれでも困ったことは何か話をしていううちにうっかり河童の国の言葉を口に出してしまうことです。

「君はあしたは家にいるかね?」、「Qua」、「なんだって?」、「いや、いるということだよ」と、だいたいこういう調子だったものです。しかし河童の国から帰ってきた後、ちょうど一年ほどたった時、僕はある事業の失敗したために……(S博士は彼がこう言った時、「その話はおよしなさい」と注意をした。なんでも博士の話によれば、彼はこの話をするたびに看護人の手にもおえないくらい、乱暴になるとかいうことである。)

ではその話はやめましょう。しかしある事業の失敗したために僕はまた河童の国へ帰りたいと思ひ出しました。そうです。「行きたい」ではありません。「帰りたい」と思ひ出したのです。河童の国は当時の僕には故郷のように感ぜられましたから。

僕はそつと家を脱け出し、中央線の汽車へ乗ろうとしました。そこをあいにく巡査にかまり、とうとう病院へ入れられたのです。僕はこの病院へはいつた当座も河童の国のこととを想いつづけました。医者やチャックはどうしているでしょう? 哲学者のマグも相変わらず七色の硝子のランタアンの下に何か考えているかもしれません。ことに僕の親友だった嘴の腐った学生のラップは、——あるきょうのように曇った午後です。こんな追憶にふけていた僕は思はず声をあげようと思いました。それはいつの間にはいつてきたか、バッグという漁夫の河童が一匹、僕の前にたたずみながら、何度も頭を下げていたからです。僕は心をと直した後、——泣いたか笑ったかも覚えていません。が、とにかく久しぶりに河童の国の言葉を使うことに感動していたことはたしかです。

「おい、バッグ、どうして来た?」、「へい、お見舞いに上がったのです。なんでも御病気だとかいうことですから」、「どうしてそんなことを知っている?」、「ラデオのニウスで知ったのです」と、バッグは得意そうに笑っているのです。「それにしてもよく来られたね?」、「なに、造作はありません。東京の川や掘割りは河童には往來も同様ですから」と言うのであった。

僕は河童も蛙のように水陸両棲の動物だったことに今さらのように気がつきました。「しかしこの辺には川はないがね」、「いえ、こちらへ上がったのは水道の鉄管を抜けてきたのです。それからちよつと消火栓をあけて……」、「消火栓をあけて?」、「旦那はお

忘れなすったのですか？ 河童にも機械屋のいるということ。

それから僕は二三日ごとにいろいろの河童の訪問を受けました。僕の病はS博士はかせによれば早発性痴呆症そうはつせいちほうしょうじょうということ。しかしあの医者いしやのチャックは（これははなはだあなたにも失礼に当たるのに違いありません）。僕は早発性痴呆症患者そうはつせいちほうしょうじょうじゆうではない、早発性痴呆症患者はS博士をはじめ、あなたが自身だと言っていました。医者いしやのチャックも来るくらいですから、学生のラップや哲学者のマググの見舞いにきたことはもちろんです。が、あの漁夫りようしのバッグのほかに昼間はだれも尋ねてきません。ことに二三匹いっしょに来るのは夜、——それも月のある夜です。僕はゆうべも月明りの中に硝子会社ガラスの社長のゲエルや哲学者のマググと話をしました。のみならず音楽家のクラバックにもヴァイオリンを一曲弾ひいてもらいました。そら、向こうの机の上に黒百合くろゆりの花束がのっているでしょう？ あれもゆうべクラバックが土産みやげに持ってきてくれたものです。……

（僕は後ろを振り返ってみました。が、もちろん机の上には花束も何ものつていなかった。）それからこの本も哲学者のマググがわざわざ持ってきてくれたものです。ちよつと最初の詩を読んでごらんさい。いや、あなたは河童の国の言葉を御存知になるはずはありません。では代わりに読んでみましょう。これは近ごろ出版になったトックの全集の一冊です。——

（彼は古い電話帳をひろげ、こういう詩をおお声に読みはじめた。）

——椰子やしの花や竹の中に

仏陀ぶつだはとうに眠っている。

路みちばたに枯れた無花果いちじくといっしょに
基督キリストももう死んだらしい。

しかし我々は休まなければならぬ
たとい芝居しばいの背景の前にも。

（そのまた背景の裏を見れば、継ぎはぎだらけのカンヴァスばかりだ？）——

けれども僕はこの詩人のように厭世的えんせいてきではありません。河童たちの時々来てくれる限りは、——ああ、このことは忘れていました。あなたは僕の友だちだった裁判官のペップを覚えていてでしょう。あの河童は職を失った後のち、ほんとうに発狂してしまいました。なんでも今は河童の国の精神病院にいます。僕はS博士はかせさえ承知してくれれば、見舞いにいってやりたいのですがね……。*（完）

*

*

遺言

僕等人間は一事件の為に容易に自殺などするものではない。僕は過去の生活の総決算の為に自殺するのである。しかしその中でも大事件だったのは僕が二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したことである。僕は罪を犯したことに良心の呵責は感じていない。唯相手を選ばなかった為に（秀夫人の利己主義や動物的本能は実に甚しいものである）。僕の生存に不利を生じたことを少からず後悔している。なほ又僕と恋愛関係に落ちた女性は秀夫人ばかりではない。しかし僕は三十歳以後に新たに情人をつくったことはなかった。これも道徳的につくらなかつたのではない。唯情人をつくることの利害を打算した為である。（しかし恋愛を感じなかつた訣ではない。僕はその時に「越し人」「相聞」等の抒情詩を作り、深入りしない前に脱却した）。僕は勿論死にたくない。しかし生きているのも苦痛である。他人は父母妻子もあるのに自殺する阿呆を笑うかも知れない。が、僕は一人ならば或は自殺しないであろう。僕は養家に人となり、我儘らしい我儘を言ったことはなかった。（と言ふよりも寧ろ言い得なかつたのである。僕はこの養父母に対する「孝行に似たもの」も後悔している。しかしこれも僕にとってはどうすることも出来なかつたのである）。今僕が自殺するのは一生に一度の我儘かも知れない。僕もあらゆる青年のようにいろいろの夢を見たことがあった。けれども今になって見ると、畢竟氣違ひの子だったのであろう。僕は現在は僕自身には勿論、あらゆるものに嫌悪を感じている。

芥川龍之介

P.S. 僕は支那へ旅行するのを機会にやっと秀夫人の手を脱した。（僕は洛陽の客棧にストリントベリーの「痴人の懺悔」を読み、彼も亦僕のように情人を書いているのを知り、苦笑したことを覚えている）。その後は一指も触れたことはない。が、執拗に追いかけるのには常に迷惑を感じていた。僕は僕を愛しても、僕を苦しめなかつた女神たちに（但しこの「たち」は二人以上の意である。僕はそれほどドン・ジュアン《『女たらし或いは色男』ではない）。衷心の感謝を感じている。

わが子等に

- 一、人生は死に至る戦いなることを忘るべからず。
- 二、従つて汝等の力を恃むことを勿れ。汝等の力を養うを旨とせよ。
- 三、小穴隆一を父と思へ。従つて小穴の教訓に従うべし。
- 四、若しこの人生の戦いに破れし時には汝等の父の如く自殺せよ。但し汝等の父の如く 他に不幸を及ぼすを避けよ。
- 五、茫茫たる天命は知り難しと雖も、努めて汝等の家族に恃まず、汝等の欲望を抛棄せよ。是反つて汝等をして後年汝等を平和ならしむる途なり。
- 六、汝等の母を憐憫せよ。然れどもその憐憫の為に汝等の意志を枉ぐべからず。是亦却つて汝等をして後年汝等の母を幸福ならしむべし。
- 七、汝等は皆汝等の父の如く神経質なるを免れざるべし。殊にその事実注意到注意せよ。
- 八、汝等の父は汝等を愛す。（若し汝等を愛せざらん乎、或は汝等を棄てて顧みざる

べし。汝等を棄てて顧みざる能はば、生路も亦なきにしもあらず)

芥川文子あて

芥川龍之介

追記。この遺書は僕の死と共に文子より三氏に示すべし。尚又右の条件の実行せられたる後は火中することを忘るべからず。

再追記 僕は万一新潮社より抗議の出づることを懼るる為に別紙に4を認めて同封せんとす。

4 僕の作品の著作権は（若し出版するものとせん乎）岩波茂雄氏に譲与すべし。（僕の新潮社に対する契約は破棄す）。僕は夏目先生を愛するが故に先生と出版書肆を同じうせんことを希望す。但し装幀は小穴隆一氏を煩わすことを条件とすべし。（若し岩波氏の承諾を得ざる時は既に本となるものの外は如何なる書肆よりも出すべからず）。勿論出版する期限等は全部岩波氏に一任すべし。この問題も谷口氏の意力に待つこと多かるべし。（以下省略）

*

*

「参考文献」

- ※底本「仙人」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「仙人」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「仙人」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「杜子春」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「女仙」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「女体」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「蜜柑」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「運」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「鼻」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「芋粥」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「遺言」芥川龍之介著（「青空文庫」）